

上
武
士
・
堀
北
遺
跡

上武士・堀北遺跡

主要地方道伊勢崎深谷線(東毛広幹道【境工区】)社会資本総合整備
(地域住宅支援)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



埋蔵文化財発掘調査報告書
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一三

群馬県埋蔵文化財調査事業団
群馬県埋蔵文化財調査事業団

2013

群馬県伊勢崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

上武士・堀北遺跡

主要地方道伊勢崎深谷線(東毛広幹道【境工区】)社会資本総合整備
(地域住宅支援)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

群馬県伊勢崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



Ⅲ区方形周溝墓全景 南東より



Ⅱ区出土紡錘車

序

県内地域間のアクセス時間を短縮し、地域間交流を活性化させることを目的とした広域幹線道路整備事業の一環として、主要地方道伊勢崎深谷線(東毛広域幹線道路〔境工区])バイパス事業が計画されました。木島交差点を経て東毛広域幹線道路と伊勢崎市街地が結ばれることによる利用者の利便性向上が目的です。現在、平成25年度の供用開始を目指し、事業が進められております。

本報告の上武士・堀北遺跡は、このバイパス建設工事計画に伴い、平成22年10月より平成22年12月までの間に第一次発掘調査を、平成24年6月に第二次の発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、縄文時代の集落跡・古墳時代の方形周溝墓群や奈良・平安時代の集落跡などが検出されました。今回の発掘調査で発見された遺物・遺構は、発掘調査例の少ない地域にあって、周辺の歴史解明の貴重な資料となるものと思われれます。今後、活用されれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業、報告書の刊行に至るまで、県土整備部道路整備課、伊勢崎土木事務所、群馬県教育委員会、伊勢崎市教育委員会、地元関係者の皆様には、多大なご指導・ご協力を賜りました。本報告書の刊行に際し、関係者の皆様に心から感謝を申し上げ、序といたします。

平成25年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 須田 榮 一

例 言

- 1 本書は、(主)伊勢崎深谷線(東毛広域幹線道【境工区】)社会資本総合整備(地域住宅支援)事業に伴い発掘調査された上武士・堀北遺跡(かみたけしほりきたいせき)の発掘調査報告書である。
- 2 上武士・堀北遺跡は、群馬県伊勢崎市境上武士1205番地他に所在する。遺跡名については当該市教育委員会の登録名称に準拠した。遺跡名の「・」は大字・小字を意味し、複数遺跡の並記ではない。
- 3 事業主体 群馬県伊勢崎土木事務所
- 4 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(平成24年4月公益財団法人に変更)
- 5 調査期間 第一次調査/平成22年10月1日～平成22年12月31日(Ⅰ・Ⅱ区)
第二次調査/平成24年6月1日～平成24年6月30日(Ⅲ・Ⅳ区)
- 6 調査面積 第一次調査(Ⅰ・Ⅱ区) 4,359.0㎡、第二次調査(Ⅲ・Ⅳ区) 1,339.0㎡
- 7 発掘調査体制および委託は次の通りである。
[平成22年度]第一次調査
発掘調査担当 井川達雄〔上席専門員〕、長谷川博幸〔調査研究員〕
遺跡掘削工事請負 須賀工業株式会社
地上測量委託 株式会社シン技術コンサル
自然科学分析委託 株式会社火山灰考古学研究所(テフラ分析・同定)
[平成24年度]第二次調査
発掘調査担当 斉藤利昭〔上席専門員〕、藤井義徳〔主任調査研究員〕
遺跡掘削工事請負 有限会社高澤考古学研究所
地上測量委託 株式会社シン技術コンサル
自然科学分析委託 株式会社火山灰考古学研究所(テフラ分析・同定)
- 8 整理期間 平成24年4月1日～平成25年1月31日
- 9 履行期間 平成24年4月1日～平成25年3月31日
- 10 本書作成の担当者は次の通りである。
編集 桜岡正信〔資料統括〕 デジタル編集 斎田智彦〔主任調査研究員〕
保存処理 関 邦一〔補佐(総括)〕 遺物写真撮影 佐藤元彦〔補佐(総括)〕
執筆 谷藤彦彦〔上席専門員〕第4章2節縄文土器観察表、岩崎泰一〔上席専門員〕第4章2節石器・石製品観察表、桜岡正信 第4章2節古墳～奈良平安時代遺物観察表、新倉明彦〔上席専門員〕上記以外
- 11 出土石器・石製品の石材同定については飯島静男氏(群馬県地質研究会会員)にお願いした。
- 12 発掘調査及び報告書作成には、伊勢崎土木事務所、群馬県教育委員会、伊勢崎市教育委員会をはじめ、関係機関ならびに関係各位に多くのご協力・ご指導を頂いた。群馬県教育委員会文化財保護課主幹高島英之氏には刻字紡錘車の文字判読を、また、赤堀歴史資料館館長坂爪久純氏には用水路・道路遺構についてのご教示を頂いた。
- 13 発掘調査資料及び出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

- 1 本文挿図の遺構実測図中にある+印は、世界測地系座標の位置を示し、その名称には座標値のX値・Y値下3桁を記した。また、図中の方位記号は、同座標第IX系の北位を示す。遺構実測図中の●印は出土遺物を示す。
- 2 発掘調査時の資料との整合性を保つため、原則として調査時に付した番号を踏襲し、変更したものは()内に旧称を記した。
- 3 遺構の主軸方位は、座標北を基準として、カマドを有する住居はカマドがある壁を軸上に、それ以外の遺構は長軸の傾きをそれぞれ計測した。
- 4 遺構計測値で、全容が計測できない遺構については、()で検出部の値を記した。
- 5 挿図の縮尺については、原則として以下のとおり掲載した。

〔遺構図〕 住居・竪穴状遺構・掘立柱建物・土坑・ピット・井戸 1:60、溝・方形周溝墓・水田 1:80

〔遺物図〕 土器 1:3、石器 1:1・1:2・1:3・1:4・1:6

- 6 遺物の計測値で、欠損品の場合は、()で残存部の値を記した。
- 7 遺物観察表や土層注記文中の色調は、農林水産省技術会議監修、(財)日本色彩研究所色票監修「新版 標準土色帖」1996年版の色名を使用した。
- 8 遺物観察表での表現は、以下のとおりである。
 - ・遺物番号は、観察表・実測図・遺物写真共に一致する。
 - ・土器・土製品胎土の細砂粒と粗砂粒とは、直径2mmを境に区別した。
 - ・成・整形の特徴の項目にあるハケ目の本数は、1cmあたりの本数を示す。
 - ・土器計測位置の表現は、口径=口、底径=底、器高=高と略記した。
- 9 挿図中で使用したトーンは、次のとおりである。

〔遺構図〕



Hir-FA



灰



焼土



攪乱

〔遺物図〕



赤彩



灰釉

- 10 遺物実測図の縄文土器断面の●印は、胎土に繊維が混入していることを示す。

石器実測図の線と拓本の表現は、次のことを指している。

石斧刃部側の磨耗痕は縦位定規線で図示した。磨石に用いた縦位定規線は磨耗範囲を示す。

砥石の使用部は必要に応じて拓本を使用した。

- 11 本書で使用した地形図・地勢図は、以下のとおりである。

国土地理院地勢図	1:200,000「宇都宮」	平成18年4月1日発行	「高崎」	平成10年12月1日
国土地理院地形図	1:25,000「伊勢崎」	平成15年2月1日発行	「桐生足利」	平成11年6月1日
国土地理院地形図	1:25,000「上野境」	平成14年12月1日発行	「深谷」	平成10年9月1日
伊勢崎市 現況図	1:2,500 No.51	平成22年10月測量	「前橋」	平成10年3月1日

(伊勢崎市転載許可済)

目 次

第1章 調査に至る経過		
第1節 調査に至る経過	1	
第2章 遺跡の立地と環境		
第1節 遺跡の立地(地理的環境)	3	
第2節 歴史的環境	5	
第3章 調査の方法と経過		
第1節 調査の方法と経過	10	
第2節 基本土層	12	
第3節 整理作業	14	
第4章 遺構と遺物		
第1節 検出遺構の概要	14	
第1項 I・II区の概要	14	
第2項 III・IV区の概要	14	
第2節 検出遺構と出土遺物	19	
第1項 竪穴住居・竪穴状遺構	19	
第2項 掘立柱建物	30	
第3項 井戸・土坑・ピット	31	
第4項 溝	38	
第5項 方形周溝墓	52	
第6項 水田	55	
第7項 自然災害跡(地割れ・噴砂)	55	
第8項 遺構外出土遺物	57	
第5章 自然科学分析		
第1節 遺跡における		
自然科学分析結果について	73	
第1項 自然科学分析実施の経緯	73	
第2項 自然科学分析結果報告の概要	73	
第3節 所見	73	
第2節 遺跡の土層とテフラ	73	
第1項 はじめに	73	
第2項 土層の層序	74	
第3項 テフラ検出分析	74	
第4項 屈折率測定	76	
第5項 考察	76	
第6項 まとめ	77	
第3節 遺跡における		
プラント・オパール分析	78	
第1項 はじめに	78	
第2項 試料	78	
第3項 分析法	78	
第4項 分析結果	78	
第5項 考察	78	
第6項 まとめ	80	
第6章 調査の成果	82	
報告書抄録		
写真図版		
奥付		
付図 遺跡全体図		

挿 図 目 次

第1図	道跡位置図	1
第2図	道跡調査区位置図	2
第3図	地形分類図	4
第4図	周辺道跡位置図	9
第5図	調査区範囲図	11
第6図	基本土層柱状図Ⅰ区	12
第7図	基本土層柱状図Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区	13
第8図	Ⅰ区全体図	15
第9図	Ⅱ区全体図	16
第10図	Ⅲ区全体図	17
第11図	Ⅳ区3面全体図	17
第12図	Ⅳ区4・5面全体図	18
第13図	Ⅰ区1号住居遺構図(1)	19
第14図	Ⅰ区1号住居遺構図(2)・遺物図	20
第15図	Ⅰ区2号住居遺構図(1)	21
第16図	Ⅰ区2号住居遺構図(2)	22
第17図	Ⅰ区2号住居遺構図	23
第18図	Ⅰ区3号住居遺構図	24
第19図	Ⅰ区3号住居遺物図	25
第20図	Ⅰ区4号住居遺構図(1)	26
第21図	Ⅰ区4号住居遺構図(2)・遺物図	27
第22図	Ⅰ区1・2号竪穴状遺構遺構図	28
第23図	Ⅲ区1号竪穴状遺構遺構図	29
第24図	Ⅰ区1号掘立柱建物遺構図(1)	30
第25図	Ⅰ区1号掘立柱建物遺構図(2)	31
第26図	Ⅰ区1～8号土坑遺構図	32
第27図	Ⅰ区10～12号土坑・1号井戸遺構図、 1・7・8・10・11号土坑遺物図	33
第28図	Ⅰ区11・12号土坑、Ⅲ区1・6号土坑、 Ⅳ区2・8号土坑遺物図	34

第29図	Ⅲ区1～6・Ⅳ区1～3号土坑遺物図、 Ⅳ区6号土坑遺物図	35
第30図	Ⅳ区4～9号土坑、1・2号ピット遺構図	36
第31図	Ⅰ区1号溝遺構図	39
第32図	Ⅰ区2号溝遺構図	40
第33図	Ⅰ区3・4号溝遺構図	41
第34図	Ⅰ区5・10号溝遺構図	42
第35図	Ⅰ区7～9号溝遺構図	43
第36図	Ⅱ区1・3号溝遺構図(1)	44
第37図	Ⅱ区1・3号溝遺構図(2)	45
第38図	Ⅱ区2号溝遺構図・遺物図	46
第39図	Ⅲ区1・2・5号溝遺構図	47
第40図	Ⅲ区3・4号溝遺構図(1)	48
第41図	Ⅲ区3・4号溝遺構図(2)	49
第42図	Ⅲ区6号溝遺構図	49
第43図	Ⅳ区1・2号溝遺構図	49
第44図	Ⅳ区3～5号溝遺構図	50
第45図	Ⅲ区1号方形周溝遺構図	52
第46図	Ⅲ区2号方形周溝遺構図・遺物図	54
第47図	Ⅳ区洪水下り水田遺構図	56
第48図	Ⅰ区遺構外遺物図(1)	57
第49図	Ⅰ区遺構外遺物図(2)	58
第50図	Ⅰ区遺構外遺物図(3)	59
第51図	Ⅰ区遺構外遺物図(4)	60
第52図	Ⅱ区遺構外遺物図(1)	61
第53図	Ⅱ区遺構外遺物図(2)	62
第54図	Ⅱ区遺構外遺物図(3)	63
第55図	Ⅲ・Ⅳ区遺構外遺物図	63
第56図	Ⅲ・Ⅳ区土層柱状図1～3	75
第57図	道跡におけるプラント・オパール分析結果	79

表 目 次

第1表	周辺道跡一覧表	6
第2表	住居一覧表	27
第3表	竪穴状遺構一覧表	28
第4表	掘立柱建物一覧表	31
第5表	土坑一覧表	37
第6表	ピット一覧表	37
第7表	井戸一覧表	37

第8表	溝一覧表	51
第9表	縄文土器観察表	64
第10表	石器・石製品観察表	70
第11表	古墳～奈良平安時代出土遺物観察表	72
第12表	テララ検出分析結果	75
第13表	屈折率測定結果	77

写 真 目 次

口絵	Ⅲ区方形周溝墓全景 南東より		
	Ⅱ区出土紡錘車		
PL. 1	調査区全景 西より		
	調査区周辺 南東より		
PL. 2	調査区周辺 南より		
	調査区周辺 南より		
PL. 3	Ⅰ区全景 東より		
	Ⅰ区全景 東より		
PL. 4	Ⅰ区全景 北より		
	Ⅰ区全景 東より		
PL. 5	Ⅰ区全景 東より		
	Ⅰ区全景 南東より		
PL. 6	Ⅰ区縄文面調査風景 南より		
	Ⅰ区縄文面調査風景 西より		
PL. 7	Ⅰ区縄文面全景 東より		
	Ⅰ区縄文面トレンチ全景 西より		
PL. 8	Ⅰ区縄文面トレンチ(確認) 西より		
	Ⅰ区1号住居全景 南西より		
PL. 9	Ⅰ区1号住居竈全景 西より		
	Ⅰ区1号住居竈掘り方全景 南西より		
	Ⅰ区1号住居貯蔵穴 南東より		
	Ⅰ区1号住居貯蔵穴A-A'断面 南西より		
	Ⅰ区1号住居掘り方全景 南西より		
PL.10	Ⅰ区2号住居全景 西より		
	Ⅰ区2号住居炉内埋薬1 検出状況 東より		
	Ⅰ区2号住居炉内埋薬1 出土状態 東より		
	Ⅰ区2号住居炉内埋薬1 出土状態 東より		
	Ⅰ区2号住居掘り方全景 西より		
PL.11	Ⅰ区2号住居遺物出土状態 西より		
	Ⅰ区2号住居埋薬2 出土状態 東より		
	Ⅰ区2号住居埋薬2 出土状態 北より		
	Ⅰ区2号住居埋薬2 出土状態断面 東より		
	Ⅰ区2号住居掘り方全景 西より		
PL.12	Ⅰ区3号住居全景 西より		
	Ⅰ区3号住居遺物出土状態 西より		
PL.13	Ⅰ区3号住居埋薬炉検出状況 東より		
	Ⅰ区3号住居埋薬炉出土状態 東より		
	Ⅰ区3号住居掘り方全景 東より		
	Ⅰ区3号住居ピット5 遺物出土状態 東より		
	Ⅰ区4号住居使用面全景 南より		
PL.14	Ⅰ区4号住居全景 南より		
	Ⅰ区4号住居遺物出土状態 南より		
	Ⅰ区4号住居掘り方全景 東より		
	Ⅰ区4号住居埋薬炉検出状況 東より		
	Ⅰ区4号住居埋薬炉出土状態 東より		
PL.15	Ⅲ区1号竪穴状遺構全景 南西より		
	Ⅲ区1号竪穴状遺構全景 南西より		
	Ⅲ区1号竪穴内1号ピットA-A'断面 西より		
	Ⅲ区1号竪穴内2号ピットA-A'断面 南より		
	Ⅲ区1号竪穴内3号ピットA-A'断面 西より		
PL.16	Ⅰ区1号竪立柱建物全景 南東より		
	Ⅰ区1号竪立柱建物全景 北より		
PL.17	Ⅰ区1号土坑全景 南より		
	Ⅰ区2号土坑全景 西より		
	Ⅰ区3号土坑全景 西より		
	Ⅰ区4号土坑全景 西より		
	Ⅰ区5号土坑全景 南より		
	Ⅰ区6号土坑全景 西より		
	Ⅰ区7号土坑全景 南西より		
	Ⅰ区8号土坑全景 南より		
PL.18	Ⅰ区8号土坑遺物出土状態 北より		
	Ⅰ区10号土坑全景 南より		
	Ⅰ区11号土坑遺物出土状態 北東より		
	Ⅰ区11号土坑掘り方全景 北東より		
	Ⅰ区12号土坑全景 北東より		
	Ⅰ区1号井戸全景 北より		
	Ⅰ区1号井戸壁堆積状況 北より		
PL.19	Ⅲ区1号土坑全景 東南より		
	Ⅲ区1号土坑遺物出土状態 東南より		
	Ⅲ区1号土坑A-A'断面 南より		
	Ⅲ区1・2・4・5号土坑全景 南西より		
	Ⅲ区2号土坑A-A'断面 南より		
	Ⅲ区3号土坑全景 北より		
	Ⅲ区6号土坑全景 南より		
	Ⅲ区6号土坑A-A'断面 南より		
PL.20	Ⅳ区1号土坑全景・A-A'断面 東より		
	Ⅳ区2号土坑全景 南東より		
	Ⅳ区3号土坑全景 南より		

	Ⅳ区4号土坑全景・A-A'断面 東より	PL.31	Ⅳ区1・2号溝全景 南より
	Ⅳ区5号土坑全景 南より		Ⅳ区1・2号溝全景 北より
	Ⅳ区5号土坑A-A'断面 北より		Ⅳ区3号溝全景 南西より
	Ⅳ区6号土坑全景 東より		Ⅳ区3号溝全景 南西より
	Ⅳ区6号土坑A-A'断面 南より		Ⅳ区4号溝全景 南より
PL.21	Ⅳ区7号土坑全景 南より		Ⅳ区4号溝全景 西より
	Ⅳ区8号土坑全景 北西より		Ⅳ区4号溝A-A'断面 南より
	Ⅳ区8号土坑遺物出土状態 北西より	PL.32	Ⅲ区1・2号方形埴溝墓調査区全景 北西より
	Ⅳ区1号ピットA-A'断面 南より		Ⅲ区1・2号方形埴溝墓全景 北西より
	Ⅳ区1・2号ピット全景 東北より	PL.33	Ⅲ区1号方形埴溝墓全景 東より
PL.22	Ⅰ区1号溝全景 南西より		Ⅲ区1号方形埴溝墓全景 北西より
	Ⅰ区2号溝全景 西より		Ⅲ区1号方形埴溝墓全景 北西より
	Ⅰ区3・4号溝全景 北より		Ⅲ区1号方形埴溝墓B-B'断面 北より
	Ⅰ区5号溝全景 北より		Ⅲ区2号方形埴溝墓全景 南東より
PL.23	Ⅰ区7・8号溝全景 北より	PL.34	Ⅲ区2号方形埴溝墓全景 南東より
	Ⅰ区9号溝全景 北より		Ⅲ区2号方形埴溝墓全景 北より
	Ⅱ区全景 北より	PL.35	Ⅲ区2号方形埴溝墓全景 南より
PL.24	Ⅱ区全景 北より		Ⅲ区2号方形埴溝墓内1・2号土坑全景 西より
	Ⅱ区全景 東より		Ⅲ区2号方形埴溝墓B-B'断面 南東より
	Ⅱ区1～3号溝全景 南東より		Ⅲ区2号方形埴溝墓C-C'断面 南西より
	Ⅱ区防鉢車出土状態 南東より		Ⅲ区2号方形埴溝墓D-D'断面 南より
	Ⅱ区防鉢車出土状態 南東より	PL.36	Ⅳ区洪水下水田全景 北より
PL.25	Ⅲ区全景 北西より		Ⅳ区洪水下水田全景 南より
	Ⅲ区全景 南東より		Ⅳ区洪水下水田全景 南より
PL.26	Ⅲ区1・2号溝全景 北東より		Ⅳ区洪水下水田全景 南より
PL.27	Ⅲ区1号溝全景 北東より	PL.37	Ⅰ区1～3号住居出土遺物
	Ⅲ区2号溝全景 北東より	PL.38	Ⅰ区3・4号住居、1・7・8・10・11号土坑出土遺物
	Ⅲ区1号溝A-A'断面 南西より	PL.39	Ⅰ区11・12号、Ⅲ区1・6号、Ⅳ区2・6・8号土坑、Ⅱ区2号溝、Ⅲ区2号方形埴溝墓、Ⅰ区遺構外出土遺物 1～6
	Ⅲ区2号溝A-A'断面 南西より	PL.40	Ⅰ区遺構外出土遺物 7～53
	Ⅲ区1号溝B-B'断面 南西より	PL.41	Ⅰ区遺構外出土遺物 54～91
	Ⅲ区2号溝B-B'断面 南西より	PL.42	Ⅰ区遺構外出土遺物 92～121
PL.28	Ⅲ区3・4号溝全景 北西より	PL.43	Ⅱ区遺構外出土遺物 1～33
	Ⅲ区3・4号溝全景 北西より	PL.44	Ⅱ区遺構外出土遺物 34～46、Ⅲ区遺構外出土遺物 1～10、Ⅳ区遺構外出土遺物 1・2
PL.29	Ⅲ区3号溝B-B'断面 南東より		
	Ⅲ区4号溝A-A'断面 南東より		
	Ⅲ区5号溝全景 南東より		
	Ⅲ区6号溝全景 東より		
	Ⅲ区5号溝全景 南東より		
	Ⅲ区6号溝A-A'断面 北東より		
PL.30	Ⅳ区不発弾処理状況 北西より		
	Ⅳ区全景 東より		

第1章 調査に至る経過

第1節 調査に至る経過

東毛広域幹線道路は、地域間のアクセス時間を短縮し、地域間交流を豊かにすることを目的に、JR高崎駅東口を起点とし、玉村町・伊勢崎市・太田市・館林市を通り、板倉町まで至る総延長距離58.61kmの広規格道路として設計された。経路上で高崎駅東口線・国道354号・主要地方道高崎伊勢崎線・主要地方道伊勢崎深谷線・東毛幹線などのバイパスや都市計画道と連結し、群馬県の中毛から東毛までを東西に貫く新たな動脈として、その完成が期待されている。

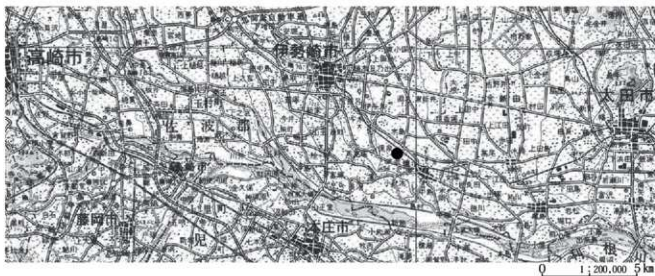
折しも伊勢崎市は、平成17年1月1日に旧佐波郡境町と合併を行い、新たに都市環境の整備を図ることとなったが、市街地から旧境町に至る県道伊勢崎深谷線では朝夕を中心に慢性的な渋滞が発生していたため、その解消が急務となっていた。そこで、県道伊勢崎深谷線のバイパス道として東毛幹線道路のうち伊勢崎市を通過する11.67kmの工事が進められることとなり、このうち境工区の2.85kmの1.45kmを伊勢崎市が、残る1.40kmを群馬県がそれぞれ施行することとなった。

群馬県は、当該路線が周知の埋蔵文化財包蔵地を通過することが判明したため、埋蔵文化財の取扱いにかかわる行政的な措置が必要となった。群馬県教育委員会は、

工事主体である群馬県中部県民局伊勢崎土木事務所からの照会を受け、発掘調査の必要性とその範囲を確定するため、文化財保護課が平成21年11月に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、木鳥・下久保遺跡と上武士・堀北遺跡の2地点で遺構と遺物の存在が確認されたため、埋蔵文化財に対する保護の措置が必要である旨を伊勢崎土木事務所に通知すると共に、取扱いについての協議を行った。その結果、工事計画の変更は困難との判断から、記録保存のための緊急発掘調査の実施が決定された。

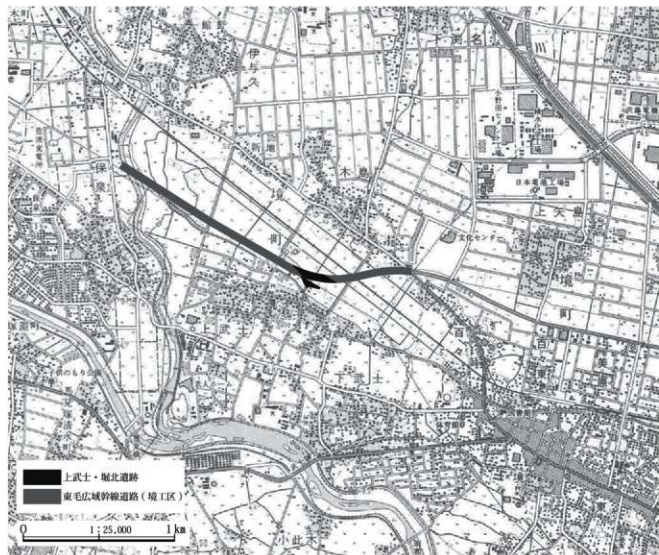
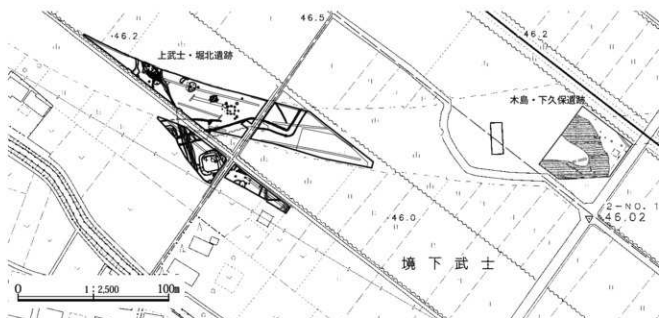
発掘調査は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（現公益財団法人）が実施することとなり、平成21年2月1日付けで伊勢崎土木事務所との間で受託契約が締結された。調査工程は、東武鉄道伊勢崎線の高架橋部にあたる木鳥・下久保遺跡(2,023.37m)を先行し、平成22年1月から一ヶ月間発掘調査を行い、上武士・堀北遺跡については、工事工程と調整を図りながら、本線部分にあたる4,359.0mを第一次調査として、平成22年10月から12月までの間、発掘調査を実施することとなった。

調査終了に伴い、本線部・高架橋部の建設工事が進むなか、取付け道部分の1,339.0mについて第二次調査として、平成24年4月1日付けで伊勢崎土木事務所と契約の上、平成24年6月に発掘調査を実施した。



第1図 遺跡位置図

第1章 調査に至る経過



第2図 道跡調査区位置図

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地（地理的環境）

【地形】 遺跡は、関東平野の北西にあたる群馬県南東部、赤城山麓の南西に位置し、周囲の現況は平坦な地で、南には景境をなす利根川が流れる。

遺跡周辺の河川を見ると、北東2kmほどには桐生市新里町奥沢付近に源を発する早川が南東へと流れ、南西1.4kmほどの地点では、赤城山に端を発する粕川が渋川市北橋町で利根川より分水した広瀬川と合流した後に、遺跡南東4.5kmほどの地点で再び利根川と合流する。

赤城山麓の地形の成り立ちを概観すると、赤城山が古期火山活動で2,500m級の成層火山に成長した後に、山頂東南部が水蒸気爆発により崩壊。その泥流が東南斜面を下流（梨木泥流）し泥流丘を形成する。下部ローム層が堆積する中、渡良瀬川により大間々層状地古期（桐原）面、次いで九州の始良カルデラ火山灰（AT）降下直後頃に旧利根川氾濫による浅間起源の前橋泥流が前橋台地を形成し、その後台地が浸食される一方で赤城流出物により伊勢崎台地が形成された。その後も両台地は旧利根川（現広瀬川）の浸食を受けて、広瀬川低地帯が形成された。利根川の変流は著しく、現流路となったのは天文年間（1532～1555）とされる。

遺跡は、この中の比較的新しい段階で形成された砂質土を基盤とする伊勢崎台地上に位置するが、細部では粕川・広瀬川の氾濫の影響を受けて、谷地や微高地が複雑に形成されており、遺跡内でもその様相を見ることが出来る。（第3図 地形分類図を参照）

【沿革】 遺跡の所在地である群馬県伊勢崎市境上武士は、明治22（1889）年の市制・町村制施行により、佐位郡内に境町（旧境村）と下武士村の一部に新田郡境村の一部・采女村（旧上洲名村・下洲名村・東新井村・伊与久村・木島村・百々村）・剛志村（旧下武士村・上武士村・保泉村・中島村・小此木村）・鳥村が設置され、1896年には佐位郡と那波郡の合併により郡名が佐波郡となり、さらに昭和30年に境町・采女村・剛志村・鳥村の合併と昭和32年の世良田村の一部が合併して佐波郡境町となった。平成

17年1月には旧伊勢崎市・佐波郡赤堀町・同郡東村・同郡境町が町村合併し、現在の伊勢崎市となった。

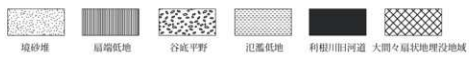
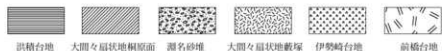
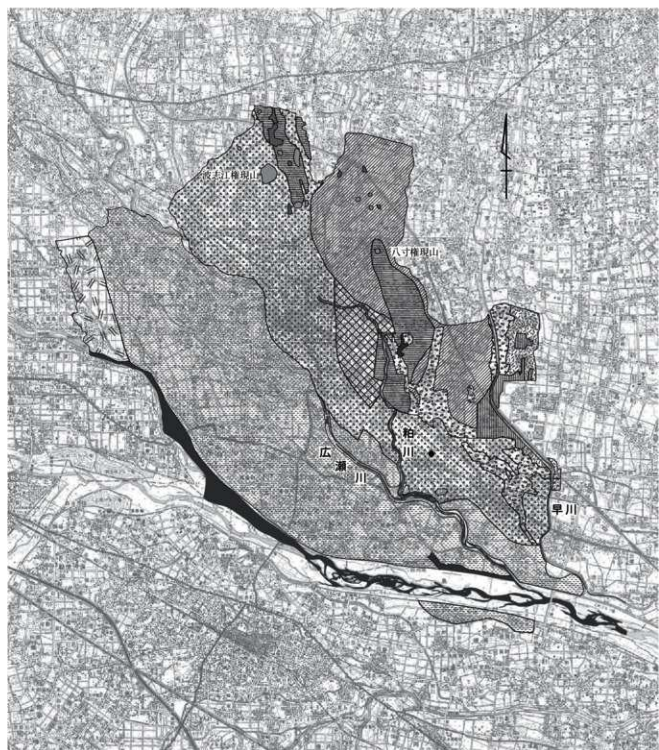
上武士の小字名としては、新井・堀南・堀北・前畑・宮前・西久保がある。（『群馬県小字名調査』）

【交通】 遺跡のすぐ北を東武伊勢崎線が走り、境町駅と剛志駅のほぼ中程近くの地点に遺跡はある。また、北東に2kmほどの所を国道17号線のバイパスである上武道路が走り、南1.3kmには県内の東西幹線道である国道354号線が走る。古くは日光例幣使街道沿線でもあり、遺跡地に建設される主要地方道は国道354号線バイパスなどと接続して東毛広域幹線道となることから、過去・現在・未来共に交通の要所である。

【土地利用】 遺跡周辺は、北側の主要地方道伊勢崎深谷線沿線および南側の国道354号線沿線に集落が集中し、遺跡地の東武伊勢崎線沿線には一面の畑地が広がっている。

近世初頭に切添新田の開発後においても耕地面積の畑方比率は八割強を数え、遺跡地の上武士村に至っては耕作地73町1反全てが畑地となっている。『上野国郡村誌』によれば、上武士村の地味は、「其色赤黒、其質悪く、麦に宜く、桑二適さ。水利便ナラズ、時々旱ニ苦シム。」とある。

遺跡の南100mほどの所を、粕川より取水し早川を渡り世良田（現太田市世良田）へと続く佐波新田用水路（旧世良田御宮御神領用水＝世良田東照宮神田に流水）が流れる。その歴史は古く、慶長13（1608）年頃の開削で、当時は佐位郡茂呂村（現伊勢崎市茂呂）で広瀬川より堰上げ給水していたが、天保11（1840）年には粕川流末水が給源となり、水不足が続いたため、広瀬川よりの古堀敷を復旧した記録が残る。また、度々重なる旱魃・水不足からの水争い・水出入も記されており、付近を流れる粕川・早川からの水利では潤沢ではなかったことを物語っている。なお、この佐波新田用水路が開削当時は「新堀」と称され、遺跡地の小字である堀北・堀南の元となったものと推察される。



引用文献

旧埴町部分：『埴町史 第一巻 自然』1991

旧伊勢崎市部分：『伊勢崎市史 自然編』1984

第3図 地形分類図

第2節 歴史的環境

〔旧石器時代〕 旧石器遺構時代の石器の出土事例として、大間々扇状地棚原面上の台地・微高地に存在が確認されており、上瀧名神谷遺跡(39)・上瀧名遺跡(24)・十三宝塚遺跡(40)・からナイフ形石器・細石刃核・槍先形尖頭器・剥片石器が出土した報告例はあるものの、残念ながらいずれも出土層位が確認できる資料ではない。

〔縄文時代〕 縄文時代の遺構検出例は少なく、本遺跡の調査以前においては、境東小学校前にある北米岡遺跡(10)で後期の竪穴住居と配石遺構が検出されているのみである。遺物の出土例としては、三ツ木遺跡(14)で前期から後期、下瀧名塚越遺跡で早期から後期、上瀧名神谷遺跡で爪形文・燃糸文土器の出土が報告されている。

〔弥生時代〕 弥生時代の検出例も希少で、わずかに三ツ木遺跡と下瀧名塚越遺跡(20)で後期後半の土器片が出土するのみである。

〔古墳時代〕 『上毛古墳総覧』によると、旧境町所在の古墳として昭和10年の分布調査時には、前方後円墳8基・円墳150基・不詳2基の計160基が記録されている。この内、遺跡周辺地域の上武士地区には、前方後円墳3基・円墳36基が、下武士地区には前方後円墳2基・円墳59基が存在したとされる。代表的な古墳としては、上武士字宮前にある天神山古墳[剛志村30号古墳] (42)が挙げられる。武士古墳群の中核をなすと考えられる6世紀末から7世紀初頭の前方後円墳で、前方部および後部の一部が開渠により失われたものの、その出土品としては、重要文化財指定の猪・犬の形象埴輪(東京国立博物館蔵)や同じく重要文化財指定の鶏の形象埴輪(群馬県立歴史博物館蔵)、犬・男子立像(個人蔵、石川県立美術館保管)などの形象埴輪の優品が知られている。総体的に見ると旧境町の古墳分布は、5世紀後半に瀧名台地に出現し、6世紀代には前方後円墳を含み広く盛行し、6世紀後半以降は限定された地域に群集墳が造られ、7世紀末に終焉を迎えるようである。これに先行する墓域として、三ツ木遺跡・出口遺跡(32)で方形周溝墓が、上瀧名裏神谷遺跡(38)で円形周溝墓が検出され、それぞれ4世紀末と考えられている。

一方、集落跡の分布をみると、古墳時代の初頭には低

地周辺の微高地上に点在し、三ツ木遺跡・上矢島遺跡(17)・雷電裡遺跡(37)・土橋遺跡第5地点(35)・出口遺跡・寺家前遺跡(23)・保泉遺跡(5)などの検出事例がある。中期の集落としては、采女小学校校庭遺跡で2軒の住居が検出されている。後期に至ると居住範囲の拡大と共に飛躍的に増大し、大規模集落を形成するようになる。

〔奈良・平安時代〕 律令期の遺跡周辺地域は、佐位郡に比定され、『和名類聚抄』によれば郡内には名橋(奈波之)・雀部(佐々伊部)・美呂(佐位)・瀧名(布知奈)・岸新・反治・駅家の七郷と東山道佐位駅家が存在したとされ、大宝令の五等区分上は中部に当たる。佐位郡については、正倉院蔵の奉獻唐布袋書の記述に、「郡司大領外把前部君賀味麻呂」の名が記され、把前部(ひのくまべ)賀味麻呂は、「外位の位と「君」の姓を賜わり、「大領」の官職にあった佐位郡の郡司であったことが判る。把(檜)前部の名については、『続日本紀』には、郡司家の娘であった檜前部老刀自が朝廷の後宮女官(采女)として従五位下の位と共に、「上毛野佐位朝臣」の姓や「上野国の国造」の称号まで賜ったとの記述があり、また、『続日本後紀』には、隣接の那波郡出身者の左近衛府将監正六位上檜前部公綱主が上毛野朝臣の姓を賜ったとの記録も見られる。このように、把(檜)前部一族は、この時期に広く佐位郡一帯を治めたと共に、中央官人として仕える者も出るなど、朝廷との関係も深かったことを物語る。

この時期の周辺の遺跡としては、本遺跡の北約3kmに仏像片・銅地鍍金押出仏・螺髪などの出土により寺院(郡寺)跡と考えられる十三宝塚遺跡がある。ここから出土した紡錘車に「上毛野朝臣實根」と線刻されていることから、前記の檜前部君との関連も示唆される。十三宝塚遺跡の北側には、古代官道である東山道駅路(牛堀・矢ノ原ルート) (29)が走る。集落跡の遺跡としては、西今井遺跡(15)・下瀧名遺跡・下瀧名塚越遺跡などがあり、水田跡としては伊与久・老町田遺跡(6)や伊与久老町田Ⅱ遺跡(9)から浅間Bテフラ直下水田が検出されている。

〔中世〕 中世に至ると、遺跡周辺地域には二つの荘園が相次いで成立する。大治五(1130)年頃に仁和寺法金剛院所領地として立荘・寄進されたと推察される瀧名荘と、保元二(1157)年に金剛心院所領地として成立した新田荘である。瀧名荘は、ほぼ律令制下の佐位郡を領域として、秀郷流藤原氏の兼行(瀧名大夫)らが開発・寄進し下

司(荘官)を務めたのに対し、新田荘は新田義重らが新田郡西南部の「空閑地」を開発・寄進し、同様に下司として新田郡一円に勢力を拡大していった。隣接する両荘園は、概ね早川を境とし、遺跡周辺地域の木島(木嶋)・女塚・花香塚(はなか塚)の地はその狭間に当たる郷である。享徳四(1455)年の「新田荘田畠在家注文」には荘城である木嶋などの地名に「さかいにとらる」の註釈が加えられており、領地境をめぐる攻防が繰り返されたものと推察される。天文二(1533)年に書写された仁和寺領目録には、「上野国湖名庄 田百九町五反廿五代 畠十八町二反十代」と記されている。

遺跡周辺には、観応二(1351)年12月に足利尊氏・直義兄弟が駿河で対立したことに端を発し、堀名荘木島において両方の一党が合戦となった記録が残るほか、城館としては広瀬川と粕川の合流点の地(現、御嶽山自然の森公園)に位置していた武士城(57)があり、この城は、享徳の乱の最中、文明九(1477)年正月に長尾景春の反乱により山内上杉方の五十子の陣(本庄市)が崩壊した際に、参陣していた岩松家純がこの武士城へ、上杉顕定は富塚城へと利根川を渡り避難した記録が残る。また、戦国期には由良氏の下、領内西端の最防衛拠点となった。その他の城館址として、湖名城・馬見塚城・境城・三ツ木城・西今井館(道忍屋敷)などがある。

〔近世・近代〕 近世の遺跡周辺地域は、幕府直轄領・藩領・旗本領が混在し、上武士村は旗本知行所とされ、幕

末には幕府直轄地となる。耕地のほとんどは畑地であり、時々旱魃に苦しんだ。また、天明三年の浅間山噴火に伴う降灰のほか、風水害や全国規模の大飢饉などの災害記録が残る。交通面では、中山道の倉賀野宿を起点に日光へと続く日光例幣使街道の道筋として、境宿が置かれ、下武士には一里塚が、道筋の沿線には道しるべが現存する。当時を記した資料として、「例幣使街道分間延地図」(東京国立博物館蔵)がある。

農業用水路の整備として、粕川より取水し遺跡の南100mほどを流れる用水路が、慶長13(1608)年に開削された。用水は世良田に東照宮が置かれた寛永21(1644)年以降、御宮神領田に水が引き入れられていたため、「世良田御神領用水(お宮用水)」と称された。幕府崩壊後は、佐波新田用水路として、現在も利用されている。

幕末から明治に至り伊勢崎の地は、養蚕・生絹・太織が盛行し、横浜への出荷ルートも確立され、近代化の波とともに一大産業となった。

〔現代〕 第二次調査時に出土し、伊勢崎警察署および陸上自衛隊朝霞駐屯地の専門班に出土・処理を願った3発の焼夷弾は、太平洋戦争終戦時の昭和20年8月14日から翌未明にかけて行われた米軍機による伊勢崎空襲時に投下されたM69型焼夷弾と判明した。記録によると爆撃の規模は、B29爆撃機86機から焼夷弾61.4tと爆弾27発におよぶもので、その被害は消失家屋1943戸、死者29名、重軽傷者150人余とされている。

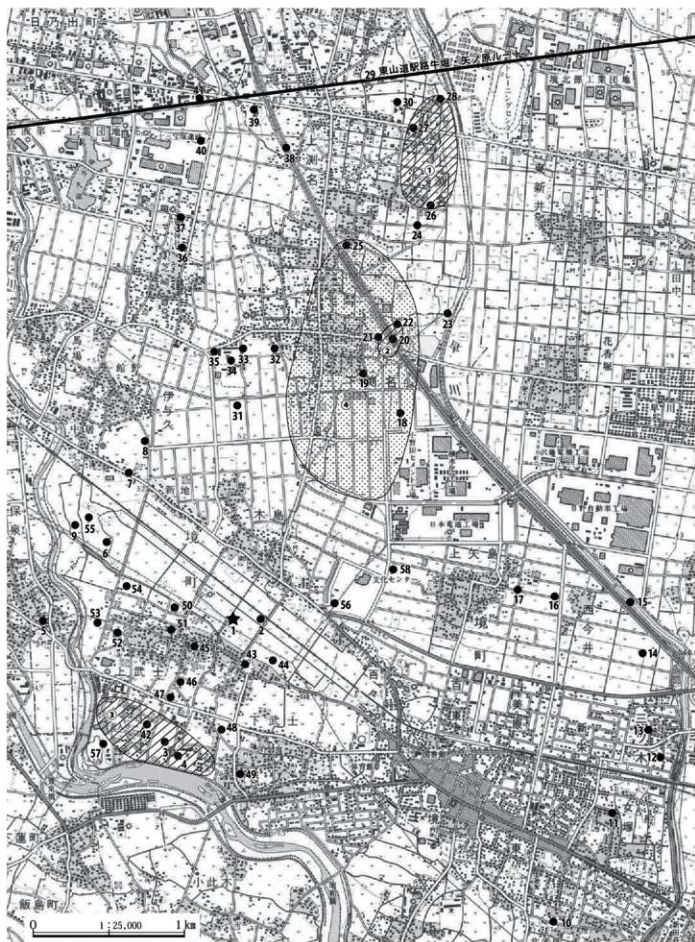
第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	概 要	文 献 等
1	上武士・堀北遺跡	伊勢崎市境上武士	本報告書	
2	木島・下久保遺跡	伊勢崎市境木島	古墳時代の遺物集中部2、土坑1基。平安時代・中近世の土坑11基、ピット3基、溝4条。	(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第543集「木島・下久保遺跡」(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2012
3	武士遺跡	伊勢崎市境上武士	6世紀後半～7世紀代の帆立貝形古墳(剛志村78号墳)1基、円墳8基。	境町文化財調査報告書「武士遺跡」 境町教育委員会 1982 『境町古代遺跡』 境町役場 1978
4	下武士遺跡	伊勢崎市境下武士	近世の土坑1基。時期不明の土坑1基。	境町文化財調査報告書「下武士遺跡」 発掘調査概要 境町教育委員会 1978
5	保泉遺跡	伊勢崎市境保泉	古墳時代の住居2軒。時期不明の土坑、溝。	『境町古代遺跡』 境町役場 1978
6	伊与久・宍町田遺跡	伊勢崎市境伊与久	As-8下水田、水路、溝。	境町文化財調査報告書「伊与久・宍町田遺跡発掘調査の記録」 境町教育委員会 2004
7	伊与久・久保田東遺跡	伊勢崎市境伊与久	古墳時代の型穴建物4軒。土坑7基。近世の溝7条。	伊勢崎市文化財調査報告書第58集「伊与久・久保田東遺跡の発掘調査の記録」 伊勢崎市教育委員会 2005
8	伊与久・久保田東Ⅱ遺跡	伊勢崎市境伊与久	古墳時代の型穴住居1軒。型穴状遺構1基。溝29条。奈良時代の土坑2基。平安時代の型穴住居9軒、掘立柱建物1棟。溝7条、ピット29基。水田上坑7基。近世の溝7条。	伊勢崎市文化財調査報告書第78集「伊与久・久保田東Ⅱ遺跡」 伊勢崎市教育委員会 2007

No.	道 路 名	所在地	概 要	文 献 等
9	伊与久・志町田道跡Ⅱ	伊勢崎市 境伊与久	縄文土器集中地(前期)。古墳時代から平安時代の溝33条、土坑1基、ビット1基、噴石。As-B下木田。中世以降の土坑12基。	境町文化財調査報告書「伊与久・志町田道跡Ⅱ」伊勢崎市教育委員会 2009
10	北米岡道跡	伊勢崎市 境米岡	縄文時代後期の竪穴住居1軒、配石道槽2基、溝2条。	「北米岡道跡」発掘調査報告書 私立伊勢崎女子高等学校地歴部 1956 「境町古墳道跡」境町役場 1978
11	女塚道跡	伊勢崎市 境女塚	古墳時代の竪穴住居1軒。	「境町古墳道跡」境町役場 1978
12	下田道跡	伊勢崎市 境三ツ木	古墳時代の竪穴住居1軒。平安時代の竪穴住居2軒。中世以降の土坑、溝。	境町教育委員会文化財調査報告書「西林道跡 下田道跡」境町教育委員会 1980
13	西林道跡	伊勢崎市 境三ツ木	古墳時代の竪穴住居9軒、土坑4基、溝1条。奈良・平安時代の竪穴住居7軒、掘立柱建物1棟、土坑3基、溝1条。中世以降の土坑、溝。土坑墓、井戸等。三ツ木城周濠。	境町教育委員会文化財調査報告書「西林道跡 第1次発掘調査概要」境町教育委員会 1979 境町教育委員会文化財調査報告書「西林道跡 下田道跡」境町教育委員会 1980
14	三ツ木道跡	伊勢崎市 境三ツ木	古墳時代の竪穴住居38軒。方形周溝墓。奈良・平安時代の竪穴住居170軒。中世の土坑墓4基、井戸、溝等。	土武岡道地域 埋蔵文化財発掘調査概要Ⅳ「三ツ木道跡 西今井道跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1976
15	西今井道跡 (群理工文調査)	伊勢崎市 境西今井	平安時代の竪穴住居200軒以上、掘立柱建物14棟、土坑436基、井戸10基。	一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う調査報告書第57集「西今井道跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986 早川河川改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告書第57集「西今井道跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
16	西今井道跡 (県教委調査)	伊勢崎市 境西今井	古墳時代から奈良・平安時代の集落跡。竪穴住居119軒、掘立柱建物11棟、井戸5基。	土武岡道地域 埋蔵文化財発掘調査概要Ⅳ「三ツ木道跡 西今井道跡 小角田前道跡」群馬県教育委員会 1976
17	上矢島道跡	伊勢崎市 境上矢島	古墳時代から平安時代の竪穴住居、掘立柱建物。	境町文化財調査報告「上矢島道跡発掘調査概要」境町教育委員会 1978
18	下瀧名・高田道跡	伊勢崎市 境下瀧名	奈良・平安時代の竪穴住居3軒。中近世の竪穴状遺構10基。土坑67基、井戸42基、溝37条、ビット多数。	境町教育委員会文化財調査報告書「下瀧名・高田道跡」境町教育委員会 2002
19	下瀧名道跡	伊勢崎市 境下瀧名	古墳時代の竪穴住居33軒。古墳1基。土坑1基。奈良・平安時代の竪穴住居100軒以上、掘立柱建物5棟、溝36条、土坑61基、井戸14基等。	境町文化財調査報告「下瀧名道跡」発掘調査概要 境町教育委員会 1978
20	下瀧名塚越道跡	伊勢崎市 境下瀧名	旧石器時代の礫石列。古墳(円墳)2基、方墳1基。古墳時代初頭から10世紀代の竪穴住居265軒。土坑墓、掘立柱建物13棟、土坑120基、井戸100基、中世の煎餅、溝。	境町教育委員会文化財調査報告書「下瀧名塚越道跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第114集「下瀧名塚越道跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
21	明神道跡	伊勢崎市 境下瀧名	古墳時代の土坑1基。奈良・平安時代の竪穴住居3軒。中世の土坑墓1基、溝2条。近世の土坑5基。	境町教育委員会文化財調査報告書「明神道跡発掘調査報告書」附 上瀧名出土瓦、調査報告書 境町教育委員会 1975 境町教育委員会文化財調査報告書 昭和58年度埋蔵文化財緊急発掘調査報告書「寺家前道跡 明神道跡」境町教育委員会 1985
22	下瀧名道跡12	伊勢崎市 境下瀧名	古墳時代の竪穴住居3軒、古墳1基、土坑1基。奈良・平安時代の竪穴住居100軒以上、掘立柱建物5棟、溝36条、土坑61基、井戸14基等。	伊勢崎市文化財調査報告書第99集「下瀧名道跡12」伊勢崎市教育委員会 2010
23	寺家前道跡	伊勢崎市 境下瀧名	1～3号集中部(6世紀前半から10世紀にかけての遺物の投棄場)。	「寺家前道跡 明神道跡」境町教育委員会 1985
24	上瀧名道跡	伊勢崎市 境上瀧名	古墳時代の竪穴住居35軒。平安時代の竪穴住居42軒。中世の煎餅、溝、土坑、土坑墓等。	境町文化財調査報告「上瀧名道跡1～4次発掘調査概要」境町教育委員会 1980～1984
25	下瀧名・笠道跡	伊勢崎市 境下瀧名	近現代の土坑7基、溝状遺構1基。	昭和59年度埋蔵文化財緊急発掘調査報告書「笠道跡 吉田道跡」境町教育委員会 1985
26	上瀧名道跡VI	伊勢崎市 境上瀧名	古墳時代の竪穴住居17軒。奈良・平安時代の竪穴住居57軒、井戸1基、土坑16基、ビット124基。中近世の方形竪穴2軒、溝6条、地下式土坑1基、土坑1基。	伊勢崎市文化財調査報告書第84集「上瀧名道跡VI」伊勢崎市教育委員会 2008
27	上瀧名・雙見山道跡	伊勢崎市 境上瀧名	古墳時代の竪穴住居17軒。右室は両袖型横穴式で、円筒形輪や形象埴輪などが出土している。「冢家村11号墳」。	「境町の道跡」境町教育委員会 1986 「上毛古墳総覧」1938
28	上瀧名・吉田道跡	伊勢崎市 境上瀧名	古墳。馬具、耳環、鉄製武器類などが出土。	昭和59年度埋蔵文化財緊急発掘調査報告書「笠道跡 吉田道跡」境町教育委員会 1985
29	東山道駅跡「牛堀・矢ノ原ルート」	伊勢崎市 境伊与久	高崎市東部から太田市北西部で確認されている古代道路遺構。	「古代のみち」群馬県立博物館 2001
30	三草古墳群	伊勢崎市 境上瀧名	6世紀前半代の古墳2基。	境町教育委員会文化財調査報告書「三草古墳群」境町教育委員会 1988
31	島海戸道跡	伊勢崎市 境下瀧名	平安時代以降の掘立柱建物7棟。	境町文化財調査報告書「上瀧名・三ツ木・出口・島海戸道跡」発掘調査概要 境町教育委員会 1977
32	出口道跡	伊勢崎市 境下瀧名	古墳時代の竪穴住居95軒。方形周溝墓1基、祭祀遺構。平安時代の竪穴住居8軒、掘立柱建物1棟、土坑2基、井戸4基、溝3条。中世の溝5条、時期不明の土坑32基、溝15条。	境町文化財調査報告書「上瀧名・三ツ木・出口・島海戸道跡」発掘調査概要 境町教育委員会 1977

第2章 遺跡の立地と環境

No.	遺跡名	所在地	概 要	文 献 等
33	上橋・三ツ古屋遺跡	伊勢崎市 境下河名	古墳から平安時代の竪穴住居57軒、方形周溝墓?1基。掘立柱建物1棟、祭祀遺構1基。土坑34基、井戸4基、溝23条。	境町文化財調査報告書「上橋・三ツ古屋・出口・島南戸遺跡」発掘調査概要 境町教育委員会 1977
34	采女小学校校庭遺跡	伊勢崎市 境下河名	古墳時代の竪穴住居2軒。	「境町の遺跡」境町教育委員会 1986 「境町古代遺跡」境町役場 1978
35	上橋遺跡第5地点	伊勢崎市 境下河名	古墳時代の竪穴住居7軒。平安時代の竪穴住居3軒。時期不明の土坑7基、溝5条。	境町文化財調査報告書「上橋遺跡第5地点」境町教育委員会 1987
36	雷電神社古墳	伊勢崎市 境上河名	円墳。横穴式。7世紀。	「境町の遺跡」境町教育委員会 1986 「上毛古墳総覧」1938
37	雷電裡遺跡	伊勢崎市 境上河名	古墳時代の竪穴住居2軒。	「境町の遺跡」境町教育委員会 1986 「境町古代遺跡」境町役場 1978
38	上瀬名裏神谷遺跡	伊勢崎市 境上河名	古墳時代の竪穴住居16軒。円形周溝墓。溝16条、井戸1基。土坑4基。As-B下水田。	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第124集「上瀬名裏神谷遺跡 三室ノ谷遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
39	上瀬名神谷遺跡	伊勢崎市 境上河名	旧石器時代のナイフ形石器。縄文時代の爪形文土器、器余文土器、局部磨製石斧。奈良・平安時代の土師器・須恵器等。	「境町史 第3巻歴史編上」境町 1996 「境町の遺跡」境町教育委員会 1986
40	十三宝塚遺跡	伊勢崎市 境伊与久	旧石器時代の黒曜石製尖頭器。古墳時代の竪穴住居。奈良・平安時代の竪穴住居、掘立柱建物、基礎建物、柱穴列、土塁、寺院跡。	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第134集「史跡十三宝塚遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992 「境町史 第3巻歴史編上」境町 1996
41	伊与久遺跡	伊勢崎市 目乃出町	古墳時代の竪穴住居1軒。ピット状遺構1基。	境町文化財調査報告書「伊与久遺跡」境町教育委員会 1973 「境町古代遺跡」境町役場 1978
42	天神山古墳	伊勢崎市 境上武士	堀志村30号墳。武士の四つ丁の丘陵の中で最も高い丘の頂上に築かれた前方後円墳。形象雄輪が数多く出土。6世紀末から7世紀初頭。	「境町史 第3巻歴史編上」境町 1996
43	下武士・西六反田遺跡	伊勢崎市 境下武士	縄文時代。奈良時代。平安時代。	群馬県文化財情報システム WEB版
44	下武士・野々宮遺跡	伊勢崎市 境下武士	縄文時代。古墳時代。奈良時代。平安時代。	群馬県文化財情報システム WEB版
45	上武士・前畑1遺跡	伊勢崎市 境上武士	古墳時代。	群馬県文化財情報システム WEB版
46	上武士・前畑3遺跡	伊勢崎市 境下武士	奈良時代。平安時代。	群馬県文化財情報システム WEB版
47	上武士・前畑2遺跡	伊勢崎市 境下武士	古墳時代。	群馬県文化財情報システム WEB版
48	上武士・宮前遺跡	伊勢崎市 境下武士	古墳時代。	群馬県文化財情報システム WEB版
49	三社神社	伊勢崎市 境下武士	古墳時代。	群馬県文化財情報システム WEB版
50	上武士・堀南1遺跡	伊勢崎市 境上武士	縄文時代。古墳時代。奈良時代。平安時代。	群馬県文化財情報システム WEB版
51	上武士・堀南2遺跡	伊勢崎市 境上武士	縄文時代。古墳時代。奈良時代。平安時代。	群馬県文化財情報システム WEB版
52	上武士・新井4遺跡	伊勢崎市 境上武士	縄文時代。古墳時代。奈良時代。平安時代。	群馬県文化財情報システム WEB版
53	上武士・新井3遺跡	伊勢崎市 境上武士	縄文時代。奈良時代。平安時代。	群馬県文化財情報システム WEB版
54	上武士・新井2遺跡	伊勢崎市 境上武士	縄文時代。古墳時代。奈良時代。平安時代。	群馬県文化財情報システム WEB版
55	伊与久・志町畑遺跡	伊勢崎市 境伊与久	古墳時代。奈良時代。平安時代。	群馬県文化財情報システム WEB版
56	木島・糠子尾遺跡	伊勢崎市 境木島	奈良時代。平安時代。	群馬県文化財情報システム WEB版
57	御嶽山遺跡・武土城	伊勢崎市 境上武士	縄文時代。古墳時代。中世。	群馬県文化財情報システム WEB版
58	木島・江田耕地遺跡	伊勢崎市 境木島	古墳時代。奈良時代。平安時代。	群馬県文化財情報システム WEB版
①	瀬名古墳群	伊勢崎市 境上河名	6世紀から7世紀代の古墳群。	「上毛古墳総覧」群馬県 1938
②	下瀬名古墳群	伊勢崎市 境下河名	13基を調査。円墳12基、方墳1基。5世紀後半に形成された古墳群。	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第114集「下瀬名塚越遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
③	武士古墳群	伊勢崎市 境上武士	天神山古墳(堀志村第30号墳)前方後円墳6世紀末。堀志村第33号墳 円墳7世紀初頭。堀志村第36号墳 円墳7世紀前半。	「境町の遺跡」境町教育委員会 1986 「境町古代遺跡」境町役場 1978
④	下瀬名遺跡群	伊勢崎市 境上・下河名	縄文時代。古墳時代。奈良時代。平安時代。中世。	群馬県文化財情報システム WEB版



第4圖 周辺遺跡位置圖

第3章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法と経過

第一次調査に際して、用地内の発掘調査除外地に調査事務所を設置。路線を横断する現道を残し、その西側をⅠ区、東側をⅡ区として調査区を設定した。試掘調査結果を基に、Ⅰ区西側より重機(バックホー)を用いて表土の除去を行った。排土は調査区外への搬出・仮置きが困難なためⅡ区内に仮置きし、Ⅰ区調査終了後に反転することとした。遺構の検出は、基本土層①-9・②③-12黄-暗黄褐色ローム相当土層上を確認面としたが、現地表面からの深度が浅い所では、近・現代の耕作耕作痕が確認面にまで及んでいたため、遺構が覆土を多く受けた状態で検出となった。遺構の確認から掘削に至る作業については、遺跡掘削工事請負として業者に委託し行った。

調査は降雨による冠水等の障害があったものの、11月中程には調査を終え、埋め戻し作業と共にⅡ区の表土掘削にかかる。Ⅱ区の検出遺構は溝のみで、東半の低い部分は縄文包含層調査を行い、12月中旬には調査を終え、

〔第一次調査 日誌(抜粋)平成22年〕

10月1日 調査事務所用地の整備。
 10月4日 同上
 10月5日 事務所設置。調査区設定。
 10月6日 Ⅰ区西より表土掘削開始。
 10月7日 Ⅰ区表土掘削。
 10月8日 同上
 10月12日 Ⅰ区遺構確認作業開始。
 10月13日 同上
 10月14日 同上
 10月15日 同上、1号掘立建物検出。
 10月18日 同上、溝を検出。
 10月19日 同上、1号住居検出。
 10月20日 住居・土坑調査。
 10月21日 溝調査。午後降雨のため作業休止。
 10月22日 Ⅰ区住居・溝・井戸・土坑調査。
 10月25日 前日降雨のため午前中作業休止。
 10月26日 Ⅰ区住居・掘立調査。
 10月27日 Ⅰ区全景写真撮影。
 10月28日 降雨のため休止。
 10月29日 同上
 11月1日 調査区水没、排水作業。
 11月2日 同上
 11月4日 Ⅰ区住居・溝調査、南東部下面試掘調査。
 11月5日 Ⅰ区住居・溝・井戸・土坑・縄文トレンチ調査。
 11月8日 火山灰考古学研究所早田土層観察。

11月9日 Ⅰ区住居・溝・井戸・土坑調査。
 11月10日 Ⅰ区住居・溝・土坑調査。
 11月11日 Ⅰ区住居・土坑調査。
 11月12日 Ⅰ区住居・土坑調査、一部埋め戻し開始。
 11月15日 Ⅰ区住居・土坑調査、一部埋め戻し、午後降雨。
 11月16日 Ⅰ区住居調査、一部埋め戻し。
 11月17日 Ⅰ区住居調査、一部埋め戻し。Ⅰ区調査終了。
 11月18日 Ⅰ区埋め戻し、Ⅱ区表土掘削作業。
 11月19日 Ⅱ区表土掘削・遺構確認作業。
 11月22日 Ⅱ区表土掘削・遺構確認、溝調査。午後降雨のため中止。
 11月23日 Ⅱ区表土掘削・遺構確認、溝調査。
 11月24日 同上
 11月25日 同上
 11月26日 Ⅱ区遺構確認、溝調査。
 11月29日 同上
 11月30日 Ⅱ区遺構確認、溝調査。
 12月1日 Ⅱ区遺構確認、溝(全景写真)調査。
 12月2日 Ⅱ区遺構確認・縄文包含層調査。
 12月3日 降雨のため休止。
 12月6日 Ⅱ区遺構確認・縄文包含層調査。
 12月7日 Ⅱ区縄文包含層調査。
 12月8日 同上
 12月9日 同上
 12月10日 同上
 12月13日 Ⅱ区縄文包含層調査。午後降雨のため中止。
 12月14日 Ⅱ区縄文包含層調査。
 12月15日 Ⅱ区全景写真撮影。
 12月16日 Ⅱ区埋め戻し作業。
 12月17日 Ⅱ区埋め戻し、調査事務所撤収作業。調査終了。
 12月20日 図面修正・写真整理・事務処理。
 12月21日 同上
 12月22日 同上
 12月23日 同上
 12月24日 同上
 12月27日 同上
 12月28日 同上
 12月29日 年末・年始休。

埋め戻し・調査事務所の撤収等を行った。

第二次調査に際しては、本線部の工事が進められる中、工事終了箇所に調査事務所を設置。現道を境に西をⅢ区、東をⅣ区として調査区を設定した。排土の処理については、第一次調査と同様に、調査区内での仮置き・反転を行った。遺構の検出は、Ⅰ・Ⅱ区確認面と同一面を確認面としたが、Ⅲ区では、現代の機械(トレンチャー)耕作痕が確認面下まで及んでいたため、遺構が寸断された状態で検出となった。遺構の確認から掘削に至る作業については、第一次調査同様に遺跡掘削工事請負として業者に委託し行った。

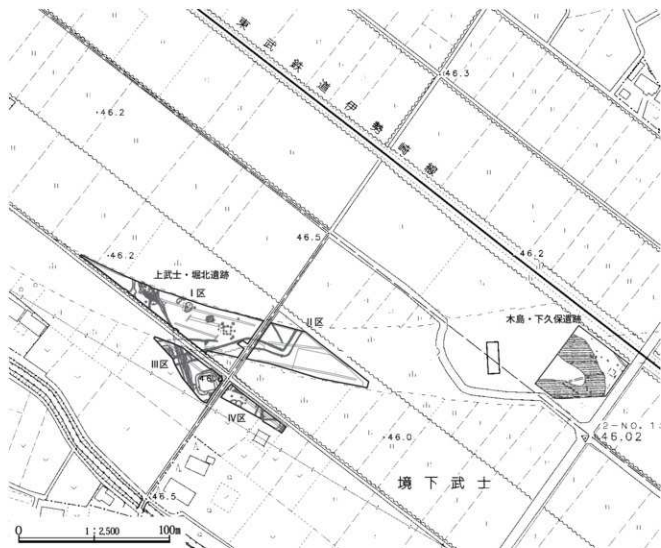
Ⅳ区表土掘削中に太平洋戦争時の焼夷弾が出土し、警

察・陸上自衛隊に処理方を依頼した。中盤、この時期異例の台風4号接近による豪雨の後、Ⅳ区を調査。月末に終了し、埋め戻しと撤去作業を行った。

第一次・第二次調査を通じて、記録測量については、基準点・水準点測量、遺構平面図測量等の地上器械測量作業を主として測量業者への業務委託で実施し、補助的に発掘調査作業員による断面図測量等を行った。測量縮尺は、原則として1/10・1/20・1/40を用い、全体図等は適時設定した。また、記録写真撮影については、35mm判相当の写真はデジタル一眼レフカメラを用いてデジタルカラー写真撮影を行い、中判写真については、6×7判中型カメラとプロローニー判フィルムを用いて撮影を行った。

〔第二次調査 日誌(抜粋)〕平成24年

- 6月1日 事務所整備。Ⅲ区西より表土掘削開始。
- 6月4日 Ⅲ区表土掘削・遺構確認作業。
- 6月5日 Ⅲ区表土掘削。1号方形周溝墓・1号溝掘削。
- 6月6日 Ⅲ区1～3号溝掘削。
- 6月7日 Ⅲ区1～3号溝掘削、Ⅳ区表土掘削。
- 6月8日 Ⅲ区1～3号溝掘削。
- 6月11日 Ⅲ区溝・方形周溝墓調査。
- 6月12日 Ⅲ区溝・方形周溝墓調査。県文化財保護課視察。
- 6月13日 Ⅲ区2号方形周溝墓掘削。事業団整理担当者視察。
- 6月14日 Ⅲ区溝・方形周溝墓調査。事業団課長視察。
- 6月15日 Ⅲ区全景写真撮影。
伊勢崎警察署・陸上自衛隊朝霞駐屯地、出土焼夷弾処理。
- 6月18日 Ⅲ区溝・方形周溝墓調査。
- 6月19日 Ⅳ区表土掘削。降雨(台風接近)のため午後作業中止。
- 6月20日 Ⅲ区土坑調査、Ⅳ区表土掘削。警察・自衛隊来訪。
- 6月21日 同上
- 6月22日 Ⅲ区土坑等調査、Ⅳ区溝調査。朝方降雨。
- 6月25日 Ⅳ区土坑・溝調査。Ⅲ区埋め戻し。
- 6月26日 Ⅳ区水田・溝・土坑調査。Ⅲ区埋め戻し。
- 6月27日 同上
- 6月28日 Ⅳ区写真撮影、測量作業。掘品等撤去作業。
- 6月29日 調査事務所撤去。調査終了。



第5図 調査区範囲図

第2節 基本土層

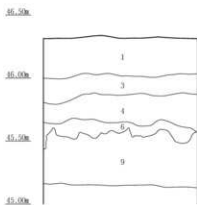
調査区の地形は、中央部（Ⅰ区東半・Ⅱ区西半・Ⅲ区・Ⅳ区西半）が南北方向の尾根状微高地にあたり、東西端（Ⅰ区西端・Ⅱ区東半・Ⅳ区東半）は低地と成っている。そのため、調査区全体にわたり普遍的に堆積する層はなく、地点によりその堆積状況はやや異なる。

標高46m程の現地表面下には、現代耕作土である暗褐～褐灰色砂質土が10～30cmほど堆積し、その下に浅間Aテフラ(As-A)を含む近世～近代耕作土、浅間Bテフラ(As-B)を含む中～近世耕作土の堆積が見られ、低地部では粘性を帯び酸化鉄分が凝固するなど水田耕作土の様相を呈する①-3、②③-2～6、④-2～5、⑤-1

本道跡検出のテフラ

テフラ名	略号	給源	年代	備考
浅間Aテフラ	As-A	浅間山	天明三(1783)年	天明三年七月八日 通称「浅間焼け」
浅間Bテフラ	As-B	浅間山	天仁元(1108)年	『中右記』天仁元年九月五日条他に記述
(地 震)		内陸部	弘仁九(818)年	『朝野群載』弘仁九年七月・八月条に記述
樺名二ツ岳洪川テフラ	Hr-FA	樺名山	5世紀末～6世紀初頭	
浅間Cテフラ	As-C	浅間山	3世紀後半	

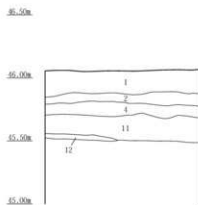
Ⅰ区 基本土層柱状図①



基本土層①

- 1 暗褐色土 表土耕作土。
- 3 黒褐色土 粘性あり。酸化鉄分をまばらに含む。水田耕作床土。
- 4 灰黄褐色砂質土 粘性ややあり。洪水堆積層。
- 6 褐灰砂質土 粘性ややあり。洪水堆積層。
- 9 黄褐色土 粘性やや強い。ローム層。

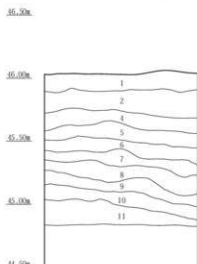
Ⅰ区 基本土層柱状図②



基本土層②・③

- 1 暗褐色土 表土耕作土。
- 2 暗赤褐色土 粘性ややあり。水田床土と考えられる。As-Aを少量含む。3層上との境ではAs-Bの堆積も見られる。
- 4 暗褐色土 粘性あり。
- 5 暗褐色土 粘性あり。4層上より色調明るい。
- 6 暗褐色土 粘性あり。酸化鉄を少量含む。
- 7 黄褐色土 粘性あり。全体的にガラつきあり。洪水堆積層。
- 8 黄褐色砂質土 粘性ややあり。洪水堆積層。
- 9 灰色砂質土 粘性ややあり。洪水堆積層。
- 10 暗灰色土 粘性あり。Hr-FAを少量含む。FA記層。
- 11 黒褐色土 粘性あり。As-Cを微量含む。As-C記黒色土。
- 12 暗黄褐色土 粘性あり。ローム漸移層。

Ⅰ区 基本土層柱状図③

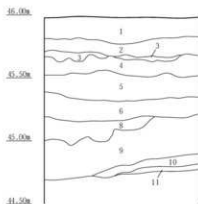


～3、⑥-1～5)。このAs-A・Bテフラ混土下には、黄～灰黄褐色の洪水堆積層を思われる水性堆積砂質土や砂層の堆積が何層も見られる(①-4・6、②③-7～9、④-6～9、⑤-3・4、⑥-5'・6)。その下は、微高地部では黄褐色の砂質ローム相当土(①-9、②③-12)となり、低地部や方形周溝墓の周溝埋土では樺名二ツ岳洪川テフラ(Hr-FA)の堆積(③-10、④-10、⑤-5、⑥-9)が、その下には浅間Cテフラ(As-C)を含む黒色土(②③-11、④-11)の堆積が見られる。

調査区堆積層に見られる年代の鍵となる各テフラと、水田耕作の可能性のある層については、試料を採取し、その同定と植生を調べるために自然科学分析を行った。その結果は、第5章(73頁)の記載を参照されたい。

第6図 基本土層柱状図Ⅰ区

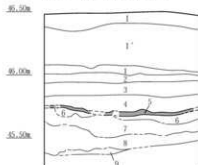
II区 基本土層柱状図④



基本土層④

- 1 暗褐色土 表土耕作土。
- 2 暗赤褐色土 粘性ややあり。水田床土。As-Aを少量含む。
- 3 As-B混土層 部分的にAs-B堆積層が残っているが暗褐色土が混入する。耕作時にB堆積層をすきこんだか。
- 4 黒褐色土 粘性あり。As-B水田と呼ばれる黒色土相当。
- 5 暗褐色土 粘性あり。酸化鉄を少量含む。
- 6 黄褐色土 粘性あり。全体的にザラつきあり。洪水堆積層。
- 8 暗赤褐色砂質土 粘性ややあり。色調やや黄色味がかる。洪水堆積層。
- 9 灰色土 粘性あり。全体的にザラつきあり。洪水堆積層。
- 10 暗灰色土 粘性あり。Hr-FAを含む。FA混流。
- 11 黒褐色土 粘性あり。As-Cを微量含む。As-C混黒色土。

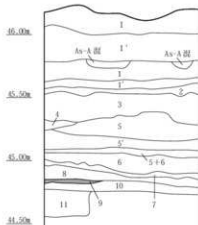
III区 基本土層柱状図⑤



基本土層⑤

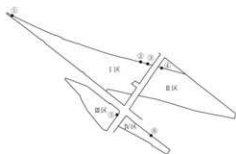
- 1 褐灰色土(10YR4/1) 表土。
- 1' 褐灰色土(10YR4/1) 耕作土。
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) やや砂質。
- 2 褐灰色土小ブロックと灰黄褐色土の混土 耕作土。
- 3 褐灰色土(10YR5/1) 砂粒を多く含む。ザラつきあり。
- 4 黄褐色土 細砂ローム小ブロック。洪水堆積層。
- 5 Hr-FA にふい黄褐色。
- 6 黒褐色土(10YR2/2) 土質均質。わずかに白色軽石粒を含む。
- 7 灰黄褐色土(10YR4/2) 微細砂粒を含む。洪水堆積層。
- 8 暗褐色土(10YR3/4) 土質均質。
- 9 褐色土(10YR4/6) ロームブロック混土。8層土に類似。

IV区 基本土層柱状図⑥



基本土層⑥

- 1 現耕作土
- 1' 現耕作土 I層上より色調やや暗い。
- 1 褐色土(10YR4/6) As-B混。
- 1' 1層上よりAs-Bが多く、部分的にAs-Bブロックあり。
- 2 黒褐色粘質土(10YR3/2) 水田耕作土。3層耕作土化。
- 3 灰褐色シルト質粘土(10YR6/2) 土質均質。
- 4 褐灰色土(10YR5/1) 黄色シルトブロックを含む。
- 5 灰黄褐色粘質土(10YR4/2) 土質均質。水田耕作土。
- 5' 灰黄褐色粘質土 砂粒混入。
- 6 砂層(2.5YR5/3) 下部に鉄分沈着。上部細砂、下部粗砂。洪水堆積層。
- 7 褐灰色粘土 水田耕作土。
- 8 褐灰色粘土 Hr-FA混土上。
- 9 Hr-FA
- 10 黒褐色土 シルト質。粘性あり。
- 11 黒褐色土 10層上よりやや明るいシルト質。粘性あり。ロームブロックを含む。



第7図 基本土層柱状図II・III・IV区

第3節 整理作業

出土した遺物の洗浄・注記作業や写真・図面等の記録資料の基礎整理作業については、第一次・第二次調査ともに発掘調査担当者の元、原則的にそれぞれの調査時、および調査終了直後に実施した。

調査報告書作成に伴う整理作業については、平成24年4月から行い、遺構測量図の確認・整合作業、第二次調査出土遺物の洗浄・注記作業、出土遺物の実測・トレース・写真撮影作業、出土遺物観察作業、本文原稿執筆・レイアウト作業の後、デジタル編集・印刷原稿化を行い、

印刷業者による印刷・製本作業を行った。

整理作業時において、発掘調査時の記録資料との整合性を保つため、原則的に発掘調査時に付した遺構名称・番号の踏襲につとめ、やむを得ず変更を行ったものは旧称を並記した。第一次・第二次調査ともに、調査区ごとに遺構名称・番号を付しているため、調査区+遺構名とすることで重複を避けた。(例 I区1号溝)

また、調査区名についても発掘調査時にアラビア数字(1・2・3・4)とローマ数字(I・II・III・IV)が混在していたため、整理時にローマ数字に統一した。

第4章 遺構と遺物

第1節 検出遺構の概要

第1項 I・II区の概要

I区の遺構確認面は、現地表下50～120cmを測り、中央部が馬の背状に高く、東西が緩やかに低くなる。検出遺構としては、中央の微高地部の東半部に平安時代の竪穴住居1軒と掘立柱建物1棟、井戸1基、東西走行の溝2条、土坑4基が、西部には縄文時代前期後半の竪穴住居3軒、南北走行の溝7条、土坑7基が検出された。北西端部は谷地となり、遺構は見られない。なお、微高地部は、近現代の畑の耕作により、大きく削平・攪乱された状態での検出となった。

I区の東側に位置するII区の遺構確認面は、I区東端に続き南東に向かい緩やかに傾斜する。検出遺構は3条の溝のみで、内2条はI区南東部検出の溝に接続し、II区内で並行し直角に曲がる。南東半の低地部からの遺構の検出はなく、縄文包含層が調査された。

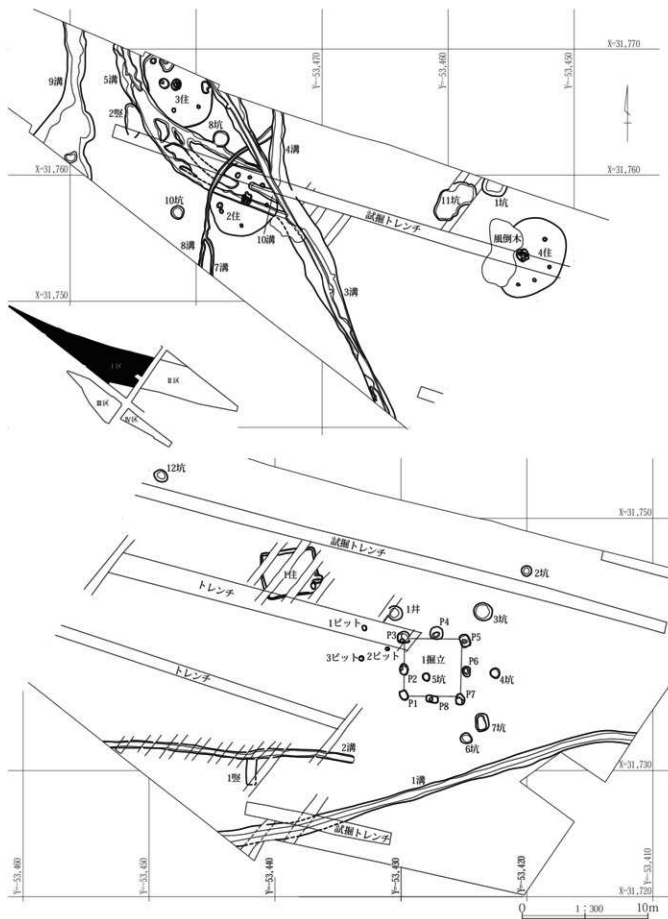
第2項 III・IV区の概要

III区の遺構確認面は、現地表下50～130cmを測り、平坦な浅黄～黄褐色砂質シルト層面である。検出遺構としては、竪穴状遺構1基、方形周溝墓2基、土坑6基とI

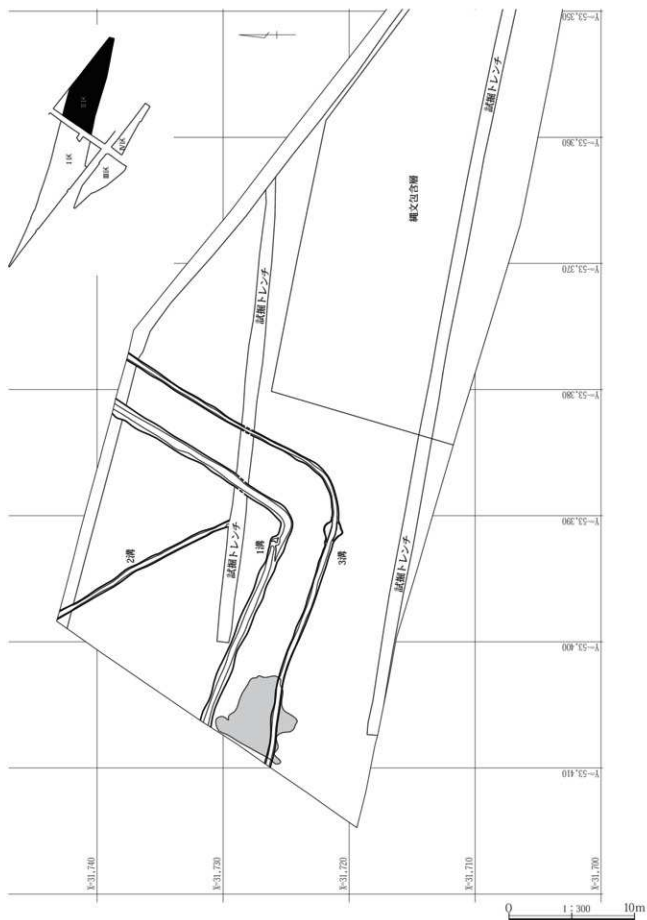
区西部から続くものと考えられる南北走行の溝3条とI区東半部から続くものと考えられる東西走行の溝3条がある。

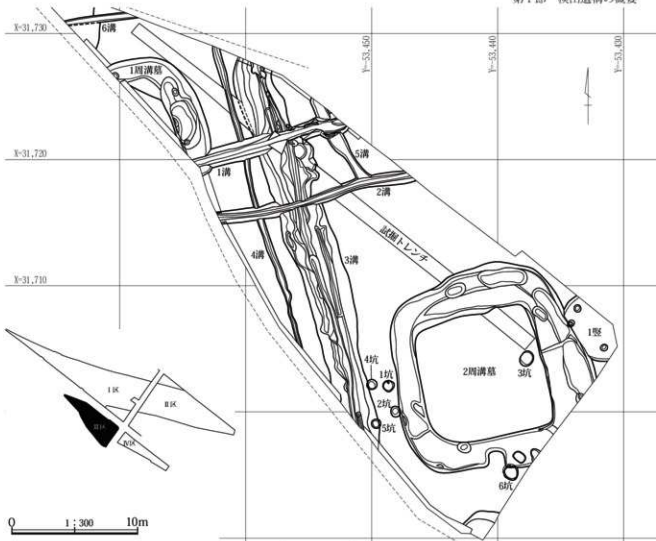
南北走行の溝(III区3～5号溝)については、全て南から北に向けての通水と判断された。I区全体に北西南北方向に幅10cmほどの機械(トレンチャー)耕作痕が無尽に入り、その深さは遺構検出面下40～50cmほどにも及び、そのため検出遺構の全てが攪乱を受けた状態であり、確認が難しかった。

IV区の遺構確認面は、現地表下50～190cmを測り、北西端部は隣接のIII区同様の黄褐色砂質シルト面から南東にかけて緩やかに傾斜し、黒褐色弱粘質土の谷地へと続く。検出された遺構は、北西の台地部において溝2条、土坑9基を数え、南東半の谷地部では、溝3条と水田の南北走行の畔1条が検出された。水田面は浅間山B軽石(As-B)と榛名山二ツ岳火山灰(Hr-FA)間にあり、洪水堆積層で覆われていた。この洪水層は、上下検出のテフラとの関係から、弘仁九(818)年の地震に伴う洪水層である可能性が高い。

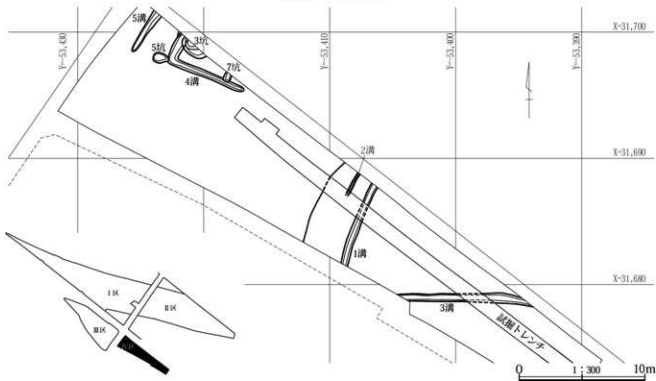


第8図 Ⅰ区全体図

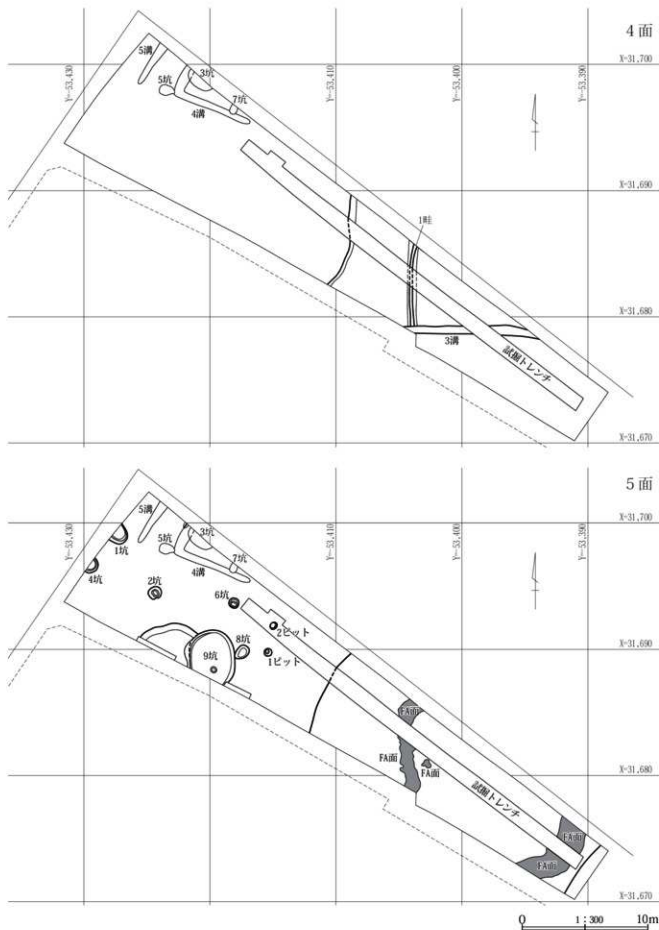




第10図 III区全体図



第11図 IV区3面全体図



第12図 IV区4・5面全体図

第2節 検出遺構と出土遺物

第1項 竪穴住居・竪穴状遺構

I区1号住居(PL. 8・9・37)

位置：743～747—436～441

規模・形状：平面形状は441cm×370cmを測る隅丸長方形状を呈する。面積は16.32mを測る。

主軸方位：N-82°-E

遺存状態：後世の削平により、床面より14cm程しか残らず、加えて現代畑耕作痕により所々寸断された状態での検出で、遺存状態は悪い。

埋土：暗褐～黒褐色土を主体とした自然埋没の様相を呈する。

床面：しまりある掘り方理土(黄褐～暗黄褐色土)で床面を構築するが、顕著な硬化面は認められない。カマド前面を除く壁下に、幅18～31cm、深度15～22cmの壁溝が

巡る。

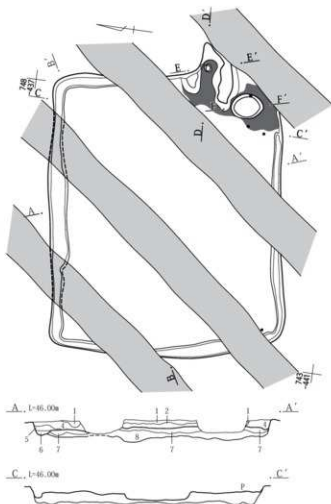
柱穴等：床面上において柱穴跡は検出されず、掘り方面にもその痕跡は認められない。また、南東コーナー付近にて直径39×50cm、深さ13cmほどの小土坑を検出するが、貯蔵穴としては深度が浅い。

カマド：遺存状態は悪いものの、両袖部分がわずかに残り、残存する支脚・使用面灰層の位置から、燃焼部は住居壁ラインより外側にあったものと考えられる。また、掘り方理土内にも焼土が含まれることから、使用用途において修復・再構築が行われたものと推察される。残存する規模は長さ92cm×幅58cmを測る。

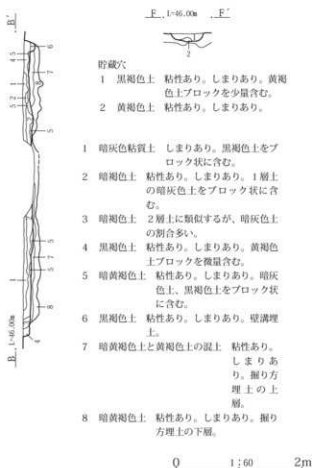
掘り方：床面から全体に10～20cm掘り込み、カマド前・西壁中央付近・南西コーナー部を皿状に浅く掘り込む。

出土遺物：出土する遺物は少なく、下堀の土師器杯(第14図-1)の他、埋土中や掘り方理土内よりわずかに土師器甕・杯小片が出土するのみである。

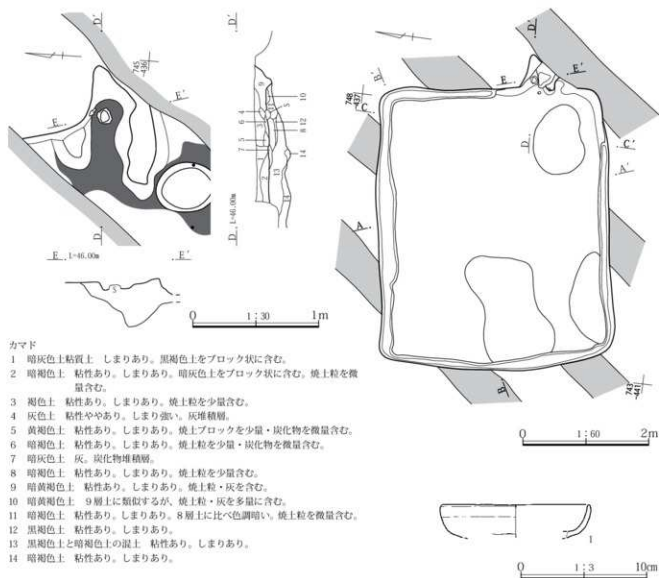
所見：出土遺物より、住居の年代は8世紀後半と推定される。



第13図 I区1号住居遺構図(1)



第4章 遺構と遺物



第14図 1区1号住居遺構図(2)・遺物図

1区2号住居(PL.10・11・37)

位置: 755～760—473—478

規模・形状: 平面形状は径580cm～535cmを測る楕円形状を呈する。

長軸方位: N-8°-E

遺存状態: 後世の削平により、床面より20cm程しか残らず、加えて重複する3・5・8・10号溝により北半部を壊される。

埋土: 黄褐～暗黄褐色土による自然埋没の様相を呈する。

床面: 掘り方埋土を締め固めて床面とする。

柱穴等: 床面上において、直径22～44cm、深度16～29cmを測る柱穴6穴を検出する。

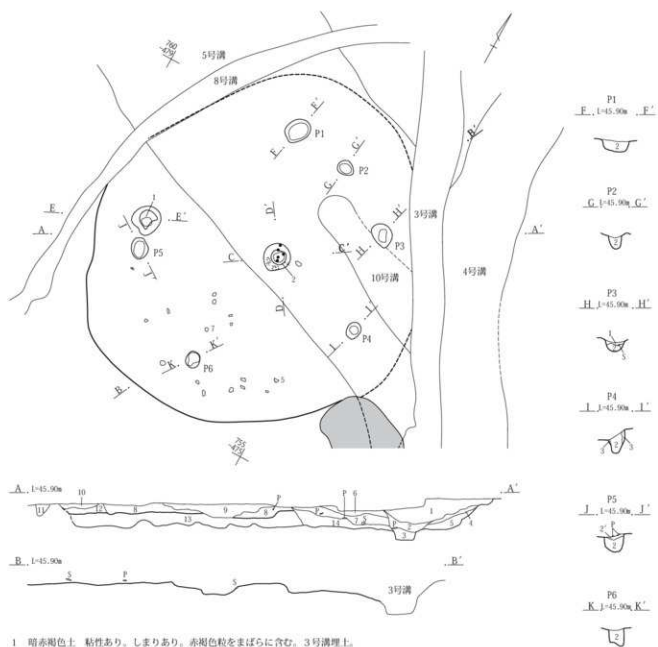
炉・埋甕: 住居中央部において埋甕がを、西南部柱穴脇

に埋甕を検出する。中央の炉址は、径27cmほどの深鉢の下半を打ち欠き埋設する。周囲には甕を抜き取った痕跡を残し、焼土が散在する。西南部の埋甕は、同じく径28cmほどの深鉢下半部を打ち欠き埋設し、周辺や内部に焼土・灰は見られない。

掘り方: 全体に10～25cmほど掘り窪め、ロームブロックを含む暗黄褐色土で埋め戻す。

出土遺物: 住居中央部が内埋設の深鉢(第17図-2)と南西部埋設の深鉢(第17図-1)の他、埋土内より少量の出土がみられる。

所見: 埋甕埋設土器より、住居の年代は縄文時代中期後半と推定される。



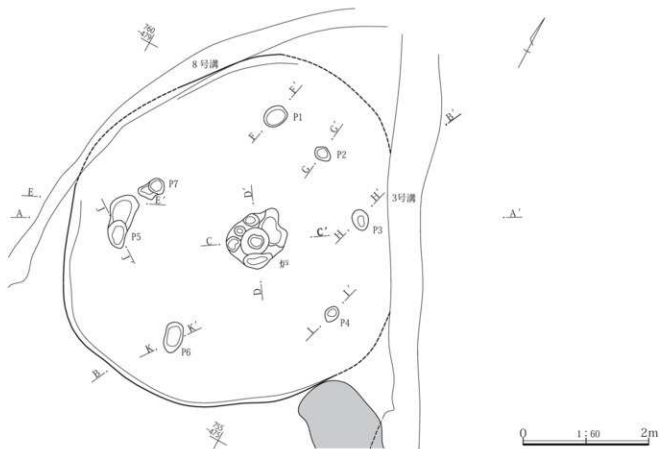
- 1 暗赤褐色土 粘性あり。しまりあり。赤褐色粒をまばらに含む。3号溝埋土。
- 2 暗灰黄色土 粘性あり。しまりややあり。全体的にザラつきあり。3号溝埋土。
- 3 暗灰黄色土 粘性あり。しまりややあり。2層土に比べ色調暗い。2層土よりザラつき強い。3号溝埋土。
- 4 暗黄褐色土 粘性あり。しまりあり。4号溝埋土。
- 5 黄灰色土 粘性あり。しまりややあり。全体的にザラつきあり。4号溝埋土。
- 6 灰褐色土 粘性あり。しまりあり。1層土より色調明るい。赤褐色粒みられるが1層土より少ない。5号溝埋土。
- 7 黄灰色土 粘性あり。しまりあり。全体的にザラつきあり。5層土より色調明るい。5号溝埋土。
- 8 黄褐色土 粘性あり。しまりあり。色調やや暗い。黒褐色土少量混入。2号住居埋土。
- 9 灰黄褐色土 粘性あり。しまりややあり。全体的にザラつきあり。5号溝埋土。
- 10 暗褐色土 粘性ややあり。しまりややあり。白色軽石粒を微量含む。
- 11 黒褐色土 粘性あり。しまりあり。8号溝埋土。
- 12 暗黄褐色土 粘性あり。しまりあり。
- 13 暗黄褐色土 粘性あり。しまりあり。ロームブロック混入。2号住居掘り方埋土。
- 14 黒褐色土 粘性強い。2号住居を切る。

P1~6

- 1 黒褐色土 粘性あり。しまりあり。ややザラつきあり。
- 2 暗褐色土 粘性あり。しまりあり。
- 2' 暗褐色土 粘性あり。しまりあり。黄褐色土ブロックを少量含む。
- 3 暗黄褐色土 粘性あり。しまりあり。

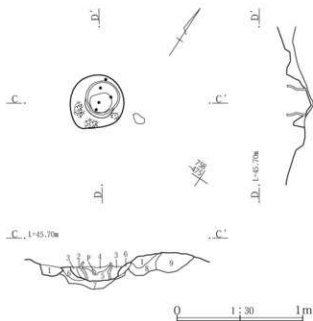
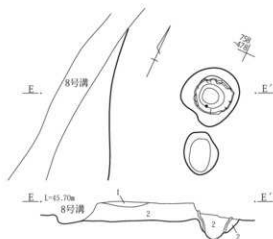
0 1:60 2m

第15図 1区2号住居遺構図(1)



埋藏

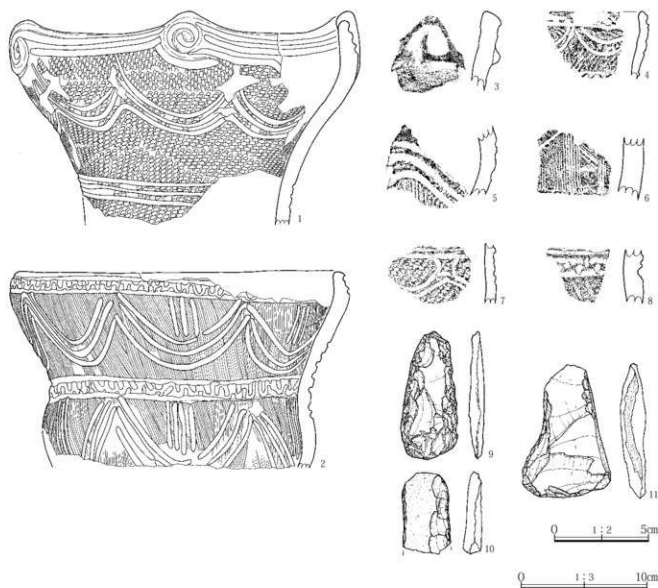
- 1 暗褐色土 粘性ややあり。しまりややあり。白色軽石粒を微量含む。
- 2 暗黄褐色土 粘性あり。しまりあり。



炉

- 1 暗褐色土 粘性あり。しまりあり。色調やや暗い。が石抜き取り痕理上。
- 2 黒褐色土 粘性あり。しまりあり。焼土粒を微量含む。
- 3 暗黄褐色土 粘性あり。しまりあり。焼土粒を少量含む。
- 4 暗赤褐色土 1~2mmの焼土ブロックを全体に含む。
- 5 明黒褐色土 粘性あり。しまりあり。小粒のロームブロックを少量含む。焼土はない。
- 6 淡黄赤褐色土 少量の焼土を含む黄色土で黒色土ブロックを含むためやや黒味がある。
- 7 淡黄色土 黄色土を基準とするがやや淡色黒色土ブロックを少量含む。
- 8 淡黒褐色土 粘性強い。淡い色調の黒褐色土で小粒のロームブロックを含む。
- 9 淡黄褐色土 黒色土ブロックとロームブロックを含む黄褐色土で住居の掘り方理上。

第16図 1区2号住居遺構図(2)



第17図 1区2号住居遺物図

I区3号住居(PL.12・13・37・38)

位置：763～769—478—484

規模・形状：平面形状は直径670cm～510cmほどを測る楕円形状を呈する。

長軸方位：N-36°-W

遺存状態：北側1/4程が調査区外にある。後世の削平により床面より20cm程しか残らず、加えて重複する3号溝により北東端の壁を、5号溝により南西端の壁を壊される。

埋土：暗褐～暗黄褐色土による自然埋没の様相を呈する。

床面：地山ローム土を締め固めて床面とし、壁際を除き全体に硬化する。

柱穴等：床面上において、直径23～95cm、深度23～27

cmを測る柱穴5穴と炉址の西隣に径84×73cm、深度23cmを測る土坑を検出する。

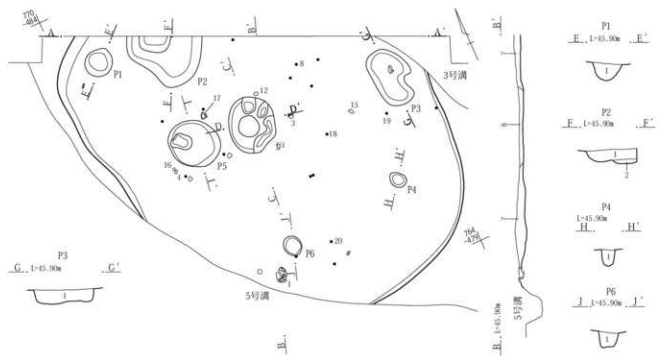
炉・埋裏：住居中央部やや西寄りにおいて埋裏炉を検出する。炉址は、直径25cmほどの深鉢の下半を打ち欠き埋設する。周囲には礫を抜き取った痕跡を残す。周辺や内部の焼土・灰は僅かに確認できる程度である。

掘り方：なし。

出土遺物：住居中央炉内に埋設の深鉢(第19図-2)の他、隣接の5号ピットより深鉢片(第19図-9・10・11・13)、浅鉢片(第19図-14)などが出土する。

所見：埋裏埋設土器より、住居の年代は縄文時代中期後半と推定される。

第4章 遺構と遺物

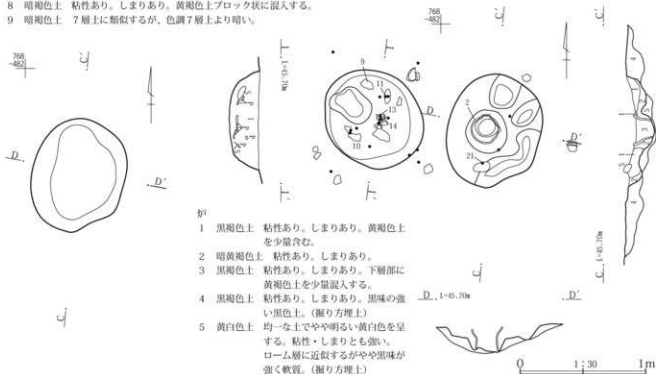


- 1 暗褐色土 表土耕作土。
- 2 暗褐色土 畑耕作痕理上。
- 3 暗赤褐色土 粘性あり。しまりあり。水田耕作(床上)。
- 4 暗褐色土 粘性あり。しまりあり。
- 5 暗褐色土 粘性あり。しまりあり。全体的にガラつきあり。3号溝埋上。
- 6 暗褐色灰色砂質土 粘性あり。しまりやや弱い。水性堆積層。3号溝埋上。
- 7 暗黄褐色土 粘性あり。しまりあり。黄褐色土ブロック状に混入する。
- 8 暗褐色土 粘性あり。しまりあり。黄褐色土ブロック状に混入する。
- 9 暗褐色土 7層上に類似するが、色調7層上より暗い。

P 1 ~ 4・6

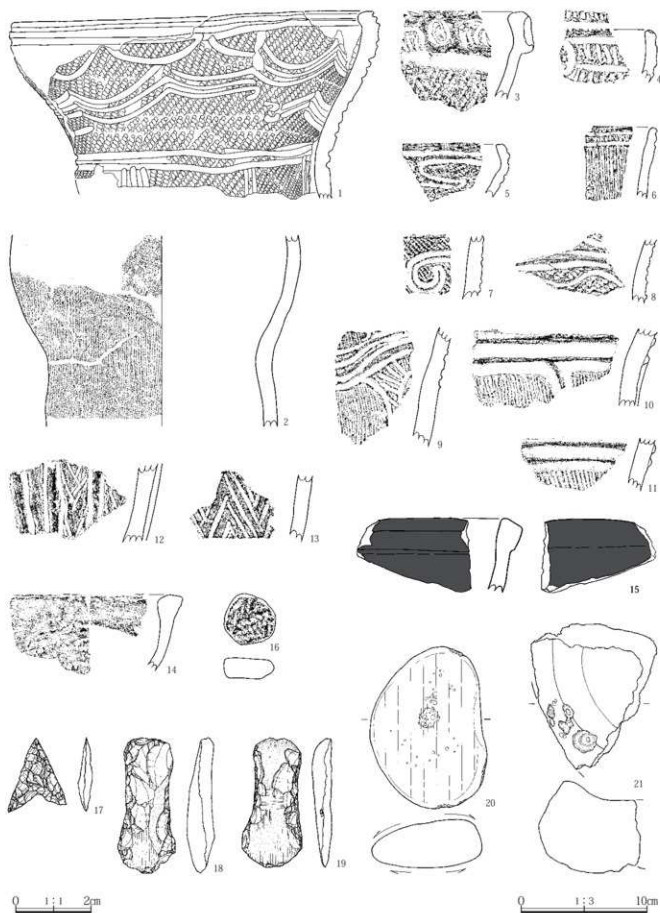
- 1 暗黄褐色土 粘性あり。しまりあり。黄褐色土ブロック状に混入する。
- 2 黒褐色土 粘性あり。しまりあり。黄褐色粒を微量含む。

0 1:60 2m



- 1 黒褐色土 粘性あり。しまりあり。黄褐色土を少量含む。
- 2 暗黄褐色土 粘性あり。しまりあり。
- 3 黒褐色土 粘性あり。しまりあり。下層部に黄褐色土を少量混入する。
- 4 黒褐色土 粘性あり。しまりあり。黒味の強い黒色土。(掘り方理上)
- 5 黄白色土 均一な土でやや明るい黄白色を呈する。粘性・しまりとも強い。ローム層に近似するがやや黒味が強く軟質。(掘り方理上)

第18図 1区3号住居遺構図



第19図 1区3号住居遺物図

Ⅰ区4号住居(PL.13・14・38)

位置：750～756—450～455

規模・形状：平面形状は直径665cm～500cmほどを測る楕円形状を呈する。

長軸方位：N-38°-E

遺存状態：後世の削平により、床面より20cm程しか残らず、加えて重複する風倒木痕により西側壁を壊される。

埋土：暗褐色土による自然埋没の様相を呈すると思われる。

床面：地山ローム土を締め固めて床面とし、炉周辺の床面が硬化する。

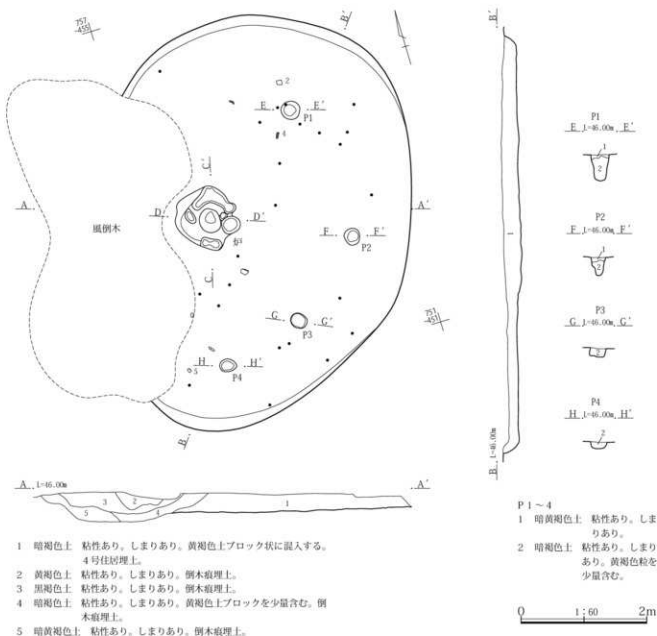
柱穴等：床面上において、直径20～30cm、深度10～41cmを測る柱穴4穴を検出する。

炉・埋裏：住居中央やや西寄りにおいて埋裏炉を検出する。径28cmほどの深鉢の下半を打ち欠き埋設する。周囲には礫を抜き取った痕跡を残し、焼土が散在する。

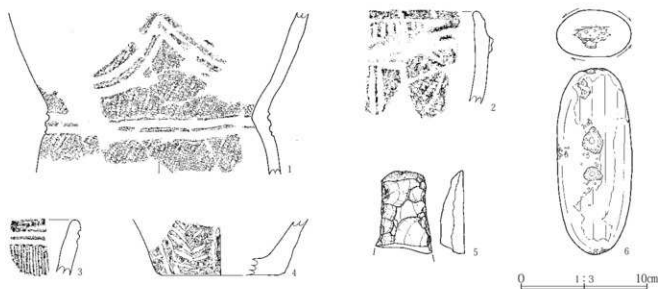
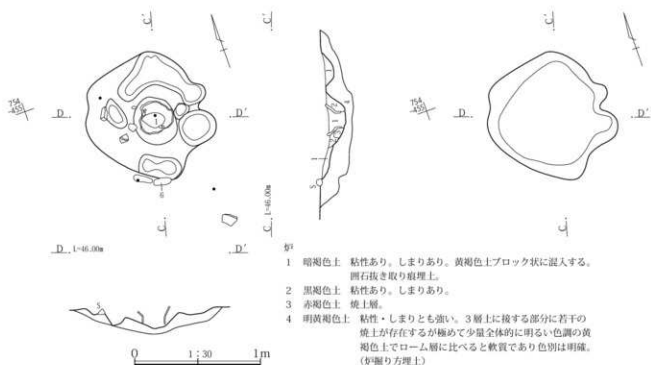
掘り方：なし

出土遺物：住居中央炉内に埋設の深鉢(第21図-1)の他、埋土内より少量の遺物が出土する。

所見：埋裏埋設土器より、住居の年代は縄文時代中期後半と推定される。



第20図 Ⅰ区4号住居遺構図(1)



第21図 1区4号住居遺構図(2)・遺物図

第2表 住居一覧表

区	遺構番号	位置	形状	現棟(m)	面積(m ²)	周溝(m)	主軸方位	壁高(cm)	貯蔵穴(cm)	カマド・炉(cm)	重複
1	1	743~747 -436~-441	隅丸 長方形	長 4.41	16.32	北側 幅31.0 深22.0	N82°E	14	楕円形 長50 短 30 深13	長 92 幅 58	なし
				短 3.70		南側 幅18.0 深15.0					
1	2	755~760 -473~-478	楕円形	長 5.80 短 5.35	推定 24.4	なし	N 8°E	残存深度 約20	埋 糞	長 45 幅 43	3・5・8・ 10号溝
1	3	763~769 -478~-484	楕円形	長 6.70	推定 20.0	なし	N36°W	残存深度 約20		長 89 幅 73	3・5号溝
				短 5.10							
1	4	750~756 -450~-455	楕円形	長 6.65 短 (5.00)	推定 25.0	なし	N38°E	残存深度 約20	なし	長 120 幅 90	なし

Ⅰ区1号竪穴状遺構

位置：729・730—441・442

規模・形状：平面形状は、202cm強×78cmを測る長方形を呈する。北側でⅠ区2号溝と直行して重複し、2号溝の対岸では当遺構の延長が検出されない。

長軸方位：N—8°—E

遺存状態：南東コーナー部を近現代の畑耕作痕に切られ、北側は2号溝に切られる。

埋土：暗褐色土による自然埋没と推察される。

底面：平坦ではあるが、人為的に踏み固められた痕跡は確認されていない。

柱穴等：なし。 掘り方：なし。

出土遺物：なし。

所見：出土遺物もなく、遺構の年代は明らかではないが、上面の削平により失われた竪穴住居の可能性はある。

Ⅰ区2号竪穴状遺構

位置：763～765—484・485

規模・形状：平面形状は、272cm強×136cm強を測る不定形を呈する。

長軸方位：N—2°—W

遺存状態：南側を試掘トレンチに、東側を5号溝に切られて失う。上面の削平により、最大でも深度10cm余りを残すのみ。

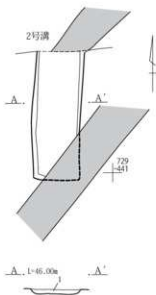
埋土：暗褐色土による自然埋没と推察される。

底面：平坦ではあるが、人為的に踏み固められた痕跡は確認されていない。

柱穴等：なし。 掘り方：なし。

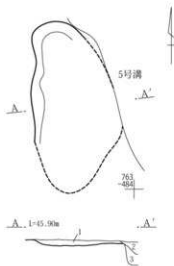
出土遺物：なし。

所見：出土遺物もなく、遺構の年代は明らかではないが、上面の削平により失われた竪穴住居の可能性はある。



Ⅰ区1号竪穴状遺構

- 1 暗褐色土 粘性あり。しまりあり。黄褐色土ブロックを少量含む。



2号竪穴状遺構

- 1 暗褐色土 粘性あり。しまりあり。褐色土ブロックを少量含む。
2号竪穴状遺構埋土。
2 灰黄褐色土 粘性あり。しまりややあり。砂層混入。水性堆積層。
5号溝埋土。
3 黄褐色土と暗褐色土の混土 粘性あり。しまりあり。地山(黄褐色土)と埋土(暗褐色土)の混土。
5号溝埋土。

0 1:60 2m

第3表 竪穴状遺構一覧表

区	遺構番号	位置	形状	規模(m)	深(cm)	主軸方位	面積(m ²)
I	1	729・730 -441・-442	長方形	長(2.02) 短(0.78)	60	N 8° E	(1.4)+
I	2	763～765 -484・-485	不定形	長(2.72) 短(1.36)	10	N 2° W	(2.7)+
III	1	703～709 -430～-434	推定隅丸方形	長 5.74 短(2.98)	14～33	N 35° W	(13.5)+

第22図 Ⅰ区1・2号竪穴状遺構遺構図

Ⅲ区1号竪穴状遺構(PL.15)

位置：704～709—430～434 Ⅲ区北東端部。

規模・形状：隅丸方形を呈すると思われるが、西壁側で2号方形周溝墓とわずかに接し、また、北東半が調査区外にかかるため、全容は不明。

長軸方位：N-35°-W

遺存状態：現代機械耕作痕により寸断される。確認面からの残存深度は14～33cmを測る。重複する2号方形周溝墓との新旧関係は、現代の機械耕作により攪乱され、明らかではないが、出土遺物からみて本竪穴の方が新しい可能性が高い。

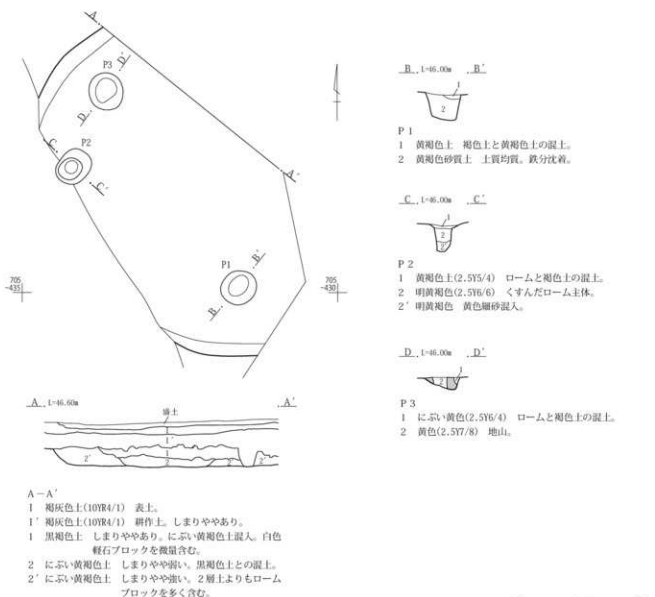
埋土：黒褐～にぶい黄褐色土の自然堆積により埋没する。底面：貼り床をもち、地山土を平坦にして床面とするが、顕著な硬化は認められない。

柱穴等：直径47～60cm、深度18～43cmを測る柱穴が3基検出される。

掘り方：なし。

出土遺物：北側のピット3付近より土師器・須恵器小片が2点出土するのみである。

所見：出土遺物より、遺構の年代は奈良・平安時代と推定される。



第23図 Ⅲ区1号竪穴状遺構遺構図

第2項 掘立柱建物

Ⅰ区1号掘立柱建物(PL.16)

位置：735～741—419～430

規模：2間×2間。梁間(北辺P3・4・5)481cm×桁行(東辺P5・6・7)478cmを測る。

主軸方位：N-90° - E

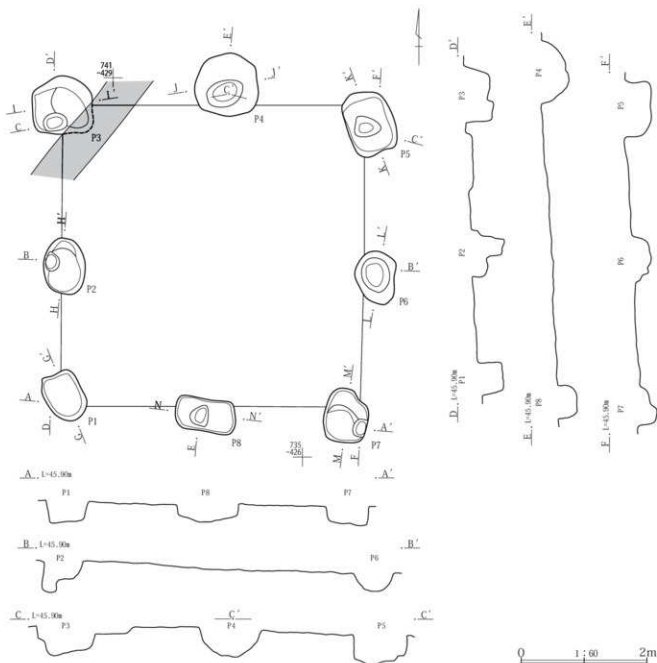
遺存状態：重複する遺構はなく、北西端P3を近現代の畑耕作痕が切るのみ。全体に後世の削平により、柱穴深度は最大でも55cm程を残すにとどまる。

柱穴：直径50～103cm、深度26～55cmを測る柱穴8穴を検出する。全体に柱抜き取りによる拡張が認められ、柱穴跡を残すものはP2・3・7の3穴のみで、直径25～30cmを測る。柱穴に建て替えの痕跡は認められない。

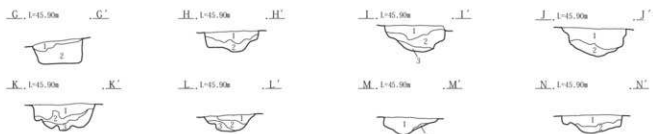
埋土：柱抜き取り後の、黒褐～にぶい黄橙色土による自然埋没の様相を呈する。

出土遺物：なし。

所見：建物の年代については、軸方向・埋土の様相より、Ⅰ区1号竪穴住居と同時期の建物と推定される。



第24図 Ⅰ区1号掘立柱建物遺構図(1)



P 1 G-G'

- 1 黒褐色土 暗褐色土ブロックを含む。
- 2 暗褐色土 軽石を含み均質な土。

P 2 H-H'

- 1 黒褐色土 褐色土ブロックを含む。
- 2 褐色土 黒色土を含む。

P 3 I-I'

- 1 黒褐色土 少量のロームブロックを含む。
- 2 黒褐色土 1層上より暗い。ロームブロックを含む。
- 3 黄褐色土 ローム主体。黒褐色土ブロックを含む。

P 4 J-J'

- 1 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロックを含む。1層上より明るい。

P 5 K-K'

- 1 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 2 にふい黄褐色土 ローム主体。黒褐色土ブロックを含む。
- 3 黒褐色土 1層上よりやや明るい。ロームブロックを含む。

P 6 L-L'

- 1 灰褐色土 黒褐色土ブロックを含む。
- 2 暗褐色土 少量の黒褐色土ブロックを含む。
- 3 灰黄褐色土 少量の黒褐色土ブロックを含む。

P 7 M-M'

- 1 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 2 にふい黄褐色土 少量の黒褐色土小ブロックを含む。

P 8 N-N'

- 1 黒褐色土 少量のローム小ブロックを含む。
- 2 灰黄褐色土 ローム小ブロックを含む。

第4表 掘立柱建物一覧表

位置	736～741	→425～430		方位	N-90°?		規模	梁間4.81m(2)間×桁行4.78m(2)間
番号	位置	形状	長(cm)	短(cm)	深(cm)	柱間	長(m)	備考
P 1	736→430	隅丸長方形	77	60	35	P1～P2	2.21	
P 2	738→430	楕円形	88	66	32	P2～P3	2.54	
P 3	740→430	隅丸長方形	95	93	44	P3～P4	2.55	
P 4	741→427	隅丸長方形	101	99	42	P4～P5	2.26	
P 5	740→425	隅丸長方形	103	76	41	P5～P6	2.68	
P 6	738→425	不整形	86	63	26	P6～P7	2.10	
P 7	735→425	不整形	86	70	27	P7～P8	2.53	
P 8	735→427	長方形	97	50	28	P8～P1	2.24	

第25図 I区1号掘立柱建物遺構図(2)

第3項 井戸・土坑・ピット

I区1号井戸(PL.18)

位置: 742→430

規模・形状: 平面形状は直径114cm×111cmを測る円形を呈し、断面形状は筒形を呈する。

遺存状態: 残存深度は164cmを測る。

埋土: 少量の黄褐色土ブロックを含む黒褐色土による自然埋没の様相を呈し、儀式的な井戸埋めの痕跡などは認められない。

湧水層: 底面より80cmほどの所で、壁面の扶れが確認され、この部分が主な湧水層と推察される。

出土遺物: 土師器・須恵器小片2点を埋土内から出土す

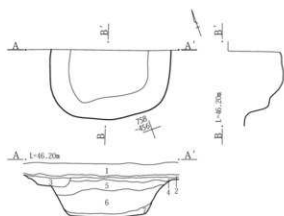
るのみである。

所見: 木杵や礫を組んだ痕跡は認められず、埋土中よりの礫・木材の出土もないことから、石組みや木杵を持たない素掘りの井戸であったと考えられる。遺構の年代は出土遺物が少なく根拠に乏しいものの、遺構の配置から1号竪穴住居・1号掘立柱建物と同時期と推定される。

I～IV区の土坑・ピット(PL.17～21・38・39)

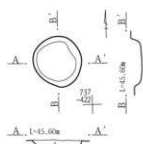
遺跡全体が後世の削平や現代機械耕作痕による寸断を著しく受けているため、深度の浅い遺構や掘乱内に収まる小さな遺構の多くは消失している可能性が高く、検出基数や分布が、必ずしも当時の状況を示しているとは言えない。以下に調査区ごとの様相を記し、土坑の規模等

第4章 遺構と遺物



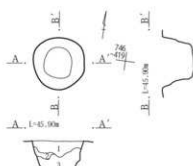
1号土坑

- 1 暗灰褐色土 表上耕作土。
- 2 暗褐色土 赤褐色土まばらに含む。耕作土。
- 3 暗褐色土 耕作痕埋土。
- 4 暗褐色土 粘性ややあり。しまりややあり。色調やや灰色味がかかる。
- 5 暗褐色土 粘性あり。しまりややあり。黄褐色粒を微量含む。1号土坑埋土。
- 6 暗褐色土 粘性あり。しまりあり。やや水分を含む。黄褐色土ブロックを少量含む。1号土坑埋土。
- 7 暗褐色土と黄褐色土の混土 粘性あり。しまりあり。埋土(暗褐色土)と地山(黄褐色土)の混土。



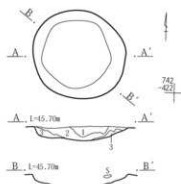
4号土坑

- 1 褐色土 ローム粘る。ローム小ブロック・微量の焼土粒子を含む。



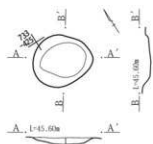
2号土坑

- 1 黒褐色土 やや砂質。少量のロームブロックを含む。
- 2 褐色土 黒褐色土ブロックを含む。
- 3 黒色土 少量のロームブロックを含む。



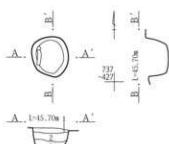
3号土坑

- 1 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 2 暗褐色土 ローム粘る。ロームブロック・少量の白色軽石(φ1~2mm)を含む。
- 3 にぶい褐色土 多量のローム粘る。ロームブロックを含む。



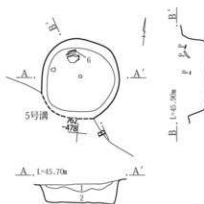
6号土坑

- 1 褐色土 少量のローム小ブロックを含む。



5号土坑

- 1 褐色土砂質土 鉄分の沈着あり。
- 2 にぶい褐色砂質土 ローム粘る。少量のロームブロックを含む。
- 3 黒褐色土 軟質。少量の軽石(φ5~6mm)を含む。



8号土坑

- 1 暗褐色土 粘性あり。しまりあり。
- 2 褐色土 粘性あり。しまりあり。色調やや黄色味がかかる。As-YP粒子少量混入。

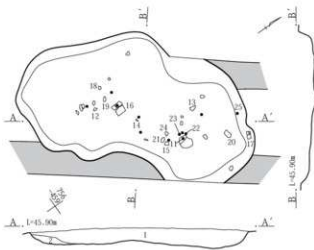


7号土坑

- 1 暗褐色土 粘性あり。しまりややあり。全体的にややザラつきあり。下層部で粘性増す。

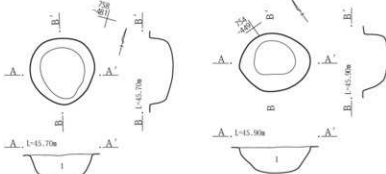
0 1:60 2m

第26図 1区1~8号土坑遺構図



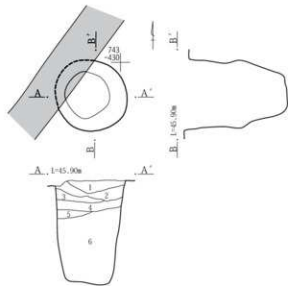
11号土坑

- 1 暗褐色土 粘性あり。しまりあり。黄褐色土ブロック状に混入する。
- 2 暗褐色土 1層上に類似するが色調が1層上より明るい。



10・12号土坑

- 1 暗褐色土 粘性あり。しまりあり。黄褐色土ブロック状に混入する。



1号井戸

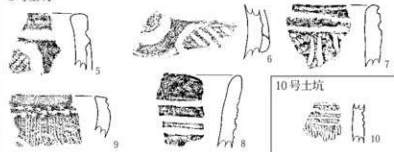
- 1 黒褐色土 粘性ややあり。しまりあり。黄褐色土ブロックを少量含む。
- 2 黒褐色土 1層上に類似するが黄褐色土ブロックは含まない。
- 3 黒褐色土 粘性あり。しまりあり。黄褐色土ブロックをやや多く含む。
- 4 黒褐色土 3層上に類似するが黄褐色土ブロックは含まない。
- 5 黒褐色土 粘性あり。しまり強い。水分ややあり。黄褐色土ブロックを微量含む。
- 6 黒褐色土 5層上に類似する。黄褐色土ブロックがまばらにみられる。



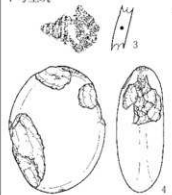
1号土坑



8号土坑



7号土坑



10号土坑



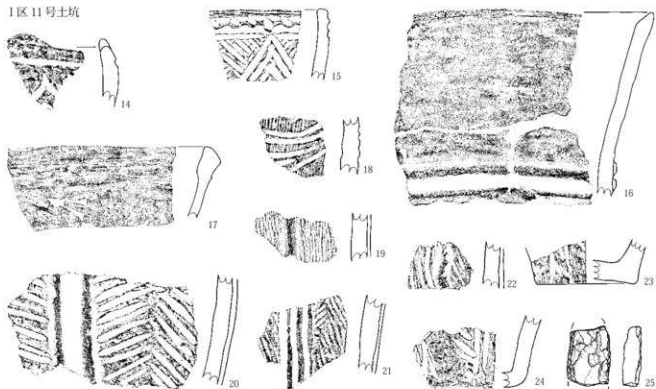
11号土坑



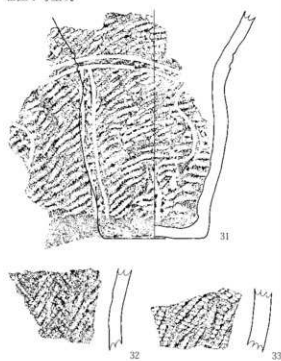
第27図 1区10～12号土坑・1号井戸遺構図、1・7・8・10・11号土坑遺物図

第4章 遺構と遺物

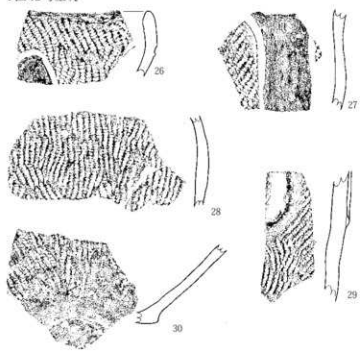
I区11号土坑



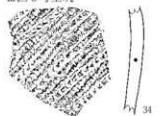
III区1号土坑



I区12号土坑



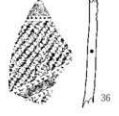
III区6号土坑



IV区2号土坑



IV区8号土坑

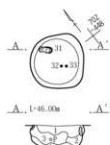


IV区8号土坑



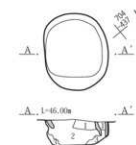
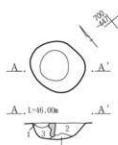
第28图 I区11・12号土坑、III区1・6号土坑、IV区2・8号土坑遺物図

第2節 検出遺構と出土遺物

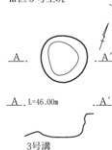


III区 1・2号土坑

- 1 褐色土 しまり強い。白色細粒を含む。
- 2 褐色土 くすんだロームブロックと1層上の混上。
- 3 くすんだ黄褐色土 くすんだローム主体。土器片含む。
- 4 くすんだ黄褐色土 しまりやや強い。ロームとくすんだロームの混上。



III区 5号土坑



III区 3号土坑

- 1 くすんだ黄褐色土 しまりやや強い。くすんだロームブロックを含む。
- 2 黒褐色土 土質均質。しまりややあり。白色軽石粒を含む。
- 3 ロームブロック主体 2層上ブロックを含む。

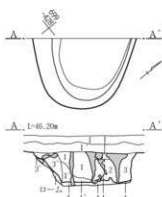
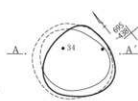


III区 4号土坑

- 1 褐色土 くすんだロームブロックと1層上の混上。
- 2 くすんだ黄褐色土 くすんだローム主体。土器片含む。

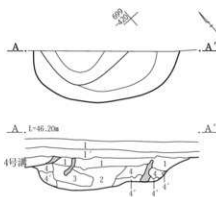
III区 6号土坑

- 1 黒色土 しまり強い。白色軽石粒を含む。わずかに炭化物を含む。
- 2 黒褐色土 土質均質。白色粒わずかに含む。
- 3 暗褐色土 土質均質。しまりあり。くすんだロームを含む。
- 3' 暗褐色土 土質均質。しまりあり。
- 4 灰黄褐色土 灰色に変色したロームブロック混上。



IV区 1号土坑

- 1 灰褐色土 表土。
- 1' 灰褐色土 田耕作土。鉄分沈着あり。
- 1 黒褐色土 土質均質。しまり強い。白色軽石を含む。
- 1' 黒褐色土 しまり強い。ローム粒子混入。
- 2 黄褐色土 白色軽石を含む。1' 層上よりもロームを多く含む。
- 3 黄褐色土 土質均質。しまり強い。ローム粒子を多く含む。
- 3' 黄褐色土 3層上に比べしまり強い。
- 4 明黄褐色土 ロームブロック主体。貼り床状に踏みしめられている。



IV区 3号土坑

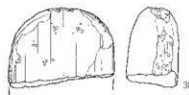
- 1 灰褐色土 表土。
- 1' 灰褐色土 田耕作土。鉄分沈着あり。
- 1 褐色土 崩れたロームブロックと褐色土の混上。
- 2 オリーブ褐色土(2.5Y4/4) 崩れたロームに白色軽石を含む。
- 3 暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3) 2層上よりも黒い。ローム少ない。
- 4 黄褐色土(2.5Y5/4) くすんだローム主体。
- 4' 黄褐色土(2.5Y5/6)



IV区 2号土坑

- 1 暗茶褐色土 しまりあり。マンガン集積。土器片含む。
- 2 くすんだ黄褐色土 くすんだロームブロック混上。鉄分沈着あり。

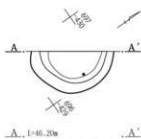
0 1:60 2m



0 1:3 10cm

第29図 III区 1~6・IV区 1~3号土坑遺構図、IV区 6号土坑遺物図

第4章 遺構と遺物



4号土坑

1' 灰褐色土 旧耕作土。鉄分沈着あり。

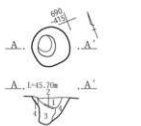
1 暗褐色土 土質均質。しまりやや強い。白色軽石粒を含む。

2 灰黄褐色土 しまりやや弱い。白色軽石・黄色粒子を含む。

3 褐色土 黄色粒を含む。にぶい黄褐色土混入。

4 にぶい黄褐色土 褐色土の混入。しまり弱い。

5 褐色土 土質均質。しまりやや強い。



1号ビット

1 褐色土 粘性非常に強い。

2 炭化物層

3 褐色土 粘性あり。ブロック状。

4 褐色土 ぐすんだローム主体。褐色土混入。



2号ビット

1 黒褐色土 しまり強い。ロームブロック混入。

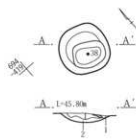


5号土坑

1 ぐすんだ黄褐色土 ぐすんだロームに白色細粒を含む。

1' ぐすんだ黄褐色土 1層上よりロームを多く含む。

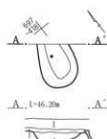
2 黄褐色土 ロームに褐色土ブロックを含む。



6号土坑

1 黒褐色土 しまりあり。わずかに白色細粒を含む。

2 ぐすんだ黄褐色土 しまりあり。ロームブロック混入。



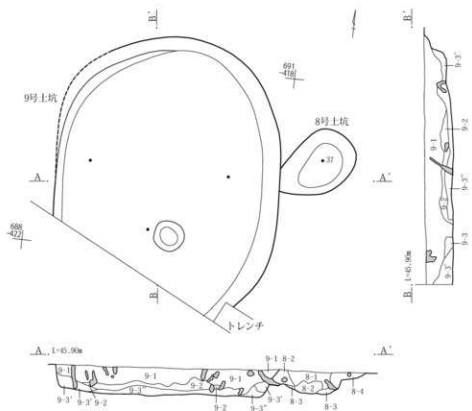
7号土坑

1 灰褐色土 表土。

1' 灰褐色土 旧耕作土。鉄分沈着あり。

1 褐色砂質土(7.5YR4/4) As-B混。

2 褐色粘質土(10YR5/1)



8号土坑

8-1 黒褐色土(10YR3/2) 土質均質。

8-2 黒褐色土(10YR2/2) 土質均質。白色細粒を含む。

8-3 にぶい黄褐色土(10YR5/4) ぐすんだロームに褐色土が混入する。

8-4 黄褐色土(10YR5/6) ぐすんだローム主体。

9号土坑

9-1 黒褐色土(10YR3/1) 土質均質。植物根を多く含む。

9-2 褐色土(10YR4/4) ぐすんだロームと9-1層土を含む。白色細粒を含む。

9-3 黄褐色土(10YR5/6) ロームブロックと9-1層土ブロックの混入。

9-3' 黄褐色土(10YR5/6) しまりあり。ぐすんだロームに白色細粒を含む。

9-3'' 黄褐色土(10YR5/6) しまり強い。9-3層土に似る。

0 1:60 2m

第30図 IV区4～9号土坑、1・2号ビット遺構図

を一覧表(第5表)に記す。

I区検出の土坑は12基を数え、主に1号掘立柱建物の周辺、および2～4号住居の周辺から検出されている。土坑よりの出土遺物としては、1号土坑の埋土より9世紀後半の灰軸陶器耳皿(第27図-2)が、6・9号土坑の埋土から、土師器杯小片がそれぞれ出土し、7・8・10・11・12号土坑内から縄文土器深鉢(第27図-3・5～13、第28図14～24・26～30)が出土する。また、1・

7・11号土坑より磁石・打製石斧(第27図-1・4、第28図-25)などの出土が見られる。

I区東端からII区にかけては、土坑・ピットの検出がみられない。

III区検出の土坑は6基を数え、南東側の2号方形周溝墓周辺にその分布が見られる。検出土坑の全てが現代機械耕作痕により寸断されており、遺存状態は悪い。土坑内よりの出土遺物としては、1・6号土坑内より縄文土

第5表 土坑一覧表

区	遺構番号	位置	形状	長(m)	短(m)	深(m)	長軸方位	重複	区	遺構番号	位置	形状	長(m)	短(m)	深(m)	長軸方位	重複
I	1	759 -456	推定方形	(1.09)	1.92	0.57	N21° E	なし	III	3	704 -438	隅丸 長方形	1.20	0.96	0.41～ 0.51	N38° E	なし
I	2	746 -420	円形	0.82	0.81	0.49		なし	III	4	702 -450	円形	0.84	0.79	0.32		3号溝
I	3	742 -423	円形	1.52	1.39	0.22		なし	III	5	700 -450	円形	0.75	0.74	0.38		3号溝
I	4	737 -422	円形	0.78	0.77	0.16		なし	III	6	695 -439	円形	1.14	1.12	0.56～ 0.60		2号 方周墓
I	5	737 -428	円形	0.62	0.58	0.36		なし	IV	1	699 -427	推定 楕円形	(1.12)	1.54	0.43～ 0.51	N47° W	なし
I	6	732 -425	楕円形	0.95	0.81	0.10	N57° W	なし	IV	2	694 -424	不整形	1.04	0.94	0.22	N50° E	なし
I	7	734 -424	長方形	1.38	1.05	0.65	N12° W	なし	IV	3	699 -421	推定隅丸 方形	2.31 (0.81)		0.31～ 0.53	N39° E	4号溝
I	8	763 -478	隅丸方形	1.29	1.28	0.34		5号溝	IV	4	697 -429	推定円形	1.31 (0.66)	0.43			なし
I	10	757 -481	円形	1.03	1.01	0.35		なし	IV	5	698 -423	不整形	1.25	0.81	0.16	N104° E	4号溝
I	11	758 -460	不整形	3.85	1.95	0.31	N35° E	なし	IV	6	694 -418	円形	0.78	0.76	0.13～ 0.19		なし
I	12	753 -449	楕円形	1.12	0.92	0.40	N55° W	なし	IV	7	696 -418	推定 楕円形	(0.71)	0.53	0.32	N24° E	4号溝
III	1	702 -449	隅丸方形	0.94	0.84	0.50	N55° W	なし	IV	8	690 -417	不整形	1.31	0.87	0.40	N33° E	9号 上土坑
III	2	700 -448	隅丸方形	0.86	0.75	0.29	N7° W	2号 方周墓	IV	9	690 -420	推定隅丸 長方形	(3.96)	3.51	0.23～ 0.44	N6° W	8号 上土坑

第6表 ピット一覧表

区	遺構番号	位置	形状	長(m)	短(m)	深(m)	長軸方位	重複	区	遺構番号	位置	形状	長(m)	短(m)	深(m)	長軸方位	重複
I	1	741 -432	楕円形	42	32	23	N23° W	なし	IV	1	690 -415	円形	59	59	44		なし
I	2	739 -431	楕円形	33	26	22	N85° W	なし	IV	2	692 -415	楕円形	59	50	45	N67° E	なし
I	3	738 -433	不整形	40	38	41	N85° W	なし									

第7表 井戸一覧表

区	遺構番号	位置	形状	長(m)	短(m)	深(m)	長軸方位	重複
I	1	742 -430	円形	1.14	1.11	1.64		なし

器深鉢片(第28図-31～34)が出土する。

Ⅳ区からは、9基の土坑と2基のピットが北西半部から検出され、2・8号土坑内より縄文土器深鉢片(第28図-35～37)が出土し、6号土坑内より凹石(第29図-38)などの出土が見られる。

第4項 溝 (PL.22～31・39)

検出された溝の走行は、調査区内を西から東へと走るものと、北(北西)から南(南東)方向へ走るものの、概ね二通りに大別される。

一次調査のⅡ区で検出された1・3号溝は、互いに550～750cmの間を保ち平行して走行し、Ⅱ区内で共に直角に方向を変えて1区へ向かう。残念ながら1区内では3号溝の痕跡を検出し得なかったが、1号溝は緩やかに走行を南西に変え、二次調査のⅢ区で1・2号溝として調査区内を横断する形で検出された。溝の断面形状は漏斗状を呈し、底面は平坦である。確認面からの残存深度は深く、最大で121cmを測る。埋土中層に多量の細粒砂(川砂)の水性堆積がみられ、河川の氾濫等の被害を受けて中位まで埋没した為に、廃棄されたものと推察される。この二条の溝は、規模・形状が類似する点と、等間隔で常に並走し、途中走行を鋭角に変えることなどから、道路の両側溝である可能性も考えられるが、残念ながら両溝間に路面を示す硬化面の痕跡を確認することはできなかった。また、埋土内の氾濫砂層の流入状態から、河川に直結して取水していたものと考えられ、用水路としての機能があったことは明らかである。このような、道路側溝と用水路の機能を兼ねる遺構の例としては、周辺遺跡にもその類例がみられる。

同じく東西に走行するⅠ区2号溝は、Ⅲ区6号溝に接続するものと考えられるが、深度も浅くⅠ区内で消失するため、その掘削目的は明らかではないが、埋土の様相は前記の1号溝に類似する。

Ⅳ区で検出された溝は、3・4号溝の走行が東西方向であり、4号溝はL字状に屈曲し流水の痕跡も無いことから、区画を目的とする溝と考えられるが、調査区北西端に位置するため区画の全容は明らかではない。

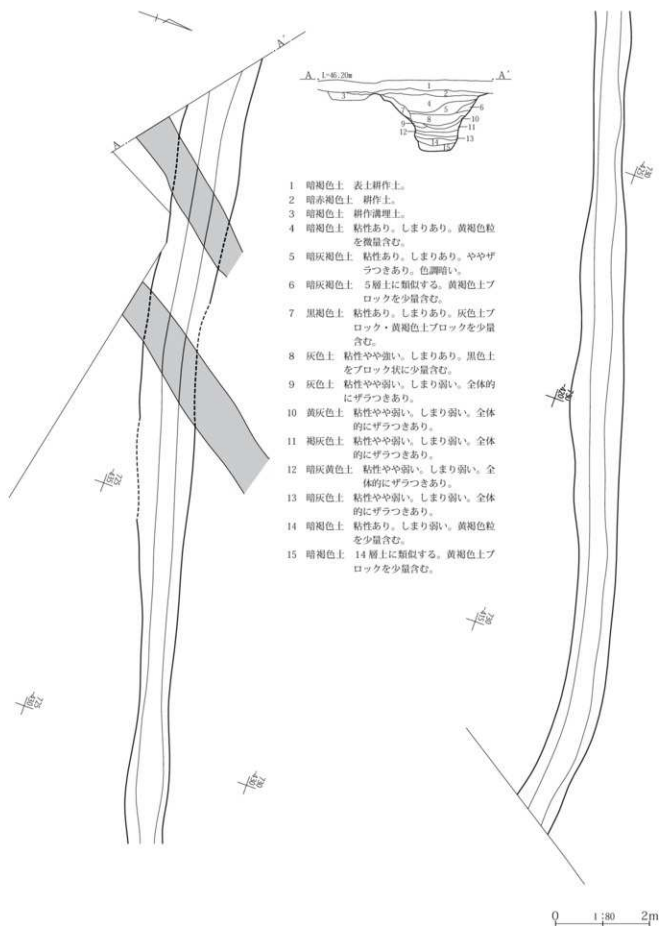
次に、南北走行の溝として、Ⅰ区3～10号溝とⅢ区3～5号溝があり、その形状や位置関係からⅠ区3号溝

とⅢ区4号溝が接続するものと考えられる。これらの溝は堆積埋土や底面の形状に明らかな流水の痕跡が認められ、特にⅠ区5号溝(調査時5・6号溝)・10号溝や9号溝は取水河川の氾濫等による増水の為か、底面に急流による挟れ・崩れ・蛇行などの形状の変形が認められる。Ⅰ・Ⅲ区の3～5号溝は、二基の方形周溝墓の間を縫うように走ることから、方形周溝墓が存在、若しくは痕跡が残る段階で掘削されたものと考えられ、方形周溝墓周溝埋土の上層に浅間Bテフラの堆積が認められることから、溝は11世紀以前の掘削と断定される。

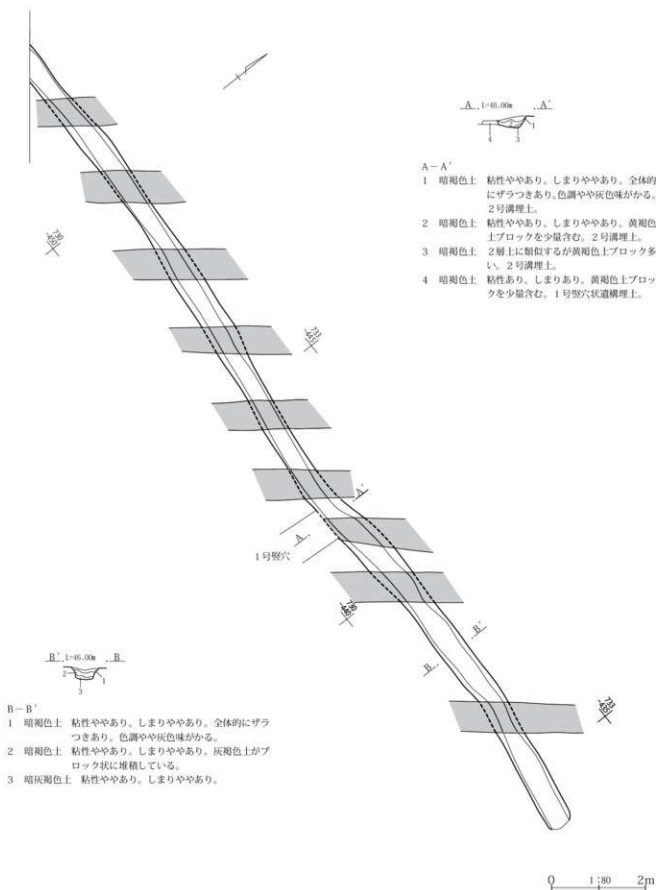
Ⅰ区7・8号溝は、調査時に付近で噴砂が検出されたことから、地震に伴う地割れの痕跡として「平成22年度調査事業概要」にも記されたが、再考の結果、走行の蛇行状態や形状の挟れ等の特徴は、地割れては無く、9号溝と同じく流水によるものと判断された。

検出溝の規模等は、後載の一覧表(第8表)に記す。

特筆すべき出土遺物として、Ⅱ区2号溝出土の刻字石製紡錘車(紡輪)がある。上面に「九」、側面に「犬甘」・「人麻呂」、下面に「大中臣」の文字を刻書し、「九」を除き複数の人名が記されているものと考えられる。文字は深く深いものと、細く浅いものが混在し、紡錘車本体の磨滅に比べて文字の磨滅は少ないことから、紡錘車として在る程度使用された後に、文字を刻み込んだものと考えられる。残念ながら出土状況には祭祀等の特殊性は見られない。



第31図 1区1号溝道構図

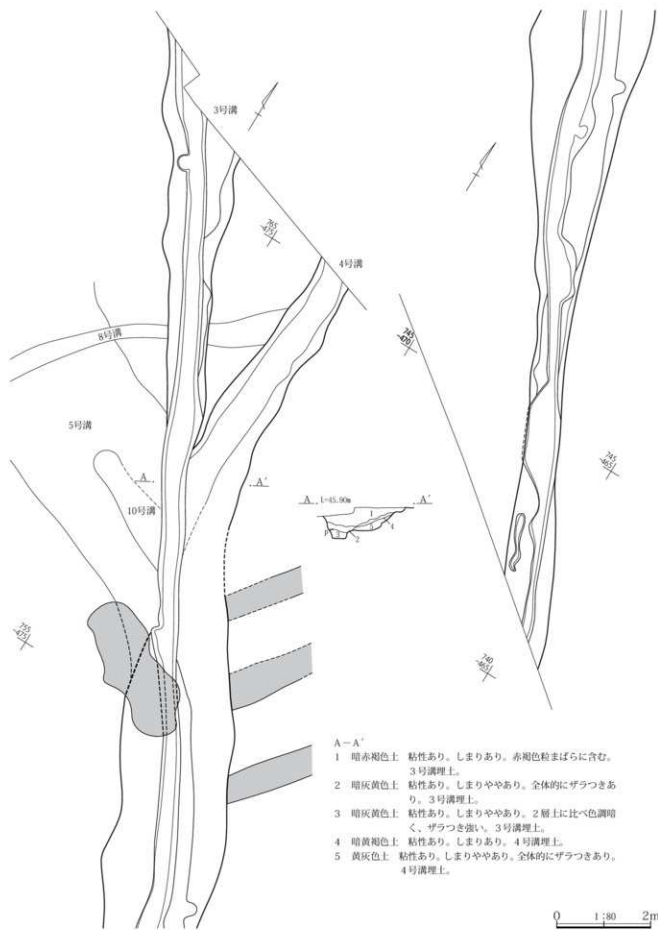


A-A'

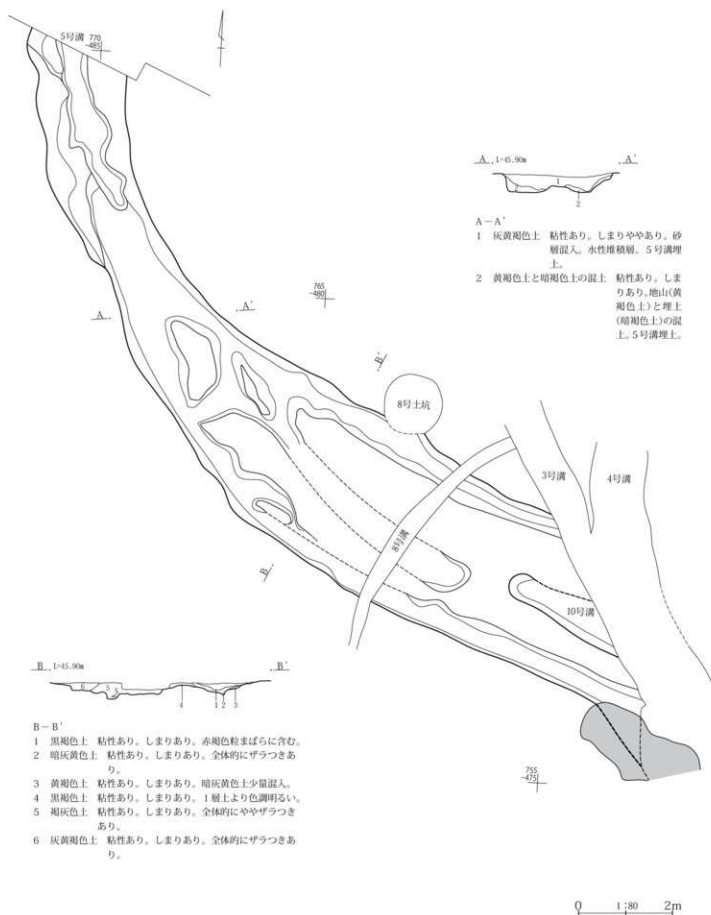
- 1 暗褐色土 粘性ややあり。しまりややあり。全体的にザラつきあり。色調やや灰色味がる。2号溝埋土。
- 2 暗褐色土 粘性ややあり。しまりややあり。黄褐色土ブロックを少量含む。2号溝埋土。
- 3 暗褐色土 2層上に類似するが黄褐色土ブロック多い。2号溝埋土。
- 4 暗褐色土 粘性あり。しまりあり。黄褐色土ブロックを少量含む。1号壁穴状遺構埋土。

B-B'

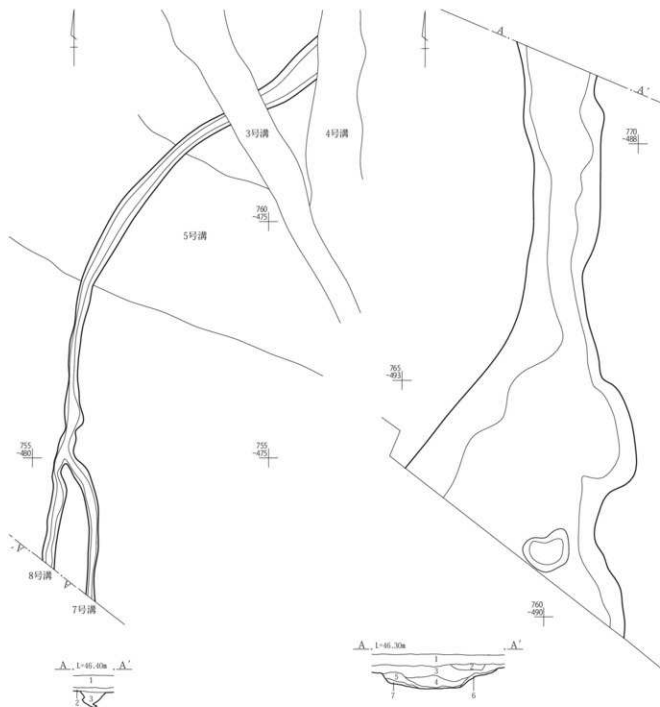
- 1 暗褐色土 粘性ややあり。しまりややあり。全体的にザラつきあり。色調やや灰色味がる。
- 2 暗褐色土 粘性ややあり。しまりややあり。灰褐色土がブロック状に堆積している。
- 3 暗灰褐色土 粘性ややあり。しまりややあり。



第33図 1区3・4号溝遺構図



第34図 1区5・10号溝遺構図



8号溝

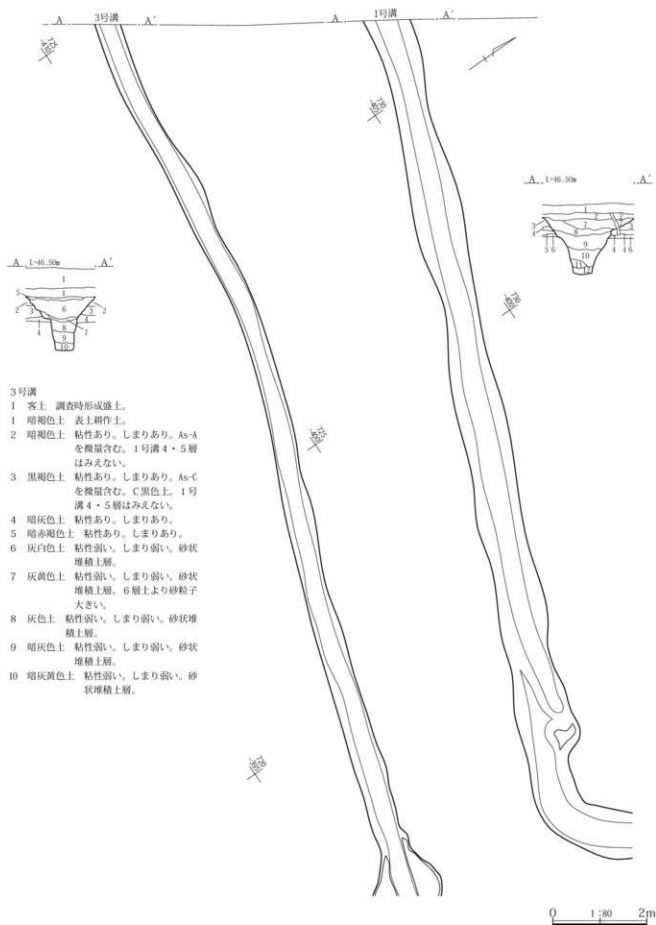
- 1 暗褐色土 表土耕作土。
- 2 黒褐色土 粘性あり。しまりあり。酸化鉄分を少量含む。水田耕作土(床土)と推察される。
- 3 黒褐色土 粘性あり。しまりあり。8号溝埋土。

9号溝

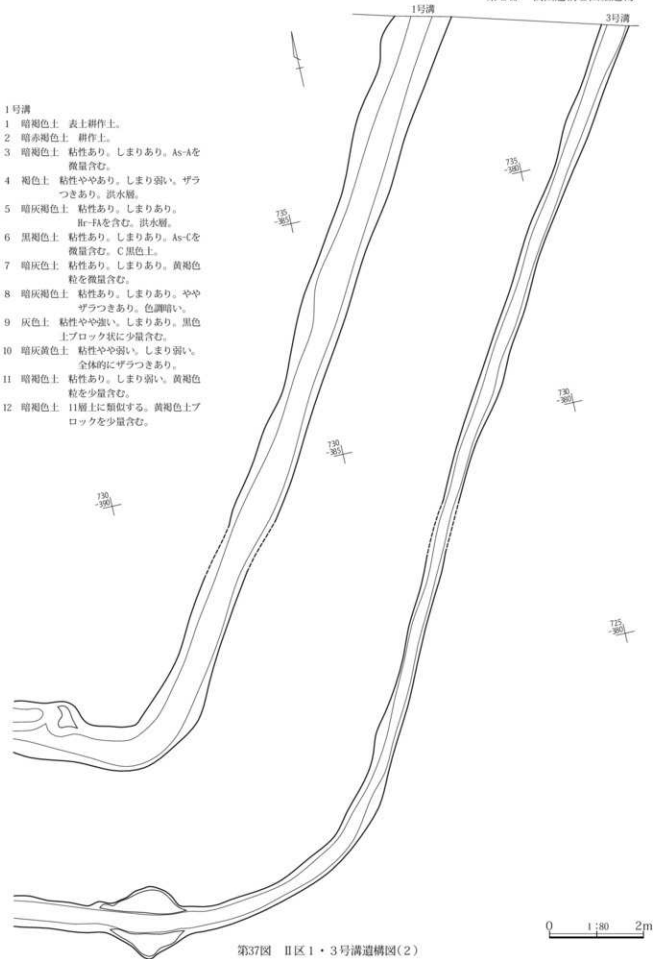
- 1 暗褐色土 表土耕作土。
- 2 暗褐色土 畑耕作埋土。
- 3 黒褐色土 粘性あり。しまりあり。酸化鉄分をまばらに含む。9号溝埋土後の水田耕作土(床土)と推察される。
- 4 灰褐色土 粘性あり。しまりあり。全体的にややザラつきあり。水性堆積層。
- 5 灰褐色砂質土 粘性ややあり。しまり弱い。水性堆積層。
- 6 暗灰褐色土 粘性あり。しまりあり。黄褐色土ブロックを少量含む。
- 7 暗灰褐色土 粘性あり。しまりあり。6層上に類似するが黄褐色土ブロックの混入はみられない。

0 1:80 2m

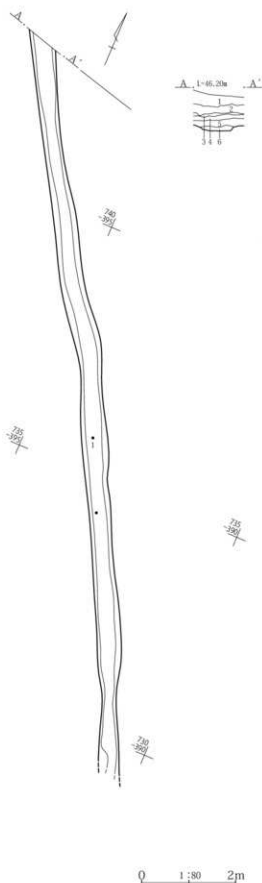
第35図 Ⅰ区7～9号溝遺構図



第36図 II区1・3号溝遺構図(1)

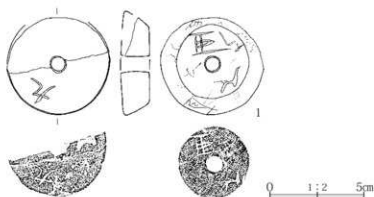


第37図 II区1・3号溝遺構図(2)



2号溝

- 1 暗褐色土 表土耕作上。
- 2 暗赤褐色土 粘性ややあり。しまりあり。水田床土と考えられる。As-Aを少量含む。
- 3 As-B混上层 部分的にはAs-B層が残っているが暗褐色土が混入する。2層上形成時にB堆積層をすき込んだか。
- 4 黒褐色土 粘性あり。しまりあり。As-B下水田黒色土相当と考えられる。
- 5 暗褐色土 粘性あり。しまりあり。酸化鉄を少量含む。
- 6 暗灰褐色土 粘性ややあり。しまりややあり。全体的にザラつきあり。2号溝埋上。



Ⅲ区

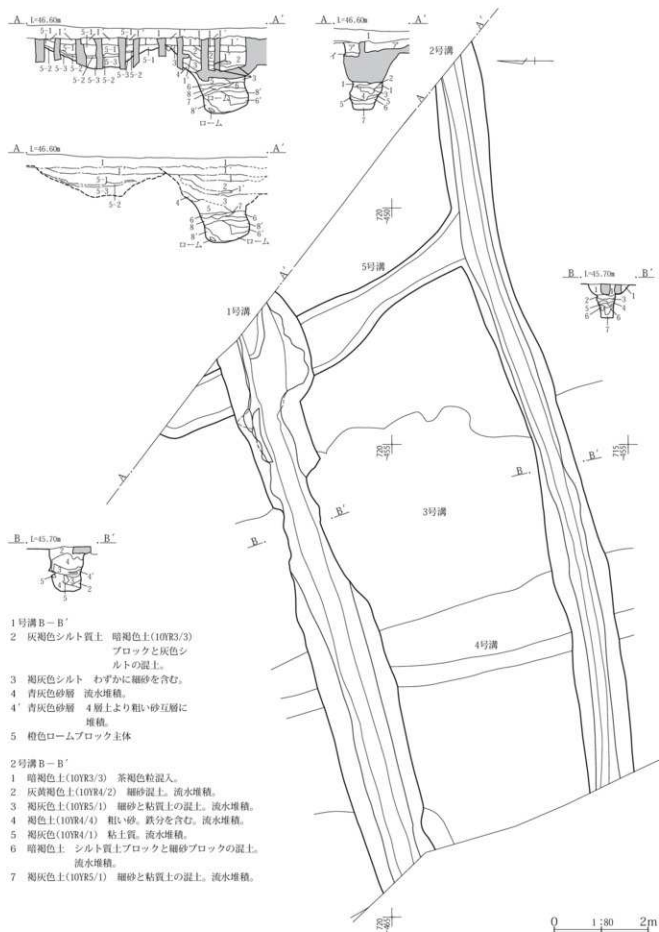
1号溝A-A'

- 1 褐灰色土(10YR4/1) 現耕作上。
- 1' 褐灰色土 耕作上。
- 1 にふい黄褐色土(10YR5/4) 細砂。
- 1' 細砂と褐色土の混土
- 2 灰黄褐色土(10YR5/2) 褐灰色土に細砂構状に入る。
- 3 黒褐色シルト質土(10YR3/2)
- 4 灰色微砂と3層上の混土
- 5 灰黄褐色土(10YR5/2) 2層上と3層上ブロック細砂の混上。
- 6 青灰色細砂層
- 6' 青灰色砂層 6層上よりもやや粗い砂。
- 7 褐灰色シルト 細砂を少し含む。
- 8 青灰色シルト 粘質上。
- 8' 青灰色シルト 粘質上。ロームブロックを含む。
- 5-1 褐灰色土(10YR6/1) 灰色細砂。褐灰色シルトブロックの混上。
- 5-2 明黄褐色土(10YR6/6) ロームブロック主体。
- 5-3 黒褐色土(10YR3/1) ロームブロックを混に含む。くすんだロームと褐色土の混上。

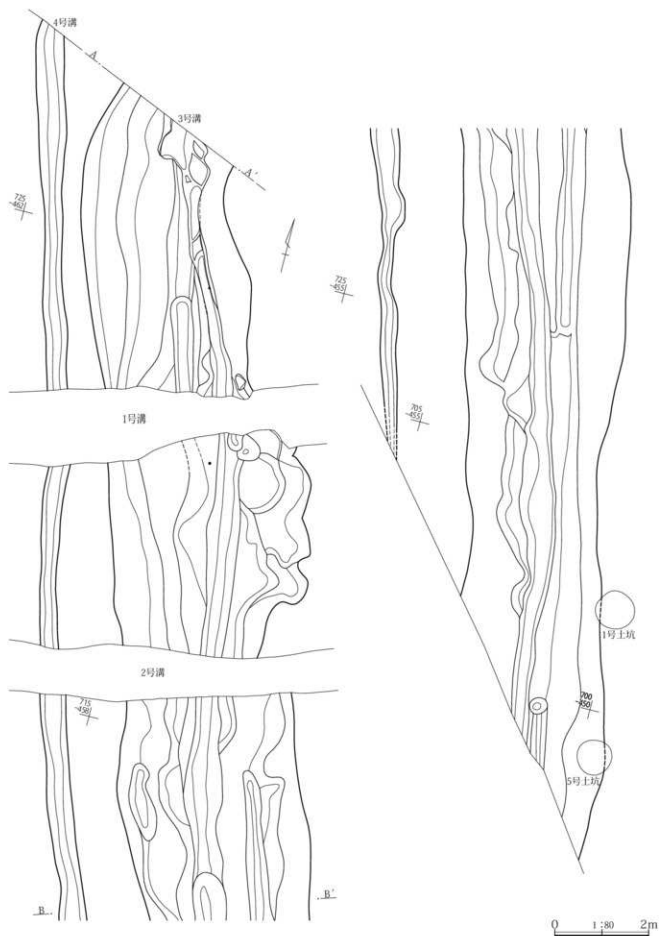
2号溝A-A'

- 1 暗褐色土 現耕作上。
- A にふい黄褐色土 しまり弱く微砂混入。
- イ 黒褐色シルトと灰色シルトの混上。
- 1 砂層
- 2 青灰色シルトと細砂の混上层 流水。
- 3 褐灰色シルトに細砂が混入する。
- 4 にふい黄褐色土(10YR5/4) くすんだロームと褐灰色シルト・細砂ブロックの混上。
- 5 黒褐色土(10YR3/2) 粘性あり。(停滞堆積上)
- 6 にふい黄褐色土(10YR5/4) 細砂とシルトの互層。流水。
- 7 暗黄褐色土 ローム。踏み込んだ層。

第38図 Ⅲ区2号溝遺構図・遺物図

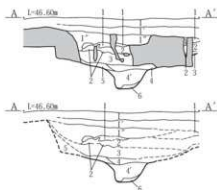


第39図 Ⅲ区1・2・5号溝遺構図

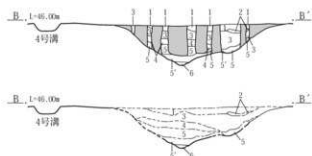


第40图 III区3・4号溝遺構図(1)

第2節 検出遺構と出土遺物



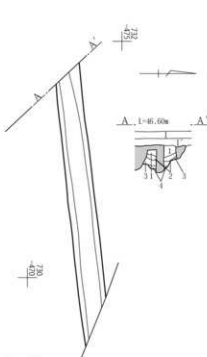
- A-A'
- 1 褐灰色土 現耕作上。
 - 1' 褐灰色土 1層上よりしまり強い。
 - 1'' 褐灰色土 わずかにロームブロックを含む。
 - 1 褐灰色土 細砂多く含む。茶褐色粒混入。
 - 2 茶褐色土 白色粒。鉄分沈着あり。
 - 3 灰褐色粘質土 鉄分沈着あり。
 - 4 灰茶色土 しまり強い。細砂と粘質土の混入。わずかに互層。鉄分沈着あり。
 - 4' 灰茶色土 しまり強い。4層上にロームブロックが混入する。鉄分沈着あり。
 - 5 灰茶色 細砂層。ラミナ状堆積。
 - 6 灰茶色土 しまり強い。ロームブロック混入。鉄分を含む。



- B-B'
- 1 暗褐色土 細粒の白色軽石(As-B?)混入。
 - 2 黒褐色土 しまり弱い。ふかふかした層。
 - 3 褐灰色粘質土(7.5YR4/1) しまりあり。鉄分沈着あり。落水層。
 - 4 灰黄褐色(10YR5/2) 微砂層。
 - 5 にぶい褐色土(7.5YR5/3) しまり強い。細砂混入。鉄分沈着あり。
 - 5' にぶい褐色土 シルトと細砂が互層に堆積。上部に鉄分沈着層あり。
 - 6 明褐色砂質土(7.5YR5/6) 鉄分を含んだ細砂混入。

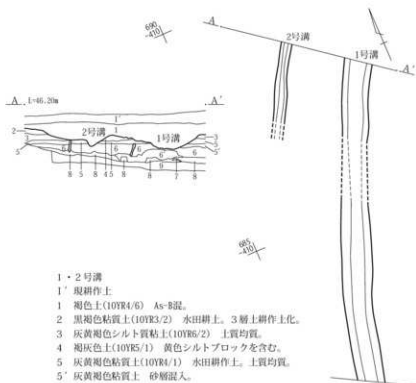
0 1:80 2m

第41図 Ⅲ区3・4号溝遺構図(2)



- A-A'
- 1 褐灰色土(10YR4/1) 現耕作上。
 - 1' 褐灰色土 耕作上。
 - 1 褐灰色土(10YR5/1) 暗い褐灰色土(10YR4/1)の混入。
 - 2 青灰色土 ロームブロック含む。にぶい黄褐色土(10YR4/3 明黄褐色ブロック混入)の混入。
 - 3 褐灰色土(10YR4/1) 細砂粒子を含む。
 - 4 褐灰色土(10YR4/1) 砂層。

第42図 Ⅲ区6号溝遺構図

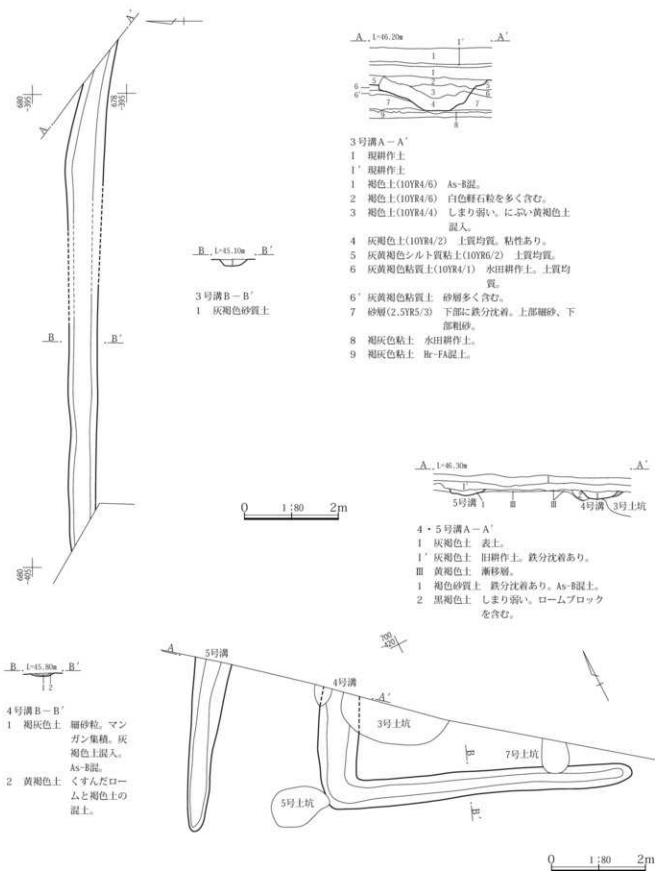


- 1・2号溝
- 1' 現耕作上
 - 1 褐色土(10YR4/6) As-B混入。
 - 2 黒褐色粘質土(10YR3/2) 水田耕上。3層上耕作土化。
 - 3 灰黄褐色シルト質粘土(10YR6/2) 土質均質。
 - 4 褐灰色土(10YR5/1) 黄色シルトブロックを含む。
 - 5 灰黄褐色粘質土(10YR4/1) 水田耕作上。土質均質。
 - 5' 灰黄褐色粘質土 砂層混入。
 - 6 砂層(2.5YR5/3) 下部に鉄分沈着。上部細砂、下部粗砂。
 - 6' 砂層(2.5YR5/3) 下部に鉄分沈着。
 - 7 Ht-FA
 - 8 黒褐色土 シルト質。粘性あり。
 - 9 黒褐色土 8層上よりやや明るいシルト質。粘性あり。ロームブロックを含む。

0 1:80 2m

第43図 Ⅳ区1・2号溝遺構図

第4章 遺構と遺物



第44図 IV区3～5号溝遺構図

第8表 溝一覧表

区	遺構番号	位置	検出長(m)	幅(m)	深(m)	底面標高(m)	走向	重複	断面形状	流水取跡	備考
I	1	724～732 -411～-444	34.15	0.60～ 1.31	70～114	44.74～ 44.51	西から東 N73° E	なし	漏斗状	流水(氾濫) による埋没	Ⅱ区1号溝～Ⅲ区 1号溝へ接続
I	2	730～732 -434～-453	19.94	0.45～ 0.72	12～24	45.71～ 45.57	西から東? N90° E	なし	箱～逆 台形	不明	Ⅲ区6号溝
I	3	740～767 -464～-479	29.00	0.65～ 1.42	27～46	45.27～ 45.05	北から南 N153° E	8号溝より新	漏斗状	流水(氾濫) による埋没	Ⅲ区2号溝へ接続
I	4	746～765 -466～-473	24.72	0.78～ (1.38)	18～36	45.42～ 45.29	北から南 N178° W～ N155° E	7号溝より新 8号溝より新	U字状	有り	
I	5	755～770 -472～-486	19.74	1.36～ 3.57	10～46	45.44～ 45.27	北から南 N160° E	7号溝より古、 10号溝と同期	U字状	有り	
I	7	751～754 -478	3.40	0.14～ 0.32	14～37	45.62～ 45.40	北から南 N8° W	3・4号溝より古、 5号溝より新	U字状	有り	調査時に地盤に伴 う地割れの痕跡と 判断されたが、検 証の結果、溝跡と 判断
I	8	752～763 -473～-479	13.20	0.16～ 0.67	10～35	45.32～ 45.69	北東?から南 N12° E→ N52° E	3・4号溝より古	U字状	有り	
I	9	759～772 -488～-491	12.44	1.47～ 4.65	14～30	45.44～ 45.59	北?から南 N4° E (北から南? N176° W)	なし	U字状	有り	
I	10	757～759 -473～-475	2.80	0.52～ (0.80)	11～19	45.46～ 45.38	北西から南東 N115° E	5号溝と同期	U字状	有り	
Ⅱ	1	724～738 -380～-406	34.48	0.68～ 1.24	40～86	44.45～ 44.75	北東→南西→西 N150° W (北東→南西) N67° W (南西→西)	なし	漏斗状	流水(氾濫) による埋没	Ⅰ区1号溝～Ⅲ区 1号溝へ接続
Ⅱ	2	729～743 -390～-398	15.60	0.30～ 0.56	4～12	45.05～ 45.29	北西から南東 N150° E	なし	U字状	なし	
Ⅱ	3	720～737 -377～-409	42.33	0.33～ 1.52	21～42	44.56～ 44.83	北東→南西→ 西? ? ?	なし	漏斗状	流水(氾濫) による埋没	Ⅰ区未検出 Ⅲ区2号溝
Ⅲ	1	724～732 -411～-444	12.20	1.28～ 1.56	113～ 121	44.67～ 44.73	西から東 N75° E	5・3・4より新、 1号方形周溝墓 より新	漏斗状	流水(氾濫) による埋没	Ⅰ区1号溝～Ⅱ区 1号溝へ接続
Ⅲ	2	730～732 -434～-453	15.64	0.74～ 1.08	104～ 117	44.75～ 44.88	西から東 N76° E	3・4号溝より古	漏斗状	流水(氾濫) による埋没	Ⅱ区3号溝へ接続
Ⅲ	3	740～767 -464～-479	30.08	2.64～ 3.88	49～83	44.93～ 45.19	南から北 N18° W	1・2号溝より古	V～U 字状	有り	
Ⅲ	4	746～765 -466～-473	24.76	0.24～ 0.64	8～18	45.67～ 45.83	南から北 N17° W	1・2号溝より古	逆台形 状	有り	
Ⅲ	5	766～770 -484～-485	6.92	0.64～ 1.32	24～32	45.52～ 45.68	南から北 N33° W	1号溝より古	箱状	なし	
Ⅲ	6	730・731 -469～-475	5.24	0.46～ 0.60	6～30	45.53～ 45.66	西から東 N82° E	なし	漏斗状	流水(氾濫) による埋没	Ⅰ区2号溝へ接続
Ⅳ	1	724～732 -411～-444	6.78	0.56～ 0.66	8～13	45.09～ 45.20	北から南 N159° W	なし	U字状	なし	理上にAs-8混
Ⅳ	2	730～732 -434～-453	(1.60)	0.22～ 0.28	4～8	45.24～ 45.26	北東から南西 N154° W	なし	V字状	なし	理上にAs-8混
Ⅳ	3	740～767 -464～-479	9.96	0.54～ 0.82	10～16	44.83～ 44.91	西から東 N91° E N98° E	なし	U字状	有り	
Ⅳ	4	746～765 -466～-473	8.44	0.48～ 0.86	4～17	45.62～ 45.68	南西から北東 N25° E 西北から東南 N113° E	3・5・7号土坑	U字状	なし	理上にAs-8混
Ⅳ	5	766～770 -484～-485	3.64	0.40～ 0.76	2～9	45.73～ 45.80	南西から北東 N33° E	なし	U字状	なし	理上にAs-8混

第5項 方形周溝墓

Ⅲ区1号方形周溝墓(PL.32・33)

位置：718～728—462～471 Ⅲ区北東端

規模・形状：南東半が調査区外にかかるため、全容は明らかではないが、その規模は約1,050cm四方を測るものと推定される。

長軸方位：N-17°-W

遺存状態：現代機械耕作(トレンチャー)痕により寸断される。Ⅲ区1号溝と重複し、南西コーナー部を失う。

周溝：幅222～264cm、深度36～72cmを測る。

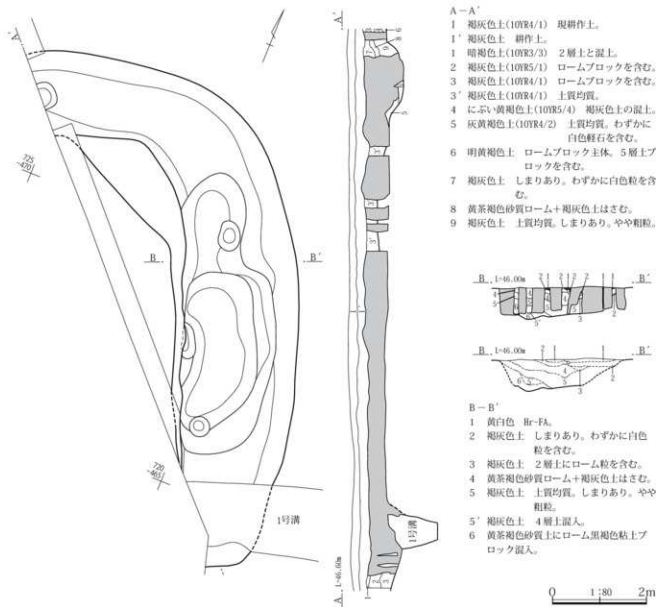
周溝埋土：褐灰色土・黄茶褐色砂質ローム土を主とした自然堆積による埋没で、埋土上層に榛名ニッ岳渋川テフ

ラ(Hr-FA)の堆積が確認される。

主体部：上面の削平により完全に消滅し、調査区南東壁においても、その存在は確認できない。

出土遺物：なし。

所見：南西に位置する2号方形周溝墓と軸方向をほぼ同じくし、規模はひと回り小さいものと推察される。遺構の年代は、4世紀初頭頃と推定されるが、出土遺物が著しく少ないため、詳細な遺構の年代は明らかではない。また、周溝埋土層の上に榛名ニッ岳渋川テフラ(Hr-FA)の堆積が認められることから、周溝の最終埋没の時期は、6世紀初頭頃と推察される。なお、検出火山灰については、テフラ分析・同定を行い、その結果を第5章自然科学分析の項に記したので参照されたい。



第45図 Ⅲ区1号方形周溝墓遺構図

Ⅲ区2号方形周溝墓(PL.32~35・39)

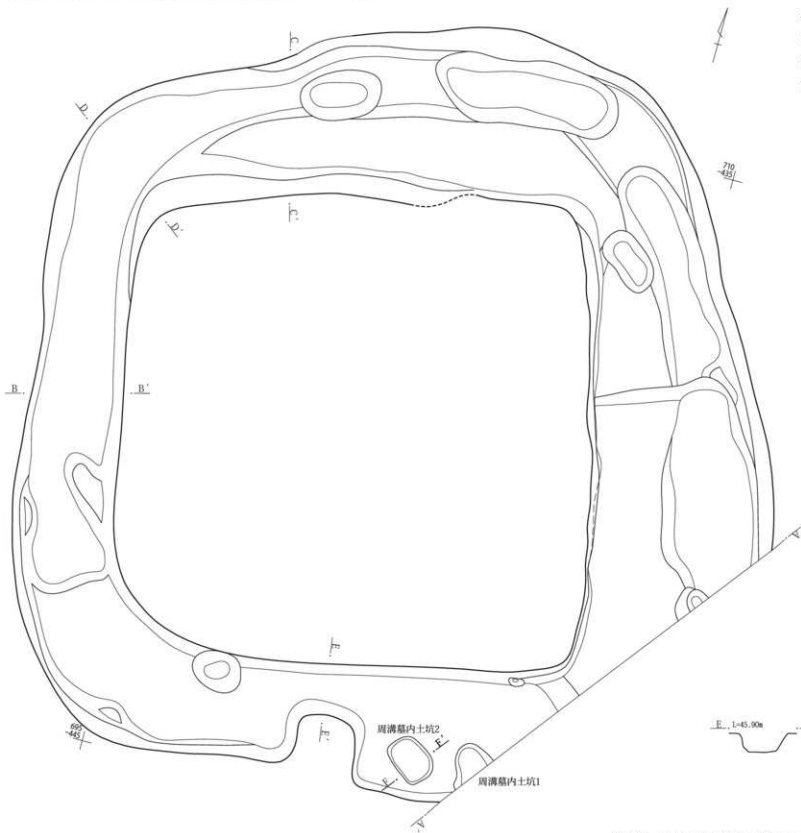
位置：695~711--432~448 Ⅲ区南西端

規模・形状：南西コーナー部が調査区外にかり、全容は明らかではないが、その規模は約16m四方を測り、

平面形状は方形を呈するものと推察される。

長軸方位：N-13°-W

遺存状態：現代機械耕作(トレンチャー)痕により寸断される。



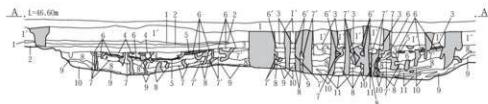
周溝：幅215~390cm、深度29~65cmを測る。

周溝埋土：くすんだ黄褐色砂質土を主とした自然堆積による埋没で、1号方形周溝墓と同様に埋土上層に椀名二ツ岳渋谷テフラ(Hr-FA)の堆積が確認される。

主体部：上面の削平により完全に消滅し、痕跡を確認することができなかった。

出土遺物：出土遺物は極めて少なく、周溝内より土師器台付椀の台部片(第46図-1)が出土するのみである。

所見：南西に位置する1号方形周溝墓と軸方向をほぼ同じくし、規模はひと回り大きい。遺構の年代は4世紀初頭頃と推定されるが、やはり出土遺物が著しく少ないため、詳細な遺構の年代は明らかではない。また、周溝埋土層の上に椀名二ツ岳渋谷テフラ(Hr-FA)の堆積が認められることから、周溝の最終埋没の時期は、1号方形周溝墓同様に6世紀初頭頃と推察される。



A-A'

- | | |
|------------------------------------|--|
| 1 褐灰色土(10YR4/1) 表上。 | 6 黒褐色土(10YR2/3) 黒色ややうすい、軽石少量を含む。 |
| 1' 灰褐色土(10YR4/1) 耕作上。しまりややうあり。 | 7 灰黄褐色土(10YR4/2) しまりややうあり。微細砂粒を含む。(洪水層?) |
| 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 中砂質。しまり弱い。 | 7' 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂粒を多く含む。 |
| 2 褐色土小ブロックと灰黄褐色土の混土。耕作上? | 8 暗褐色土(10YR3/4) 土質均質。 |
| 3 褐色土(10YR5/1) 砂粒を多く含む。ザラつきあり。 | 9 褐色土(10YR4/6) ロームブロック混上。8層上。 |
| 4 黄褐色土 細砂ローム小ブロック(洪水層?)。 | 10 灰黄褐色土 土質均質。 |
| 5 Hr-FA にふい黄褐色。 | 11 にふい黄褐色砂質土。 |
| 6 黒褐色土(10YR2/2) 土質均質。わずかに白色軽石粒を含む。 | |

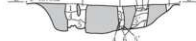
B-B' 1-46.00m



B-B' 1-46.00m



C-C' 1-46.00m



C-C' 1-46.00m



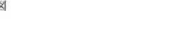
D-D' 1-46.00m



D-D' 1-46.00m



D-D' 1-46.00m



D-D' 1-46.00m

B-B'-C-C'-D-D'-E-E'

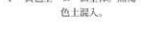
- 褐色~暗褐色土 土質均質。φ1~2mmの白色軽石・Hr-FAを含む。
- にふい黄褐色シルト質土 Hr-FA、土質均質。わずかに白色軽石を含む。
- にふい黄褐色土 灰褐色シルト質土混上。
- 黒褐色土(10YR2/2)
- 黒褐色土(10YR2/3) 土質均質。わずかに白色軽石を含む。
- にふい黄褐色土(10YR4/3) 灰黄褐色土・細砂粒混上。
- にふい黄褐色土(10YR5/3) 細砂・ローム粒子を含む。
- にふい黄褐色土(10YR5/3) 細砂・ロームブロックを含む。
- にふい黄褐色土 灰黄褐色土・黒褐色土小ブロックとローム混上。
- 明黄褐色土 ロームブロック主体。黒褐色土・褐色土混上。
- 暗褐色土(10YR3/4) 多量のロームブロックを含む。



E-E' 1-45.90m



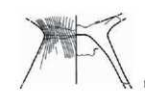
E-E' 1-45.90m



E-E' 1-45.90m



E-E' 1-45.90m



周溝内土坑2 F-F'

1 黄色土 ローム全体。黒褐色土混入。

0 1:60 2m

0 1:3 10cm

第46図 Ⅲ区2号方形周溝墓遺構図・遺物図

第6項 水田 (PL.36)

南東半の谷地部では、溝2条と南北走行の群1条が検出され、この畦畔の高まりを覆うように洪水堆積層(下図6層土)が確認された。この洪水層は、IV区中央部調査区北壁の断面において、浅間Bテフラ(As-B)(下図1層土)と畦下の様名二ツ岳洪川テフラ(Hr-FA)(下図9層土)間にあり、上下テフラとの関係から、弘仁九(818)年の地震に伴う洪水層である可能性が高い。

水田跡の検出に伴い、IV区低地部においてプラントオパール分析を試みた結果、As-B直下において4,000個/gの高い数値が検出されたものの、群が検出された洪水層

下の遺構面においては、数値が低い結果となった。理由として、耕作期間が短かったことなどが考えられる。

また、同地点のHr-FA下の土壌では、ヨシ属が多く検出され、6世紀初頭頃にはヨシ属の生い茂る湿原であったと推察される。

第7項 自然災害跡(地割れ・噴砂)

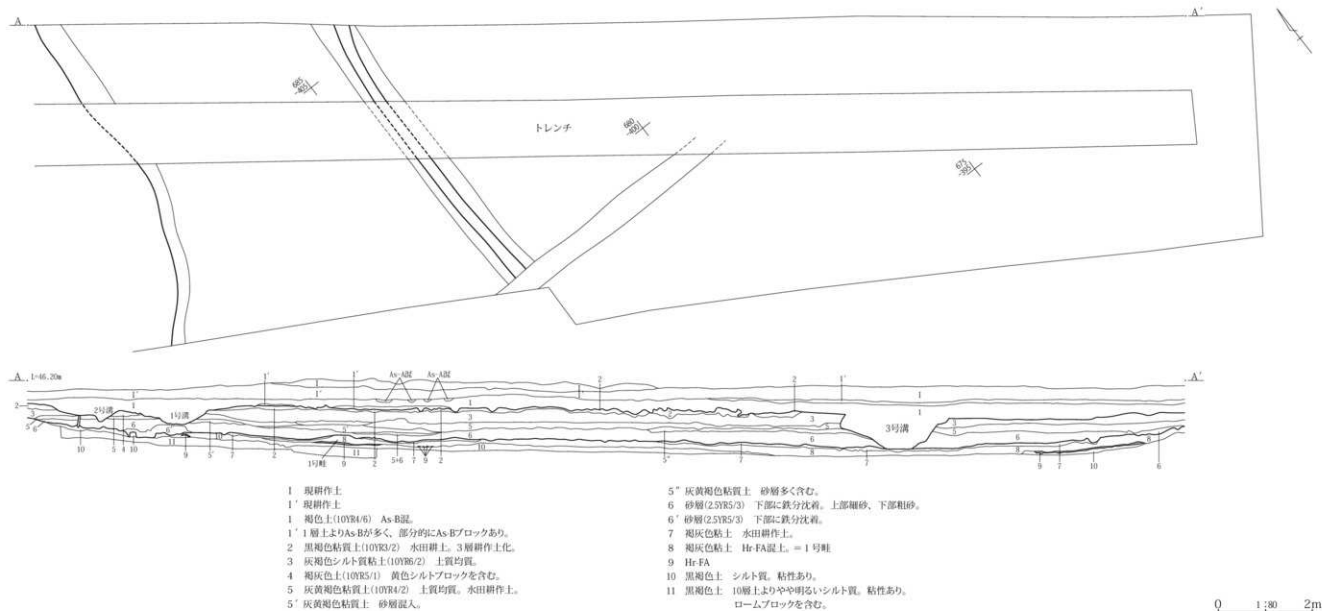
1.地震災害跡

第一次調査において、I区中央北西寄りの3号溝兩岸の地点で、地震の影響によるものと考えられる地割れ・噴砂を検出し、『平成22年度調査事業概要』(実績報告)

にも報告されたが、整理作業時に再考の結果、地割れ跡とされたI区7・8号溝の蛇行状態・形状の抉れ等の特徴は、流水によるものである可能性が高く、地割れ跡とは断言できないと判断された。また、噴砂については、再考するための写真・図面が残されておらず、「検出状況(噴砂上面)が浅間山の天仁元(1108)年噴火に伴うとされる軽石(As-B)層、及びその直下層には至っていない」との調査担当者の記録から、検出された噴砂は、弘仁九(818)年の地震に起因する液状化現象跡である可能性も考えられるが、断言は難しい。

2.洪水・氾濫跡

第一次調査のI・II区において、現代耕作土下から浅間Bテフラ(As-B)層までの間と、As-B層下から様名二ツ岳洪川テフラ(Hr-FA)層との間に、洪水・氾濫による堆積層が確認された。上下に堆積のテフラとの関係から、前者は平安時代以降の洪水氾濫跡、後者は弘仁九(818)年の地震に起因する洪水氾濫跡と考えられる。また、第二次調査のIV区でも、水田跡を覆うように洪水堆積層が確認され、上下に堆積したテフラとの関係から、同じく弘仁九(818)年の地震に起因する洪水氾濫跡と考えられる。



- 1 現耕作土
- 1' 現耕作土
- 1 褐色土(10YR4/6) As-B混。
- 1' 1層上よりAs-Bが多く、部分的にAs-Bブロックあり。
- 2 黒褐色粘質土(10YR2/2) 水田畦上。3層耕作土上化。
- 3 灰褐色シルト質粘土(10YR6/2) 土質均質。
- 4 褐色土(10YR5/1) 黄色シルトブロックを含む。
- 5 灰黄褐色粘質土(10YR4/2) 土質均質。水田耕作土。
- 5' 灰黄褐色粘質土・砂質混入。

- 5' 灰黄褐色粘質土 砂質多く含む。
- 6 砂質(2.5YR5/3) 下部に鉄分沈着。上部粗砂、下部粗砂。
- 6' 砂質(2.5YR5/3) 下部に鉄分沈着。
- 7 褐色粘土 水田耕作土。
- 8 褐色粘土 Hr-FA混入。=1号畦
- 9 Hr-FA
- 10 黒褐色土 シルト質。粘性あり。
- 11 黒褐色土 10層上よりやや明るいシルト質。粘性あり。ロームブロックを含む。

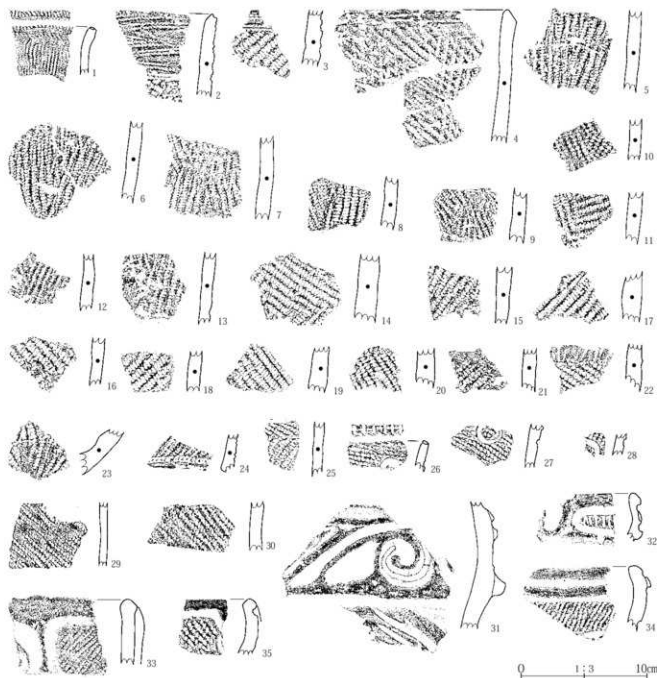
第47図 IV区洪水下水田遺構面

第8項 遺構外出土遺物 (PL.39～44)

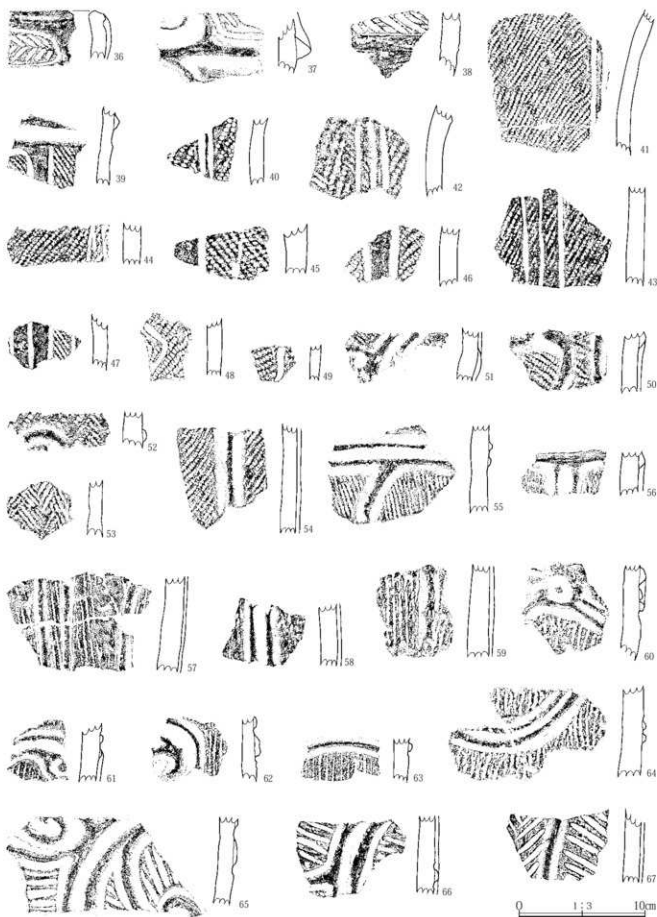
I区は、西側トレンチより土師器杯片(第51図-120)が、表土中より須恵器杯片(第51図-121)が出土する。また、表土内や他遺構混入遺物として、縄文前期から中期後半の土器片(第48図-1～第50図-102)が出土し、併せて、石鏃(第51図-103～105)・石槍(第51図-106)・打製石斧(第51図-107～114)・凹石(第51図-115)・敲石(第51図-116)・台石(第51図-117)・多孔石(第51図-118)などの

石器が出土するほか、中世の五輪塔(第51図-119)も出土している。

II区は、低地部の縄文時代の包含層より、前期後半から後期初頭の土器片(第52図-1～19)が出土し、併せて、石鏃(第52図-20・21)・石匙(第52図-22・23)・楔形石器(第52図-24)・打製石斧(第52図-25～28)・凹石(第52図-30・第53図-31～33)・磨石(第53図-34～39)・敲石(第53図-40～42)・スタンプ型石器(第53図-43)・台石(第53図-44・第54図-45)などの石器が出土する。



第48図 I区遺構外遺物図(1)

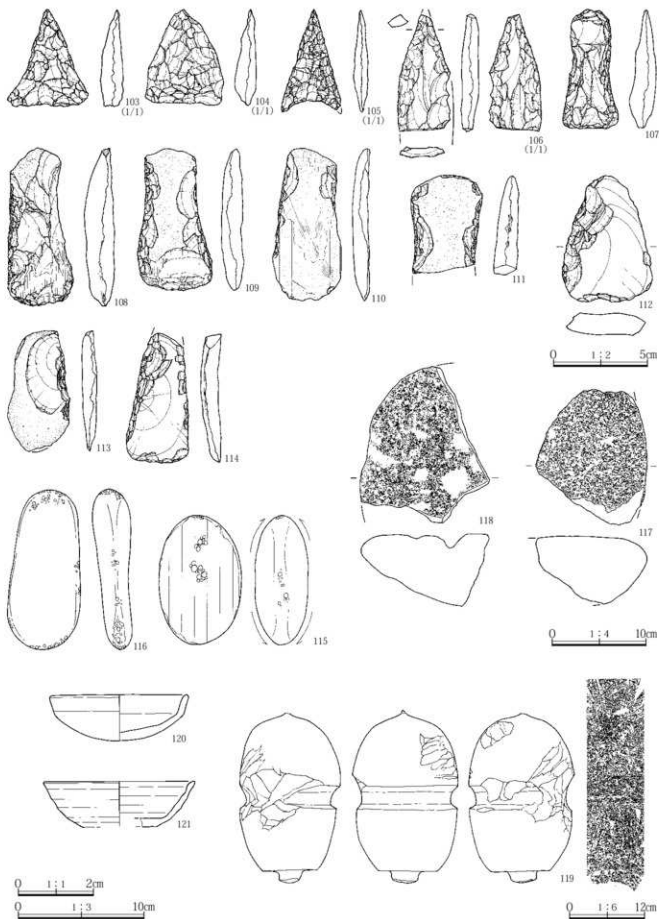


第49图 I区遺構外遺物図(2)

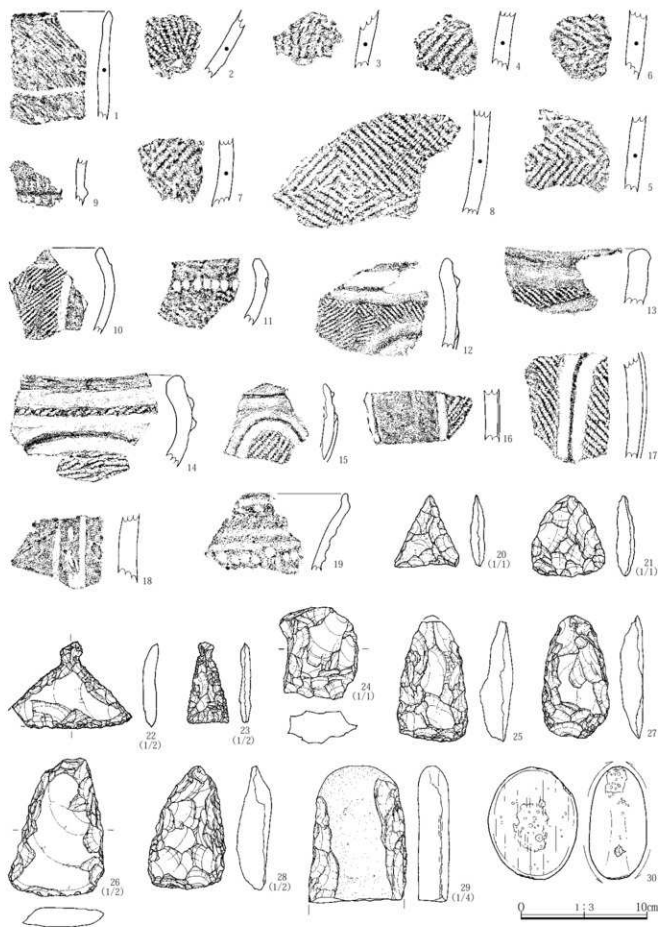


第50図 I区道構外遺物図(3)

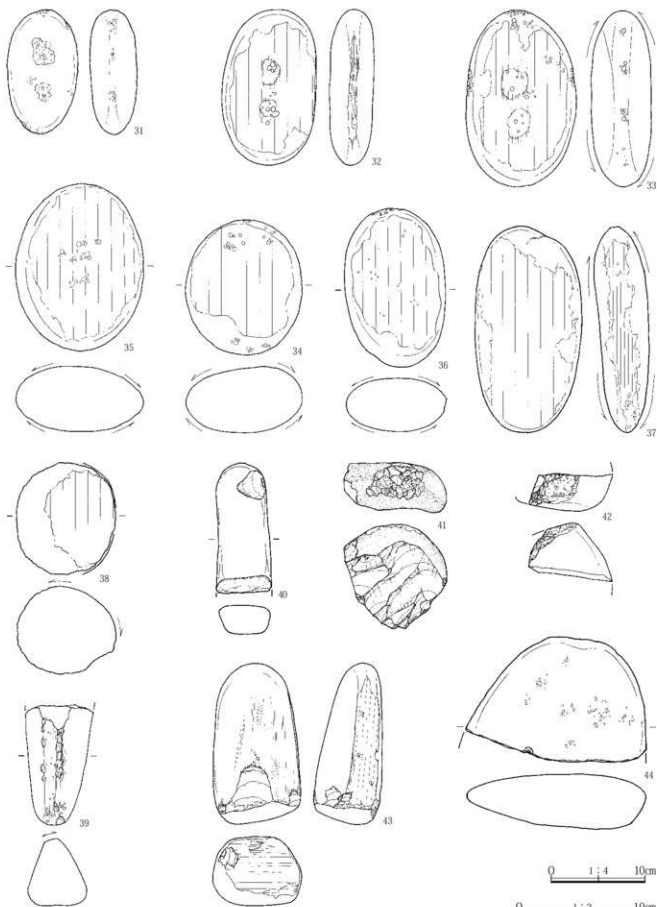
第4章 遺構と遺物



第51図 Ⅰ区遺構外遺物図(4)



第52図 II区遺構外遺物図(1)

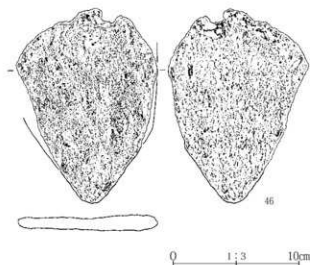
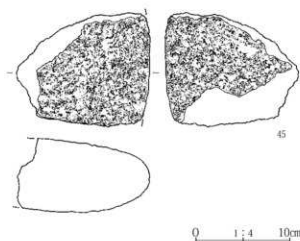


第53图 II区遺構外遺物图(2)

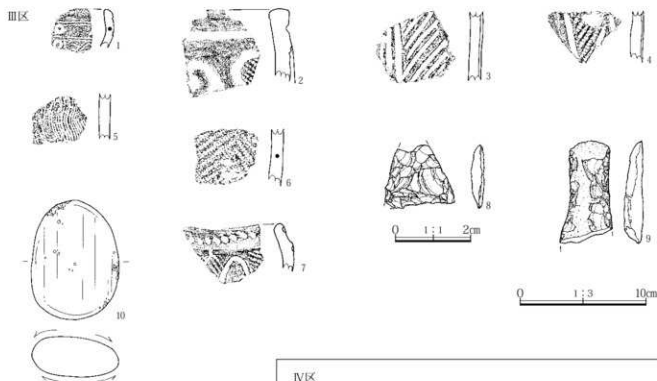
Ⅲ区は、少量の縄文前期から中期後半の土器片(第55図-1~7)の出土がみられ、同じく少量の石鏃(第55図-8)・打製石斧(第55図-9)・磨石(第55図-10)などの

石器が出土する。

Ⅳ区は、2片の縄文前期・中期後半の土器片(第55図-11・12)の出土がみられるのみである。



第54図 Ⅱ区遺構外遺物図(3)



第55図 Ⅲ・Ⅳ区遺構外遺物図

第4章 遺構と遺物

第9表 縄文土器観察表

1区2号住居

縄文番号 図版番号	No.	種類 器種	部 位	出 上 位置	胎土/色調/焼成	文 様 の 特 徴 等	備 考
第17図 Pl.37	1	深鉢	口縁-胴 部片	-9	粗砂、細礫/褐色 良好	内反する波状口縁の波面下に沈線で連続文を描き、口縁下に2ないし3条の沈線を巡らせて文様帯を区画する。地文にR.Lの縄文を横位・縦位に施す。口径26.0cm、高さ(13.5)cm。	加曾利 E 2式
第17図 Pl.37	2	深鉢	口縁-胴 部片	床面直上	粗砂、細礫/黄褐色 ふつう	内反する平口縁の口縁下に沈線間に上下の交互斜突をもつ2条の沈線を巡らせ、その下に3条の沈線で連続文を描き、胴部の括れ部に交互斜突をもつ2条の沈線を巡らせて文様帯を区画し、胴部下平にも3条の沈線で連続文を描く。胎土上部に2ないし3条の沈線が認められる。口径25.5cm、高さ(13.5)cm。	加曾利 E 2式
第17図 Pl.37	3	深鉢	口縁部片	覆 瓦	粗砂、細礫/黄褐色 ふつう	小突起をもつ平口縁で、突起部に隆帯と沈線で満状の文様を描く。	加曾利 E 2式
第17図 Pl.37	4	深鉢	口縁部片	埋 土	粗砂、細礫/褐色 ふつう	内反ぎみの平口縁の口縁下に沈線間に凹形斜突をもつ2条の沈線を巡らせ、その下に2条の沈線で連続文を描き、胴部の括れ部に凹形斜突をもつ2条の沈線を巡らせて文様帯を区画する。地文にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第17図 Pl.37	5	深鉢	胴部片	床面直上	粗砂、細礫/暗褐色 ふつう	内反する口縁の口縁部に3条の沈線で波状文を描き、地文に縦位の条線を施す。	加曾利 E 2式
第17図 Pl.37	6	深鉢	胴部片	覆 瓦	粗砂、細礫/褐色 ふつう	口縁文様に沈線で波状文を描き、地文に縦位の条線を施す。	加曾利 E 2式
第17図 Pl.37	7	深鉢	胴部片	床面直上	粗砂、細礫/黄褐色 良好	胴部の括れ部に2条の沈線を巡らせて文様帯を区画し、胴部下平に沈線で連続文と波状文を描き、地文にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第17図 Pl.37	8	深鉢	胴部片	覆 瓦	粗砂、細礫/黄褐色 ふつう	胴部に沈線を巡らせ、沈線間に上下交互に斜突を施して文様を描く。	加曾利 E 2式

1区3号住居

縄文番号 図版番号	No.	種類 器種	部 位	出 上 位置	胎土/色調/焼成	文 様 の 特 徴 等	備 考
第19図 Pl.37	1	深鉢	口縁-胴 部片	-9 2号住居 覆瓦	粗砂、細礫/褐色 ふつう	内反する平口縁の口縁下に2条の沈線を巡らせ、その下に1条の沈線で連続文を描き、さらに3条の沈線で連続文を描くが、その下端沈線の先端が渦巻き状となる部分がある。胴部の括れ部に2条の沈線を巡らせて文様帯を区画し、胴部下平に2ないし3条の沈線を縦位に垂下させる。地文にL.Rの縄文を施す。口径27.0cm、高さ(14.3)cm。	加曾利 E 2式
第19図 Pl.37	2	深鉢	胴部中位 片	-23	粗砂、細礫/黄褐色 ふつう	胴部に縦位の条線を施す。	加曾利 E 2式
第19図 Pl.37	3	深鉢	口縁部片	+11	粗砂、細礫/褐色 ふつう	平口縁の口縁部文様に隆帯で凹形および楕円区画し、凹形区画内に沈線で凹文、楕円区画内に縦位沈線を充填し、以下の胴部にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第19図 Pl.37	4	深鉢	口縁部片	+12	粗砂、細礫/暗褐色 ふつう	内反する平口縁の口縁に斜みを巡らせ、口縁部文様に沈線で凹形および楕円等の文様を区画し、楕円区画内に縦位沈線を充填し、地文にL.Rの縄文を施す。	加曾利 E 2式
第19図 Pl.37	5	深鉢	口縁部片	埋 土	粗砂、細礫/暗褐色 ふつう	内反する平口縁の口縁部文様に沈線で楕円等の文様を区画し、地文にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第19図 Pl.37	6	深鉢	口縁部片	埋 土	粗砂、細礫/暗褐色 良好	平口縁の口縁下に2条の沈線を巡らせ、口縁以下の地文に縦位の条線を施す。	加曾利 E 2式
第19図 Pl.37	7	深鉢	胴部片	埋 土	粗砂、細礫/暗褐色 ふつう	胴部に沈線を巡らせて区画し、2条の沈線で渦巻き状の文様を横位に描き、地文にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第19図 Pl.37	8	深鉢	胴部片	床面直上	粗砂、細礫、白色 砂/暗褐色/ふつう	胴部に2条の沈線を巡らせて文様帯を区画し、その上下に沈線で波状文を横位に描き、地文にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第19図 Pl.37	9	深鉢	胴部片	床面直上	粗砂、細礫/黄褐色 良好	胴部に4条の沈線で波状文を描き、沈線で曲線的な文様を加える。地文に縦位の条線を施す。	加曾利 E 2式
第19図 Pl.37	10	深鉢	胴部片	-21	粗砂、細礫、白色 砂/暗褐色/良好	頸部に2条の隆帯と沈線を巡らせて文様帯を分割し、その下に隆帯と沈線を垂下させる。地文に濃り糸文を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第19図 Pl.38	11	深鉢	胴部片	-21	粗砂、白色砂/暗 褐色/良好	頸部に2条の隆帯と沈線を巡らせて文様帯を分割し、地文に濃り糸文を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第19図 Pl.38	12	深鉢	胴部片	床面直上	粗砂、細礫/黄褐色 良好	胴部に沈線を沿わせた隆帯の懸垂文と、その間に綾杉状の沈線を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第19図 Pl.38	13	深鉢	胴部片	床面直上	粗砂、細礫/灰黄 良好	胴部に綾杉状の沈線を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第19図 Pl.38	14	浅鉢	口縁部片	-21、 埋 土	粗砂、細礫/暗褐色 ふつう	平口縁の浅鉢で、無文。	加曾利 E 2式
第19図 Pl.38	15	浅鉢	口縁部片	床面直上	粗砂、細礫/黄褐色 良好	平口縁の浅鉢で、内外面に赤彩。	加曾利 E 2式
第19図 Pl.38	16	土製 品		+11	粗砂、細礫/褐色 ふつう	凹形の土製円板で、径4.0cm、厚さ1.4cm。土製の胴部片を利用して、側面を研磨する。表面に沈線やR.Lの縄文が残る。	

1区4号住居

縄文番号 図版番号	No.	種類 器種	部 位	出 上 位置	胎土/色調/焼成	文 様 の 特 徴 等	備 考
第21図 Pl.38	1	深鉢	胴部中位 片	-23	粗砂、細礫/黄褐色 ふつう	口縁部文様に3条の沈線で連続文を描き、胴部の括れ部に2条の沈線を巡らせて文様帯を区画する。地文にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第21図 Pl.38	2	深鉢	口縁部片	床面直上	粗砂、細礫/褐色 ふつう	内反ぎみの平口縁の口縁部文様に沈線と隆帯で楕円等の文様を区画し、区画内に縦位沈線を充填する。以下の胴部には3条の沈線で懸垂文を描き、地文にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第21図 Pl.38	3	深鉢	口縁部片	埋 土	粗砂、細礫/暗褐色 良好	平口縁の口縁下に2条の沈線を巡らせ、口縁以下の地文に縦位の条線を施す。	加曾利 E 2式
第21図 Pl.38	4	深鉢	底部片	+12	粗砂、細礫/褐色 ふつう	胴部下平に沈線を沿わせた隆帯の懸垂文と、その間に綾杉状の沈線を縦位に施す。	加曾利 E 2式

第2節 検出構構と出土遺物

I区7号土坑

検出番号 図版番号	No.	種別 器種	部 位	出 土 位置	胎土/色調/焼成	文 様 の 特 徴 等	備 考
第27図 Pl.38	3	深鉢	胴部片	理 土	粗砂、白色粒/灰 橙/ふつう	胴部にL RとR Lによる縦長の菱状となる羽状縄文を施す。	加曾利E 2式

I区8号土坑

検出番号 図版番号	No.	種別 器種	部 位	出 土 位置	胎土/色調/焼成	文 様 の 特 徴 等	備 考
第27図 Pl.38	5	深鉢	口縁部片	理 土	粗砂、細礫/白黄 ふつう	内反ぎみの平口縁の口縁部文様に沈線と陰帯で楕円等の文様を区画し、区画内にLの縄文を横位に施す。	加曾利E 2式
第27図 Pl.38	6	深鉢	胴部片	+30	粗砂、細礫/暗褐 橙/ふつう	内反する口縁の口縁部文様に沈線と陰帯で円形および楕円等の文様を区画し、楕円区画内に斜位沈線を充填する。	加曾利E 2式
第27図 Pl.38	7	深鉢	口縁部片	理 土	粗砂、細礫/灰褐 良好	平口縁の口縁下に2条の沈線を巡らせ、以下に沈線で縦位ないし連弧文を描く。地文にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第27図 Pl.38	8	深鉢	口縁部片	理 土	粗砂、細礫/黄橙 良好	平口縁の口縁下に3条の沈線を巡らせ、地文に器り糸縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第27図 Pl.38	9	深鉢	口縁部片	理 土	粗砂、細礫/褐橙 ふつう	内反する平口縁の口縁下に上下交互に刺突を横位に巡らせ、以下に沈線で連弧文を描く。地文に縦位の条線を施す。	加曾利E 2式

I区10号土坑

検出番号 図版番号	No.	種別 器種	部 位	出 土 位置	胎土/色調/焼成	文 様 の 特 徴 等	備 考
第27図 Pl.38	10	深鉢	胴部片	理 土	粗砂/暗褐/良好	胴部に数条の横位沈線をもち、地文に縦位の条線を施す。	加曾利E 2式

I区11号土坑

検出番号 図版番号	No.	種別 器種	部 位	出 土 位置	胎土/色調/焼成	文 様 の 特 徴 等	備 考
第27図 Pl.38	11	深鉢	口縁部片	+12	粗砂、細礫/褐橙 ふつう	平口縁の口縁下に幅広い平行沈線を巡らせ、その下に4条の沈線で連弧文を描き、連弧文間に点線状の文様を描く。胴部の幅広い平口縁部を巡らせて文様帯を区画し、地文にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第27図 Pl.38	12	深鉢	口縁部片	+19	粗砂、細礫/黄橙 ふつう	平口縁の口縁部文様に沈線と陰帯で楕円区画し、区画内にL Rの縄文を横位に施す。	加曾利E 2式
第27図 Pl.38	13	深鉢	口縁部片	+20	粗砂、細礫/黄橙 良好	内反ぎみの平口縁の口唇に円形刺突を巡らせ、口縁部文様に陰帯で楕円等の文様を区画し、区画内に横位矢羽状沈線を充填する。	加曾利E 2式
第28図 Pl.38	14	深鉢	口縁部片	+15	粗砂、細礫/暗褐 ふつう	小波状口縁の口縁下に2条の沈線を巡らせ、その下に沈線で連弧文を描き、連弧文間に点線状の文様を描き、地文に縄文を施す。	加曾利E 2式
第28図 Pl.38	15	深鉢	口縁部片	+12	粗砂、細礫/褐橙 良好	内反ぎみの平口縁の口縁下に3条の沈線を巡らせ、沈線間に上下交互に横位八字状の刺突をもつ。以下に3条の沈線で連弧文を描き、地文に綾杉状の沈線を縦位に施す。	加曾利E 2式
第28図 Pl.38	16	深鉢	口縁部片	+19	粗砂、細礫/黄橙 ふつう	平口縁の口縁部が無文帯となり、頸部に陰帯を2条巡らせて文様帯を区画する。	加曾利E 2式
第28図 Pl.39	17	浅鉢	口縁部片	+10	粗砂、細礫/褐橙 ふつう	平口縁の浅鉢で、無文。	加曾利E 2式
第28図 Pl.39	18	深鉢	胴部片	+11	粗砂、細礫/黄橙 良好	胴部に3条の沈線で連弧文を描き、地文に器り糸縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第28図 Pl.39	19	深鉢	胴部片	+20	粗砂、細礫/黄橙 良好	胴部に陰帯の懸垂文と、地文に器り糸縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第28図 Pl.39	20	深鉢	胴部片	床面直上	粗砂、細礫/黄橙 良好	胴部に陰帯の懸垂文と、その間に綾杉状の沈線を縦位に施す。	加曾利E 2式
第28図 Pl.39	21	深鉢	胴部片	+14	粗砂、細礫/褐橙 ふつう	胴部に沈線で3条の懸垂文と、その間にL RとR Lによる羽状縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第28図 Pl.39	22	深鉢	胴部片	+12	粗砂、細礫/灰橙 ふつう	胴部に陰帯の蛇行懸垂文と、その間に綾杉状の沈線を縦位に施す。	加曾利E 2式
第28図 Pl.39	23	深鉢	底部片	床面直上	粗砂、細礫/黄橙 良好	胴部下半に沈線の懸垂文と、地文に縦位の条線を施す。	加曾利E 2式
第28図 Pl.39	24	深鉢	底部片	+9	粗砂、細礫/黄橙 良好	胴部下半に沈線の懸垂文と、綾杉状の沈線を縦位に施す。	加曾利E 2式

I区12号土坑

検出番号 図版番号	No.	種別 器種	部 位	出 土 位置	胎土/色調/焼成	文 様 の 特 徴 等	備 考
第28図 Pl.39	26	深鉢	口縁部片	理 土	粗砂、細礫/黄橙 良好	内反する平口縁の口縁下に沈線で逆U字状の文様を描き、区画内を無文帯とする。地文にR Lの縄文を横位・縦位に施す。	加曾利E 3式
第28図 Pl.39	27	深鉢	胴部片	理 土	粗砂、細礫/褐橙 良好	胴部下半に沈線で逆U字状の文様を描き、区画内にR Lの縄文を横位・縦位に施す。	加曾利E 3式
第28図 Pl.39	28	深鉢	胴部片	理 土	粗砂、細礫/黄橙 ふつう	胴部にR Lの縄文を斜位に施す。	加曾利E 2式
第28図 Pl.39	29	深鉢	胴部片	理 土	粗砂、細礫/黄橙 ふつう	胴部に陰帯で胸飾的な文様を描き、地文にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第28図 Pl.39	30	深鉢	底部片	理 土	粗砂、細礫/黄橙 ふつう	胴部下半にR Lの縄文を斜位に施す。	加曾利E 2式

III区1号土坑

検出番号 図版番号	No.	種別 器種	部 位	出 土 位置	胎土/色調/焼成	文 様 の 特 徴 等	備 考
第28図 Pl.39	31	深鉢	胴-底部 片	+18	粗砂/褐橙/良好	口縁部を欠く胴下半で、胴部の括れ部に2条の沈線を巡らせて文様帯を区画し、胴部下半に2条の沈線を縦位に垂下させる。地文に0段多条のR Lの縄文を施す。高さ(16.3)cm、底径8.1cm。	加曾利E 2式

第4章 造構と遺物

検出番号 図版番号	No.	種別 器種	部 位	出 土 位 置	胎土/色調/焼成	文 様 の 特 徴 等	備 考
第28図 PL.39	32	深鉢	胴部片	+37	粗砂、細礫/暗褐色良好	胴部にL RとR Lによる羽状縄文を縦位に施す。	加曾利E式
第28図 PL.39	33	深鉢	胴部片	+39	粗砂、細礫/暗褐色良好	胴部にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E式

Ⅲ区6号土坑

検出番号 図版番号	No.	種別 器種	部 位	出 土 位 置	胎土/色調/焼成	文 様 の 特 徴 等	備 考
第28図 PL.39	34	深鉢	胴部片	+23	雑糠、粗砂/黄/良好	口縁部文様に爪形刺突をもつ平行沈線が斜位に米字文を描き、地文にL Rの縄文を施す。	諸磯a式

Ⅳ区2号土坑

検出番号 図版番号	No.	種別 器種	部 位	出 土 位 置	胎土/色調/焼成	文 様 の 特 徴 等	備 考
第28図 PL.39	35	深鉢	口縁部片	+12	粗砂/暗褐色/ふつつ	平口縁の口縁下に細い爪形刺突をもつ平行沈線を2段添らせて、その下に同様な爪形平行沈線で斜位なしの木文を描く。地文にR Lの縄文を施す。	諸磯a式
第28図 PL.39	36	深鉢	胴部片	+16	雑糠、粗砂/黄/良好	口縁部文様に2条の爪形刺突をもつ平行沈線が斜位に米字文を描き、沈線間を無文とし、地文にL Rの縄文を施す。	諸磯a式

Ⅳ区8号土坑

検出番号 図版番号	No.	種別 器種	部 位	出 土 位 置	胎土/色調/焼成	文 様 の 特 徴 等	備 考
第28図 PL.39	37	深鉢	口縁部片	+38	雑糠、粗砂/灰黄/ふつつ	平口縁の口縁下に条線が横位に弧状の文様を数段施す。	黒浜式

Ⅰ区遺構外

検出番号 図版番号	No.	種別 器種	部 位	出 土 位 置	胎土/色調/焼成	文 様 の 特 徴 等	備 考
第48図 PL.39	1	深鉢	口縁部片	ローム 漸移層	粗砂/暗褐色良好	僅かに外反する平口縁の口内に濃い赤縄文を施し、口縁直下に中斜位の濃い赤文系を施す。以下に縦位の濃い赤縄文を施す。	
第48図 PL.39	2	深鉢	口縁部片	表 土	雑糠/灰黄/ふつつ	平口縁の口縁部文様にLとRの2本組の濃い赤側面圧痕で文様を描き、下部に同様の濃い赤側面圧痕を2条添らせて文様帯を区画す。以下の胴部に0段多条のL Rの縄文を横位に施す。	花積下層1式
第48図 PL.39	3	深鉢	胴部片	表 土	雑糠/灰黄/ふつつ	口縁部文様の下端にLとRの2本組の濃い赤側面圧痕を2条添らせて文様帯を区画し、以下の胴部に0段多条のL Rの縄文を横位に施す。	花積下層1式
第48図 PL.39	4	深鉢	口縁部片	表 土	雑糠/暗褐色/ふつつ	平口縁の口端部が僅かに肥厚し、肥厚部にLの濃い赤側面圧痕を2条添らせて、以下の胴部に0段多条のR Lの縄文を横位に施し、0段多条のL Rの縄文を僅かに斜位に施す。	花積下層1式
第48図 PL.39	5	深鉢	胴部片	表 土	雑糠/灰黄/ふつつ	胴部下半に0段多条のR Lの縄文を斜位に施して条が縦走する。	花積下層1式
第48図 PL.39	6	深鉢	胴部片	表 土	雑糠/黄/ふつつ	胴部に0段多条のL Rと0段多条のR Lにより縦長な変状となる羽状縄文を施す。	花積下層1式
第48図 PL.40	7	深鉢	胴部片	確認面	雑糠/黄/ふつつ	胴部に0段多条のL Rと0段多条のR Lにより縦長な変状となる羽状縄文を施す。	花積下層1式
第48図 PL.40	8	深鉢	胴部片	表 土	雑糠/黄/ふつつ	胴部に0段多条のL Rと0段多条のR Lにより縦長な変状となる羽状縄文を施す。	花積下層1式
第48図 PL.40	9	深鉢	胴部片	ローム 漸移層	雑糠/暗褐色/良好	胴部に0段多条のL Rと0段多条のR Lにより縦長な変状となる羽状縄文を施す。	花積下層1式
第48図 PL.40	10	深鉢	胴部片	確認面	雑糠/暗褐色/黄/ふつつ	胴部に0段多条のL Rと0段多条のR Lにより縦長な変状となる羽状縄文を施す。	花積下層1式
第48図 PL.40	11	深鉢	胴部片	ローム 漸移層	雑糠/暗褐色/ふつつ	胴部に0段多条のL Rと0段多条のR Lにより縦長な変状となる羽状縄文を施す。	花積下層1式
第48図 PL.40	12	深鉢	胴部片	確認面	雑糠、白色粒/灰黄/ふつつ	胴部に0段多条のL Rと0段多条のR Lにより縦長な変状となる羽状縄文を施す。	花積下層1式
第48図 PL.40	13	深鉢	胴部片	表 土	雑糠/灰黄/ふつつ	胴部に0段多条のL Rと0段多条のR Lにより縦長な変状となる羽状縄文を施す。	花積下層1式
第48図 PL.40	14	深鉢	胴部片	表 土	雑糠、白色粒/灰黄/良好	胴部に0段多条のL Rと0段多条のR Lによる横位の羽状縄文を施す。	花積下層1式
第48図 PL.40	15	深鉢	胴部片	確認面	雑糠、白色粒/暗褐色/ふつつ	胴部に0段多条のL Rと0段多条のR Lによる横位の羽状縄文を施す。	花積下層1式
第48図 PL.40	16	深鉢	胴部片	確認面	雑糠/暗褐色/ふつつ	胴部に0段多条のL Rと0段多条のR Lによる横位の羽状縄文を施す。	花積下層1式
第48図 PL.40	17	深鉢	胴部片	表 土	雑糠/暗褐色/良好	胴部に0段多条のL Rの縄文を横位に施す。	花積下層1式
第48図 PL.40	18	深鉢	胴部片	表 土	雑糠/暗褐色/ふつつ	胴部に0段多条のL Rの縄文を横位に施す。	花積下層1式
第48図 PL.40	19	深鉢	胴部片	表 土	雑糠、白色粒/灰黄/良好	胴部に0段多条のR Lの縄文を横位に施す。	花積下層1式
第48図 PL.40	20	深鉢	胴部片	確認面	雑糠/暗褐色/良好	胴部に0段多条のR Lの縄文を横位に施す。	花積下層1式
第48図 PL.40	21	深鉢	胴部片	表 土	雑糠/暗褐色/ふつつ	胴部に0段多条のL Rの縄文を横位に施す。	花積下層1式
第48図 PL.40	22	深鉢	胴部片	確認面	雑糠/暗褐色/良好	胴部にR Lの縄文を横位に施す。	花積下層1式
第48図 PL.40	23	深鉢	底部片	確認面	雑糠/暗褐色/ふつつ	尖底となる底部で、胴部下層にまで0段多条のL Rと0段多条のR Lによる横位の羽状縄文を施す。	花積下層1式
第48図 PL.40	24	深鉢	胴部片	2号溝 埋 土	雑糠/黒濁/ふつつ	口縁部文様に米字文となる爪形刺突をもつ斜位の平行沈線を描き、胴部の括れ部に同様の爪形平行沈線を添らせて文様帯を分帯する。地文にはL Rの縄文を施す。	黒浜式

検出番号 図版番号	種別 器種	部 位	出 土 位 置	胎土/色調/焼成	文 様 の 特 徴 等	備 考
第48図 PL.40	25 深鉢	胴部片	表 土	粗砂/褐粉/良好	胴部にR LとL Rによる羽状縄文を施す。	黒浜・有尾式
第48図 PL.40	26 深鉢	口縁部片	1号住居 理 上	粗砂/褐粉/良好	平口縁の口唇に刻みを巡らせ、口縁以下にR Lの縄文を施し、円形刺突を縦位に配する。	諸磯a式
第48図 PL.40	27 深鉢	胴部片	ローム 葦形跡	粗砂/褐粉/良好	口縁以下にR Lの縄文を施し、円形刺突を縦位に配する。	諸磯a式
第48図 PL.40	28 深鉢	胴部片	1号住居 理 上	粗砂/褐粉/良好	口縁以下にR Lの縄文を施し、円形刺突を縦位に配する。	諸磯a式
第48図 PL.40	29 深鉢	胴部片	確認面	粗砂/褐粉/良好	胴部にR Lの縄文を施す。	諸磯a式
第48図 PL.40	30 深鉢	胴部片	1号溝 理 上	粗砂/暗黄粉/ふつつ	胴部にR Lの縄文を施す。	諸磯a式
第48図 PL.40	31 深鉢	胴部片	確認面	粗砂、細礫/黄粉/良好	口縁部文様に沈線と隆帯で渦巻き文や楕円等の文様を区画し、胴部に稜形刺突を縦位に施す。	加曾利E 2式
第48図 PL.40	32 深鉢	口縁部片	表 土	粗砂、細礫/暗粉/ふつつ	内反し、小突起をもつ平口縁の口縁部文様に沈線と隆帯で渦巻き文および楕円等の文様を区画し、楕円区画内にL Rの縄文を施す。	加曾利E 2式
第48図 PL.40	33 深鉢	口縁部片	3号溝 理 上	粗砂、細礫/暗粉/ふつつ	平口縁の口縁部文様に沈線と隆帯で渦巻き文および楕円等の文様を区画し、楕円区画内にL Rの縄文を施す。	加曾利E 2式
第48図 PL.40	34 深鉢	口縁部片	5号溝 理 上	粗砂、細礫/褐粉/ふつつ	内反する平口縁の口縁部文様に沈線と隆帯で楕円等の文様を区画し、楕円区画内にL Rの縄文を施す。	加曾利E 2式
第48図 PL.40	35 深鉢	口縁部片	確認面	粗砂、細礫/褐粉/ふつつ	内反する平口縁の口縁部文様に沈線と隆帯で楕円等の文様を区画し、楕円区画内にL Rの縄文を施す。	加曾利E 2式
第49図 PL.40	36 深鉢	口縁部片	9号土坑 理 上	粗砂、細礫/暗粉/ふつつ	内反さみの平口縁の口縁部文様に沈線と隆帯で楕円等の文様を区画し、区画内に横位矢羽状沈線を充填する。	加曾利E 2式
第49図 PL.40	37 深鉢	胴部片	9号土坑 理 上	粗砂、細礫/黄粉/良好	口縁部文様に沈線と隆帯で渦巻き文や楕円等の文様を区画し、区画内に横位矢羽状沈線を充填する。	加曾利E 2式
第49図 PL.40	38 深鉢	胴部片	1号住居 理 上	粗砂、白色粉/褐粉/ふつつ	口縁部文様に隆帯で楕円等を区画するが、隆帯は脱落、区画内に斜位の沈線を施す。	加曾利E 2式
第49図 PL.40	39 深鉢	胴部片	5号溝 理 上	粗砂、細礫/暗粉/ふつつ	口縁部文様に沈線と隆帯で楕円等の文様を区画し、胴部に沈線で逆U字状の文様と懸垂文を描き、地文にL Rの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第49図 PL.40	40 深鉢	胴部片	表 土	粗砂、細礫/褐粉/ふつつ	胴部に沈線で2条の懸垂文と、地文にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第49図 PL.40	41 深鉢	胴部片	3号溝 理 上	粗砂、細礫/黄粉/ふつつ	胴部に沈線で懸垂文と、地文にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第49図 PL.40	42 深鉢	胴部片	3号溝 理 上	粗砂/灰白/ふつつ	胴部に沈線で3条の懸垂文と、L RとR Lによる羽状縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第49図 PL.40	43 深鉢	胴部片	3号溝 理 上	粗砂/黄粉/ふつつ	胴部に沈線で3条の懸垂文と、地文にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第49図 PL.40	44 深鉢	胴部片	5号溝 理 上	粗砂/暗粉/ふつつ	胴部に沈線で懸垂文と、地文にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第49図 PL.40	45 深鉢	胴部片	5号溝 理 上	粗砂、細礫/褐粉/ふつつ	胴部に沈線で懸垂文と、地文にL Rの縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第49図 PL.40	46 深鉢	胴部片	5号溝 理 上	粗砂、細礫/褐粉/ふつつ	胴部に沈線で2条の懸垂文と、懸垂文間を磨消し、地文にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第49図 PL.40	47 深鉢	胴部片	5号溝 理 上	粗砂/褐粉/ふつつ	胴部に沈線で3条の懸垂文と、懸垂文間を磨消し、地文にL Rの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第49図 PL.40	48 深鉢	胴部片	表 土	粗砂、細礫/黄粉/ふつつ	胴部に沈線で蛇行懸垂文と、地文にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第49図 PL.40	49 深鉢	胴部片	表 土	粗砂/暗粉/ふつつ	胴部に沈線で蛇行懸垂文と、地文にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第49図 PL.40	50 深鉢	胴部片	ローム 葦形跡	粗砂/黄粉/ふつつ	胴部に隆帯と沈線で曲線的な文様を描き、地文にR Lの縄文を施す。	加曾利E 2式
第49図 PL.40	51 深鉢	胴部片	9号溝 理 上	粗砂、細礫/白黄/ふつつ	胴部に隆帯と沈線で曲線的な文様を描く。	加曾利E 2式
第49図 PL.40	52 深鉢	胴部片	9号溝 理 上	粗砂、細礫/白黄/ふつつ	胴部に隆帯と沈線で曲線的な文様を描き、地文にL RとR Lによる羽状縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第49図 PL.40	53 深鉢	胴部片	9号土坑 理 上	粗砂、細礫/褐粉/ふつつ	胴部に沈線を沿わせた隆帯の懸垂文と、その間にL RとR Lによる羽状縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第49図 PL.41	54 深鉢	胴部片	表 土	粗砂、細礫/黄粉/ふつつ	胴部に隆帯の懸垂文と、地文にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第49図 PL.41	55 深鉢	胴部片	確認面	粗砂、細礫/黄粉/ふつつ	口縁部文様を横位の隆帯で区画し、胴部に隆帯で蛇行懸垂文と、地文に磨り系縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第49図 PL.41	56 深鉢	胴部片	5号溝 理 上	粗砂、細礫/褐粉/ふつつ	口縁部文様を横位の隆帯で区画し、胴部に隆帯の懸垂文と、地文に磨り系縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第49図 PL.41	57 深鉢	胴部片	5号溝 理 上	粗砂、細礫/褐粉/ふつつ	胴部に隆帯の懸垂文と、地文に磨り系縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第49図 PL.41	58 深鉢	胴部片	5号溝 理 上	粗砂、細礫/褐粉/ふつつ	胴部に隆帯の懸垂文と、地文に磨り系縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第49図 PL.41	59 深鉢	胴部片	3号溝 理 上	粗砂、白色粉/白黄/ふつつ	胴部に隆帯の懸垂文と、地文に磨り系縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第49図 PL.41	60 深鉢	胴部片	3号溝 理 上	粗砂、細礫/白黄/ふつつ	胴部に隆帯と沈線で渦巻き文や曲線的な文様を描き、地文に磨り系縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第49図 PL.41	61 深鉢	胴部片	確認面	粗砂、細礫/黄粉/ふつつ	胴部に隆帯と沈線で曲線的な文様を描き、地文に磨り系縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第49図 PL.41	62 深鉢	胴部片	ローム 葦形跡	粗砂、細礫/暗粉/ふつつ	胴部に隆帯と沈線で渦巻き文や曲線的な文様を描き、地文に磨り系縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第49図 PL.41	63 深鉢	胴部片	表 土	粗砂、細礫/褐粉/ふつつ	胴部に隆帯と沈線で渦巻き文や曲線的な文様を描き、地文に磨り系縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式
第49図 PL.41	64 深鉢	胴部片	3号溝 理 上	粗砂、細礫/褐粉/ふつつ	胴部に隆帯と沈線で曲線的な文様を描き、地文に磨り系縄文を縦位に施す。	加曾利E 2式

第4章 造構と遺物

種別番号 図取番号	No.	種別	部位	出上 位置	胎土/色調/焼成	文 様 の 特 徴 等	備 考
第509 図.41	65	深鉢	胴部片	表 上	粗砂、細礫/黄橙/良好	66・67と同一個体。胴部に隆帯と沈線で渦巻き状の曲線的な文様を描き、曲線的な文様区画内に沈線を充満する。	加曾利 E 2式
第509 図.41	66	深鉢	胴部片	ローム 衝形	粗砂、細礫/黄橙/良好	65・67と同一個体。胴部に隆帯と沈線で曲線的な文様を描き、曲線的な文様区画内に沈線を充満する。	加曾利 E 2式
第509 図.41	67	深鉢	胴部片	表 上	粗砂、細礫/黄橙/良好	65・66と同一個体。胴部に隆帯と沈線で曲線的な文様を描き、曲線的な文様区画内に沈線を充満する。	加曾利 E 2式
第509 図.41	68	深鉢	胴部片	確認面	粗砂/灰白/ふつう	胴部に隆帯と沈線で曲線的な文様を描き、地文に綾杉状の沈線を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第509 図.41	69	深鉢	胴部片	表 上	粗砂、細礫/白黄/ふつう	胴部に隆帯と沈線で曲線的な文様を描き、曲線的な文様区画内に沈線を充満する。	加曾利 E 2式
第509 図.41	70	深鉢	胴部片	確認面	粗砂、細礫/白黄/ふつう	胴部に隆帯と沈線で曲線的な文様を描き、曲線的な文様区画内に沈線を充満する。	加曾利 E 2式
第509 図.41	71	深鉢	胴部片	9号上坑 理 上	粗砂、細礫/暗褐/ふつう	胴部に隆帯の懸垂文と、その間に綾杉状の沈線を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第509 図.41	72	深鉢	胴部片	9号上坑 理 上	粗砂、細礫/暗褐/ふつう	胴部に沈線を沿わせた隆帯の懸垂文と、その間に綾杉状の沈線を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第509 図.41	73	深鉢	胴部片	9号上坑 理 上	粗砂、細礫/黄橙/ふつう	胴部に綾杉状の沈線を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第509 図.41	74	深鉢	胴部片	表 上	粗砂/暗褐/ふつう	胴部に綾杉状の沈線を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第509 図.41	75	深鉢	胴部片	確認面	粗砂/黄橙/ふつう	胴部に綾杉状の沈線を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第509 図.41	76	深鉢	胴部片	9号上坑 理 上	粗砂、細礫/灰白/ふつう	胴部に沈線を沿わせた隆帯の懸垂文と、その間に綾杉状の沈線を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第509 図.41	77	深鉢	胴部片	3号溝 理 上	粗砂、細礫/暗黄/良好	胴部に隆帯の懸垂文と、懸垂文間に弧状の沈線を描く。	加曾利 E 2式
第509 図.41	78	深鉢	胴部片	確認面	粗砂、細礫/灰橙/良好	胴部に沈線で渦巻き文や曲線的な文様を描き、地文に弧状の条線を施す。	加曾利 E 3式
第509 図.41	79	深鉢	口縁部片	5号溝 理 上	粗砂/褐橙/ふつう	内反する平口縁の口縁下に2条の沈線を並らせ、その下に3条の沈線で連弧文を描き、地文に条線を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第509 図.41	80	深鉢	口縁部片	3号溝 理 上	粗砂/暗橙/ふつう	平口縁の口縁下に2条の沈線を並らせ、その下に3条の沈線で連弧文を描き、地文に R L の縄文を施す。	加曾利 E 2式
第509 図.41	81	深鉢	口縁部片	8号溝 理 上	粗砂、細礫/暗褐/ふつう	平口縁の口縁下に2条の沈線を並らせ、その下に3条の沈線で連弧文を描き、地文に条線を施す。	加曾利 E 2式
第509 図.41	82	深鉢	口縁部片	ローム 衝形	粗砂/暗橙/ふつう	小波状口縁の口縁下に2条の沈線を並らせ、その下に3条の沈線で連弧文を描き、地文に R L の縄文を施す。	加曾利 E 2式
第509 図.41	83	深鉢	口縁部片	3号溝 理 上	粗砂、細礫/褐橙/良好	内反さみの平口縁の口縁下に2条の沈線を並らせ、その下に3条の沈線で連弧文ないし波状文を描き、地文に条線を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第509 図.41	84	深鉢	胴部片	5号溝 理 上	粗砂、細礫/暗褐/ふつう	口縁部文様に沈線で重弧状の連弧文を描き、胴部の括れ部に2条の沈線を並らせて文様帯を区画し、以下の胴部に沈線で懸垂文を並らせ、地文に縄文を施す。	加曾利 E 2式
第509 図.41	85	深鉢	胴部片	3号溝 理 上	粗砂/暗橙/ふつう	口縁部文様に沈線で数段の連弧文を描き、地文に R L の縄文を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第509 図.41	86	深鉢	胴部片	3号溝 理 上	粗砂、細礫/暗橙/ふつう	口縁部文様に沈線で2段の連弧文を描き、地文に R L の縄文を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第509 図.41	87	深鉢	胴部片	3号溝 理 上	粗砂、細礫/暗橙/ふつう	胴部の括れ部に3条の沈線を並らせて区画し、以下の胴部にも沈線で連弧文を描く。地文に R L の縄文を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第509 図.41	88	深鉢	胴部片	西側 トレンチ	粗砂、細礫/暗橙/ふつう	胴部に沈線で渦巻き文や曲線的な文様を描き、地文に縄文を施す。	加曾利 E 2式
第509 図.41	89	深鉢	胴部片	ローム 衝形	粗砂、細礫/暗橙/ふつう	胴部の括れ部に3条の平行沈線を並らせ、地文に格子系縄文を縦位に施す。	加曾利 E 2式
第509 図.41	90	深鉢	口縁部片	3号溝 理 上	粗砂、細礫/暗褐/ふつう	縦い波状口縁の口縁下に2条の沈線が寄り、波頂下に渦巻き文が描かれる。地文には R L の縄文を施す。	加曾利 E 2式
第509 図.41	91	深鉢	口縁部片	8号溝 理 上	粗砂、細礫/暗橙/ふつう	内反する平口縁の口縁に斜みを並らせ、口縁下に1条の沈線を並らせ、口縁部文様に沈線で円形および縦い波状文等の曲線的な文様を描かれ、縦位に R L の縄文が施される。	加曾利 E 2式
第509 図.42	92	深鉢	口縁部片	3号溝 理 上	粗砂、細礫/暗橙/良好	波状口縁の口縁下に3条の沈線を並らせ、沈線間に交互斜突をもつ。以下の胴部には2条の懸垂文と、地文に縦位の条線を施す。	加曾利 E 2式
第509 図.42	93	深鉢	口縁部片	5号溝 理 上	粗砂、細礫/暗黄/ふつう	内反さみの平口縁の口縁下に沈線間に交互斜突をもつ2条の沈線を並らせ、その下に沈線で曲線的な文様を描き、地文に縦位の条線を施す。	加曾利 E 2式
第509 図.42	94	深鉢	口縁部片	ローム 衝形	粗砂、細礫/暗黄/ふつう	内反する平口縁の口縁下に1条の隆帯と2条の沈線を並らせ、沈線間に隆帯で波状および円形斜突を並らせる。口縁以下の地文には縦位の条線を施す。	加曾利 E 2式
第509 図.42	95	深鉢	口縁部片	確認面	粗砂、細礫/暗黄/ふつう	内反する平口縁の口縁下に円形斜突と沈線が寄り、その下に沈線で連弧文ないし波状文が描かれ、地文に縄文が施されている。	加曾利 E 2式
第509 図.42	96	深鉢	口縁部片	1住型 方理 上	粗砂/黄橙/良好	波状口縁の口縁部に隆帯と円形斜突を並らせて口縁部無文帯を区画し、以下に縄文を施す。	加曾利 E 3式
第509 図.42	97	深鉢	口縁部片	表 上	粗砂/黄橙/ふつう	内反する平口縁の口縁下に斜突を並らせ、その下に沈線で逆U字状の文様を描き、区画内は無文帯とする。地文に R L の縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式
第509 図.42	98	深鉢	口縁部片	確認面	粗砂/暗橙/ふつう	内反する波状口縁の口縁下に2段の斜突が寄り、その下に微隆線を並らせて文様帯を区画する。	加曾利 E 3式
第509 図.42	99	壺形	口縁部片	ローム 衝形	粗砂、細礫/暗橙/良好	大きく内反する平口縁の口縁部が直立した壺形上部で、口縁下の無文帯に隆帯を並らせて区画し、その下に曲線的な文様を隆帯で描く。区画内には R L の縄文を充満する。	加曾利 E 3式
第509 図.42	100	深鉢	胴部片	表 上	粗砂、細礫/暗橙/ふつう	胴部下平に沈線で逆U字状の文様を描き、区画内 R L の縄文を縦位に施す。	加曾利 E 3式
第509 図.42	101	深鉢	胴部片	9号上坑 理 上	粗砂、細礫/黄橙/ふつう	胴部に R L の縄文を縦位に施す。	加曾利 E 式
第509 図.42	102	深鉢	胴部片	9号上坑 理 上	粗砂、細礫/黄橙/ふつう	胴部に R L の縄文を縦位に施す。	加曾利 E 式

II区遺構外

種別 図版番号	NO.	種類 器種	部 位	出上 位置	胎土/色調/焼成	文 様 の 特 徴 等	備 考
第52図 Pl.43	1	深鉢	口縁部片	包含層	織維、粗砂/黒/ふつつ	平口縁の口縁以下に斜位の条痕が施される。裏面に条痕はない。	条痕文系
第52図 Pl.43	2	深鉢	胴部片	包含層	織維/褐相/ふつつ	胴部に0段多条のL Rと0段多条のR Lにより縦長な菱状となる羽状縄文を施す。	花植下層1式
第52図 Pl.43	3	深鉢	胴部片	包含層	織維/灰黄/ふつつ	胴部に0段多条のL Rと0段多条のR Lにより縦長な菱状となる羽状縄文を施す。	花植下層1式
第52図 Pl.43	4	深鉢	胴部片	包含層	織維/黄相/ふつつ	胴部に0段多条のL Rと0段多条のR Lによる横位の羽状縄文を施す。	花植下層1式
第52図 Pl.43	5	深鉢	胴部片	包含層	織維/黄相/ふつつ	胴部に0段多条のL Rと0段多条のR Lによる横位の羽状縄文を施す。	花植下層1式
第52図 Pl.43	6	深鉢	胴部片	包含層	織維/灰黄/ふつつ	胴部に0段多条のL Rと0段多条のR Lによる横位の羽状縄文を施す。	花植下層1式
第52図 Pl.43	7	深鉢	胴部片	包含層	織維/黄相/ふつつ	胴部に0段多条のL Rと0段多条のR Lによる横位の羽状縄文を施す。	花植下層1式
第52図 Pl.43	8	深鉢	胴部片	包含層	織維/褐相/ふつつ	胴部に0段多条のL Rと0段多条のR Lによる横位の羽状縄文を施す。	花植下層1式
第52図 Pl.43	9	深鉢	胴部片	包含層	粗砂、細礫、雲母/褐相/ふつつ	胴部に爪形刺突を沿わせた隆線が横位に施文される。	阿玉台式
第52図 Pl.43	10	深鉢	口縁部片	3号溝 理上	粗砂/暗相/ふつつ	内反する平口縁の口縁下を無文帯とし、その下に沈線で逆U字状の文様を描き、区画内は無文帯とする。地文にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第52図 Pl.43	11	深鉢	口縁部片	包含層	粗砂、細礫/灰/ふつつ	内反する平口縁の口縁下を無文帯とし、その下に刺突を巡らせて文様帯区画し、以下に縄文を施す。	加曾利E 3式
第52図 Pl.43	12	深鉢	口縁部片	包含層	粗砂、細礫/灰黄/ふつつ	内反する平口縁の口縁下を巾状無文帯とし、その下に隆線を巡らせて文様帯区画し、隆線で曲線的な文様を描く。地文にR Lの縄文を横位・縦位に施す。	加曾利E 3式
第52図 Pl.43	13	深鉢	口縁部片	包含層	粗砂/黄相/ふつつ	内反する平口縁の口縁部に沈線で楕円等の文様を区画し、区画内にR Lの縄文を横位に施す。	加曾利E 3式
第52図 Pl.43	14	深鉢	口縁部片	包含層	粗砂、細礫/黄相/ふつつ	内反する平口縁の口縁部に隆帯と沈線で楕円等の文様を区画し、区画内にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第52図 Pl.43	15	深鉢	胴部片	包含層	粗砂/黄相/良好	内反する口縁部に隆線を巡らせて文様帯区画し、以下に隆帯で曲線的な文様を描き、区画内にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第52図 Pl.43	16	深鉢	胴部片	包含層	粗砂、細礫/黄相/ふつつ	胴部に沈線で2条の懸垂文と、懸垂文間を磨消し、地文にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第52図 Pl.43	17	深鉢	胴部片	包含層	粗砂、細礫/黄相/ふつつ	口縁部下に沈線と隆帯で曲線的な文様を描き、地文にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第52図 Pl.43	18	深鉢	胴部片	包含層	粗砂、細礫/黒相/ふつつ	胴部に2本の沈線でやや斜な文様を描き、沈線間に列点刺突をもつ。	舟名寺式
第52図 Pl.43	19	深鉢	口縁部片	包含層	粗砂、細礫/灰黄/ふつつ	朝顔状に開く口縁部の口端が屈曲して直立し、屈曲下に沈線と刺突を巡らせる。	堀之内1式

III区遺構外

種別 図版番号	NO.	種類 器種	部 位	出上 位置	胎土/色調/焼成	文 様 の 特 徴 等	備 考
第55図 Pl.44	1	深鉢	口縁部片	2号溝 理上	織維、細砂/黒相/良好	内反する平口縁の口縁下に細い平行沈線を横位に2段巡らせ、円形刺突を縦位に配し、口縁部文様に斜位の平行沈線で米字文を施す。	諸磯a式
第55図 Pl.44	2	深鉢	口縁部片	包含層	粗砂/褐相/良好	平口縁の口縁部文様に沈線と隆帯で渦巻きおよび楕円等の文様を区画し、楕円区画内にR Lの縄文を施す。	加曾利E 2式
第55図 Pl.44	3	深鉢	胴部片	包含層	粗砂、細礫/黄相/ふつつ	胴部に3条の沈線で懸垂文と、その間に綾杉状の沈線を縦位に施す。	加曾利E 2式
第55図 Pl.44	4	深鉢	胴部片	1号方形 周溝壁	粗砂/暗相/ふつつ	胴部に沈線で2条の懸垂文と、懸垂文間を磨消し、地文にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式
第55図 Pl.44	5	深鉢	胴部片	包含層	粗砂、細礫/黄相/ふつつ	胴部に波状の条線を縦位に施す。	加曾利E 3式
第55図 Pl.44	6	深鉢	胴部片	包含層	織維/黄相/ふつつ	胴部に0段多条のL Rと0段多条のR Lによる横位の羽状縄文を施す。	花植下層1式
第55図 Pl.44	7	深鉢	口縁部片	2号方形 周溝壁	粗砂/暗相/ふつつ	内反する波状口縁の口縁下に刺突が巡り、その下に微隆線を巡らせて文様帯を区画し、以下に沈線で逆U字状の文様を描き、区画内は無文帯とする。地文にR Lの縄文を施す。	加曾利E 3式

IV区遺構外

種別 図版番号	NO.	種類 器種	部 位	出上 位置	胎土/色調/焼成	文 様 の 特 徴 等	備 考
第55図 Pl.44	1	深鉢	胴部片	1号住居	粗砂/褐相/ふつつ	胴部に細い爪形刺突をもつ平行沈線で縦位区画および横位に長楕円の文様を描き、地文にL RとR Lによる羽状縄文を施す。	諸磯a式
第55図 Pl.44	2	深鉢	胴部片	包含層	粗砂/灰黄/ふつつ	胴部下に沈線で逆U字状の文様を描き、区画内にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E 3式

第4章 遺構と遺物

第10表 石器・石製品観察表

I区2号住居

検出番号 図版番号	No.	器 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第17図 Pl.37	9	打製石斧 短冊型	攪乱	10.0	4.5	1.1	63.5	完成状態。薄く、側縁が鋭く外に開く。刃部摩耗が著しいほか両側縁が摩耗。激しく使い込んだことが分かる。	粗粒輝石安山岩
第17図 Pl.37	10	打製石斧 短冊型	攪乱	(6.4)	(3.8)	1.5	42.5	完成状態。両側縁に擦痕が著しい。器体下部を大きく破損する。	粗粒輝石安山岩
第17図 Pl.37	11	打製石斧 撥型	3号ピット埋土	6.9	4.7	1.3	39.0	完成状態。右辺側の側面加工は、側縁に残る窪みから素材の厚みを減じるように薄く剥離する。被熱して保ける。	黒色頁岩

I区3号住居

検出番号 図版番号	No.	器 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第19図 Pl.38	17	石 鏃 凹形無茎鏃	床面直上	2.0	1.6	0.4	0.7	完成状態。表裏面とも加工は丁寧。背面側に部分的に素材剥離面を残す。	黒曜石
第19図 Pl.38	18	打製石斧 短冊型	床面直上	10.6	4.6	2.2	104.9	完成状態。刃部側を大きく破損したのち、再加工を試みたもの。背面側下半に摩耗痕が残る。	黒色頁岩
第19図 Pl.38	19	打製石斧 短冊型	+11	10.2	4.7	1.6	82.2	完成状態。刃部側が著しい。両側縁のエッジは新鮮で、剥離の際の打撃痕が残る。	黒色頁岩
第19図 Pl.38	20	凹 石 扁平鏃	床面直上	12.7	9.2	3.7	650.5	表裏面とも鋭く摩耗するほか、背面側に集合打痕がある。	粗粒輝石安山岩
第19図 Pl.38	21	石 鏃 有 縁	床面直上	(11.5)	(10.0)	7.1	760.1	右側部の破片。石面外縁は整形されて平滑で、漏斗状の孔が穿たれている。	粗粒輝石安山岩

I区4号住居

検出番号 図版番号	No.	器 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第21図 Pl.38	5	打製石斧 短冊型	+14	(6.5)	(4.5)	(1.9)	55.5	完成状態。両側縁に擦痕が著しい。器体下半部を大きく破損する。側縁が鋭く開くタイプの石斧。	粗粒輝石安山岩
第21図 Pl.38	6	凹 石 棒状鏃	床面直上	14.6	5.9	3.7	481.2	表裏面とも摩耗。2ヶ所の集合打痕があるほか、小口部に敲打痕がある。敲石として多用されることの多い棒状鏃であり、鏃面の2ヶ所の集合打痕は真貨である。	粗粒輝石安山岩

I区1号土坑

検出番号 図版番号	No.	器 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第27図 Pl.38	1	磨 石 扁平柄凹鏃	埋土	(7.8)	(5.9)	(4.1)	159.7	表裏面とも摩耗するほか、側縁に敲打・摩耗痕がある。	粗粒輝石安山岩

I区7号土坑

検出番号 図版番号	No.	器 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第27図 Pl.38	4	敲 石 扁平柄凹鏃	埋土	9.9	7.6	3.6	338.9	小口部上端・側縁に敲打されている。これに伴い剥離が生じており、激しく敲打されたことが分かる。	粗粒輝石安山岩

I区11号土坑

検出番号 図版番号	No.	器 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第28図 Pl.39	25	打製石斧 短冊型	+14	(4.7)	(3.4)	(1.5)	29.4	完成状態。上下両端を欠損した体部破片。側縁に擦痕が明らかである。	粗粒輝石安山岩

IV区6号土坑

検出番号 図版番号	No.	器 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第29図 Pl.39	38	凹 石 扁平柄凹鏃	-9	(6.4)	8.3	4.1	285.3	表裏面とも摩耗が著しいほか、両側縁・小口部上端に敲打・摩耗痕がある。	粗粒輝石安山岩

II区2号溝

検出番号 図版番号	No.	器 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第38図 Pl.39	1	石製紡錘車 (紡輪)	+8	(5.0)	(5.5)	1.5	57.6	上面1/2欠失。全体に磨蝕・削痕多。上面に「九」、側面に横線で「犬矢」、人真似、下面に「大甲」などの姓・氏名を刻削。刻字が深く深い文字と細い文字が混在。	蛇紋岩

I区道橋外

検出番号 図版番号	No.	器 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第51図 Pl.42	103	石 鏃 平基無茎鏃	ローム 溝層	2.6	2.2	0.6	2.4	未製品?加工は粗く、対象性に欠ける。	チャート
第51図 Pl.42	104	石 鏃 平基無茎鏃	表土	2.5	2.0	0.6	2.8	未製品。表裏面とも加工は粗い。表裏面とも素材剥離面を大きく残し、サイズ的に加工途中と判断した。	黒色安山岩
第51図 Pl.42	105	石 鏃 凹形無茎鏃	ローム 溝層	2.7	(1.6)	0.4	1.0	完成状態。加工は丁寧で、細身の機品。	チャート
第51図 Pl.42	106	石 槍 柳葉形	確認面	(6.2)	(2.8)	0.9	19.0	右辺側が大きく変形している。先端は細く絞り込まれ、石鏃を意図して再生されたものかもしれない。	黒色頁岩

第2節 検出遺構と出土遺物

検出番号 図版番号	NO.	器形・種 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第51図 PL.42	107	打製石斧 短冊型	西側 ドレンナ	9.3	4.3	2.1	66.7	完成状態。両側縁が鋭く開き、直線的な刃部に続く。風化して対部摩耗等は不明瞭だが、対部再生は実施。	黒色頁岩
第51図 PL.42	108	打製石斧 短冊型	埋土	12.4	5.1	2.3	173.0	完成状態。刃部縁が著しいほか、左辺部両面に摩耗痕がある。右辺部両側の側縁加工は新鮮で、再生途中に製作を放棄したもののだろう。	黒色頁岩
第51図 PL.42	109	打製石斧 短冊型	9号土坑 埋土	11.2	5.8	1.7	119.7	完成状態。器体上半部に着柄部があり、両側縁は鋭く開くタイプの石斧。刃部は鋭く摩耗する。	粗粒輝石安山岩
第51図 PL.42	110	打製石斧 短冊型	9号土坑 埋土	12.0	5.5	1.3	106.9	完成状態。刃部縁が著しい。背面側には鋭角部が残り、光沢を帯びた摩耗面が広がる。石斧の対部縁と側縁面の関係は判断できない。	黒色頁岩
第51図 PL.42	111	打製石斧 短冊型	埋土 (7.8)	(5.6)	(2.0)	110.4	完成状態。両側縁が鋭く開くタイプの石斧で、器体下半部を欠く。側縁は潰れ、摩耗する。	粗粒輝石安山岩	
第51図 PL.42	112	打製石斧 短冊型	表土	6.6	4.6	1.2	46.1	完成状態。側縁加工は鋭角的で、刃部加工は形状修正的で、対部摩耗が明らか。裏面側に踵面を大きく残す。	砂岩
第51図 PL.42	113	打製石斧? 不明	ローム 溝移移	(9.5)	4.8	1.2	62.7	未製品。幅広割片を縦位に用い、両側縁を鋭角に磨る。側縁は対部作出を意図したように見えない。	珧質頁岩
第51図 PL.42	114	削器 幅広割片	表土	(6.8)	3.3	1.1	26.4	素材割片を横位に用い、両側縁を加工する。右側縁が対部が鋭く摩耗する。	黒色頁岩
第51図 PL.42	115	凹石 楕円石	表土	10.2	6.5	4.2	406.8	背面側中央付近に敲打痕が残る。敲打痕は摩耗しており、最終的には磨石として機能したもののだろう。	粗粒輝石安山岩
第51図 PL.42	116	敲石 扁平棒状	西側 ドレンナ	12.6	5.8	3.1	305.4	小口両端・側面に敲打痕がある。裏面側は比べ、背面側は扁平で摩耗している可能性も否定できない。	石英四稜岩
第51図 PL.42	117	台石 楕円石	埋土 (14.3)	(11.8)	(7.1)	1,195.8	上面に深い研磨による巾1～2mm程の条痕が残るが、面は平滑ではない。	粗粒輝石安山岩	
第51図 PL.42	118	多孔石 扁平棒	埋土 (12.2)	(10.1)	(5.7)	428.4	表裏面とも漏斗状の孔を穿つ。	粗粒輝石安山岩	
第51図 PL.42	119	五輪塔 (空風輪)	表探 (26.9)	16.8	15.9	9,100.0	やや歪な成形。全面に先端巾1mm程の細い丸タガネ状工具による面整形痕が残る。裏面に巾約3mmの丸ノミ工具による切削痕と巾3mm程の丸タガネ状工具痕が残る。転用を試みたものか。風化による摩滅は少ない。	粗粒輝石安山岩	

B区遺構

検出番号 図版番号	NO.	器形・種 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第52図 PL.43	20	石 扁平無蓋	縄文 包含層	1.8	1.7	0.4	0.9	完成状態? 表裏面とも周辺加工して形状を整える。表裏面とも素材剥離面を大きく残す。	黒色安山岩
第52図 PL.43	21	石 扁平無蓋	縄文 包含層	2.2	1.8	0.4	1.9	完成状態。加工は丁寧で、側縁が全面を覆う。先端が丸味を帯びているが、機能的には石鏝として充分だろう。	チャート
第52図 PL.43	22	石 匙 楕円	表土	4.6	(6.3)	0.7	18.8	幅広割片を横位に用い、周辺加工して器体を作出する。刃部は鋭く摩耗する。左辺部端部を欠損する。	黒曜石
第52図 PL.43	23	石 匙 楕円	縄文 包含層	4.2	2.2	0.5	4.4	幅広割片を横位に用い、周辺加工して器体を作出する。器体を作出する。背面側刃部の剥離は進行剥離されている。	チャート
第52図 PL.43	24	楔形石器 小形割片	縄文 包含層	2.4	2.0	0.8	4.5	表裏面とも中央部に素材剥離面を残しているが、両端加工による対向する側縁が明らかである。	チャート
第52図 PL.43	25	打製石斧 短冊型	縄文 包含層	(9.5)	5.6	2.6	128.7	完成状態。やや粗い側縁加工を施す。裏面側から対部加工を行い、その対部角は鋭い。刃部は器器的で、へばり状石器に近い。対部摩耗は不明瞭。	黒色頁岩
第52図 PL.43	26	打製石斧 短冊型	縄文 包含層	7.3	5.1	1.0	51.1	完成状態? 裏面側縁から鋭く側縁加工を施す。刃部角は薄く、刃部加工は裏面側にある。対部摩耗は見られない。	黒色頁岩
第52図 PL.43	27	打製石斧 短冊型	縄文 包含層	9.7	5.3	1.7	105.9	完成状態。裏面側に踵面を残し、背面側のみ加工して器体を作出する。エッジはシャープで、摩耗等は見られない。	黒色頁岩
第52図 PL.43	28	打製石斧 短冊型	縄文 包含層	6.5	4.1	1.9	44.1	完成状態。裏面側から加工され、直線的刃部が作出されている。刃部角が鋭く、擦器とすべきかもしれない。	黒色頁岩
第52図 PL.43	29	打製石斧? 不明	縄文 包含層	(14.6)	(10.2)	(3.3)	777.1	未製品。扁平の両側縁を裏面側から剥離しているが、風化は激しく判断は難しい。	粗粒輝石安山岩
第52図 PL.43	30	凹石 楕円石	縄文 包含層	8.8	7.0	4.5	309.0	表裏面とも激しく摩耗するほか、集合打痕がある。小口部両端の中心を外れた位置に敲打痕がある。	粗粒輝石安山岩
第53図 PL.43	31	凹石 楕円石	縄文 包含層	9.8	5.6	3.7	258.6	小形で、やや粗輪が長い。背面側2ヶ所に集合打痕があるほか、側縁に打痕がある。	粗粒輝石安山岩
第53図 PL.43	32	凹石	縄文 包含層	12.3	7.4	3.6	492.6	表裏面とも摩耗。2ヶ所の集合打痕がある。このほか右側縁に摩耗があり、鈎が形成されている。	粗粒輝石安山岩
第53図 PL.43	33	凹石 楕円石	縄文 包含層	13.8	8.7	4.8	871.5	表裏面とも摩耗。中央付近に集合打痕がある。この打痕は摩耗して痕跡のみが残る程度である。	粗粒輝石安山岩
第53図 PL.44	34	磨石 楕円石	縄文 包含層	10.7	9.2	5.2	688.1	表裏面とも摩耗する。敲打痕については不明瞭。	粗粒輝石安山岩
第53図 PL.44	35	磨石 楕円石	縄文 包含層	13.2	10.1	5.2	884.6	表裏面とも摩耗する。上半部が部分的に保っているように見え、脱熱している可能性も否定できない。	粗粒輝石安山岩
第53図 PL.44	36	磨石 扁平楕円	縄文 包含層	12.5	7.9	4.2	655.0	表裏面とも摩耗する。このほか裏面側・小口部上端に打痕が残る。	粗粒輝石安山岩
第53図 PL.44	37	磨石 扁平楕円	縄文 包含層	16.2	8.4	4.4	807.2	表裏面とも摩耗する。器体上半部が帯状に欠けている。	粗粒輝石安山岩
第53図 PL.44	38	磨石 球形	縄文 包含層	(8.8)	(7.8)	(6.9)	590.7	踵面は良く摩耗して平滑。踵面の2/3が風化して踵面に剥離しているが、剥離層は不明。	かこう岩
第53図 PL.44	39	磨石 棒状	縄文 包含層	(9.7)	(5.3)	(5.8)	361.9	断面三角形形状を呈す縁部が著しく摩耗して、平坦面が形成されている。この平坦面に於いて小柄な筋があり、最上・最下機能を集めたことが分かる。	粗粒輝石安山岩

第4章 遺構と遺物

神岡番号 図版番号	NO.	器形・種 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第53図 PL.44	40	巖石 柱状礎	表上	(10.2)	(4.4)	(2.4)	177.6	右辺上端側に敲打、これに伴う小刻離痕が背面側にある。	黒色頁岩
第53図 PL.44	41	巖石 石核状用?	縄文 包含層	8.2	8.1	3.9	276.8	小口部に激しい敲打痕があるほか、背面側に幅広い刮片を剥離した大きな刻離面が残る。	黒色頁岩
第53図 PL.44	42	巖石 不明	縄文 包含層	(4.6)	(6.6)	(3.0)	101.7	小口部上端に敲打痕がある。敲打痕の外縁が部分的に摩耗して、平坦面を形成している。	砂岩
第53図 PL.44	43	スタン型 石器 棒状礎	表上	12.7	6.9	5.5	699.0	分割面が著しく摩耗、これに接した体部に小刻離痕が付く。このほか右辺が激しく摩耗、稜が形成されている。	粗粒輝石安山岩
第53図 PL.44	44	台石 扁平礎	縄文 包含層	(13.2)	(19.0)	(5.8)	1,363.3	背面側平坦面に弱い敲打痕がある。	粗粒輝石安山岩
第54図 PL.44	45	台石 楕円礎	縄文 包含層	(12.1)	(14.0)	(7.9)	1,393.3	背面側平坦面に弱い敲打痕がある。	粗粒輝石安山岩
第54図 PL.44	46	不明石製品	縄文 包含層	(15.4)	(11.1)	(1.2)	239.9	やや歪な菱形の板状を呈し、側縁の一部を欠く。側縁は面取りされ、全体に摩滅する。	緑色片岩

Ⅱ区遺構外

神岡番号 図版番号	NO.	器形・種 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第55図 PL.44	8	石 扁平基無蓋	1号方形 周溝墓	(1.7)	(1.9)	0.4	1.0	未製品?加工は粗く、裏面に素材剥離面を大きく残す。	黒色安山岩
第55図 PL.44	9	打製石斧 短冊型	埋上	(8.1)	(4.1)	(1.5)	54.6	完成状態。側縁は開き気味で、側縁が指込りに開き刃部が付くタイプ。側縁に巻縛痕が著しい。刃部側を欠損する。	粗粒輝石安山岩
第55図 PL.44	10	磨石 扁平楕円礎	3号溝 埋上	9.4	7.0	3.2	337.6	表裏面とも摩耗するほか、小口部内端に敲打痕がある。	粗粒輝石安山岩

第11表 古墳～奈良平安時代出土遺物観察表

Ⅰ区1号住居

計測値の単位はcm、重はgとする。

神岡番号 図版番号	NO.	種 類	出土位置 残存率	計測値	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	摘要
第14図 PL.37	1	土師器 杯	埋上 口縁～体部片	口 11.7	細砂粒・角四石/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、底部は手持ちヘラ削りで間に撫での部分を残す。内面は撫で。	

Ⅰ区1号土坑

神岡番号 図版番号	NO.	種 類	出土位置 残存率	計測値	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	摘要
第27図 PL.38	2	灰釉陶器 鉢	埋上 1/2	底 2.5 高 2.7	細砂粒/還元焰/灰	口縁部は横ナデ(右回転) 底部回転糸切り無調整。施釉は刷毛掛けか。	東濃産

Ⅰ区2号方形周溝墓

神岡番号 図版番号	NO.	種 類	出土位置 残存率	計測値	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	摘要
第46図 PL.39	1	土師器 台付礎	埋上 台部片		細砂粒/良好/にぶい橙	外面はハケ目(1cmに6本)脚内面に粗めの粘土貼り付け。	脚の接合部外面に帯状に赤彩か

Ⅰ区遺構外

神岡番号 図版番号	NO.	種 類	出土位置 残存率	計測値	胎土/色調/焼成	成形・整形の特徴	摘要
第51図 PL.42	120	土師器 杯	西側トレンチ 1/4	口 10.8 高 13.6	細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤橙	口縁部は横ナデ、底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	内外面摩滅
第51図 PL.42	121	須恵器 杯	表上 口縁～底部片	口 11.8 高 3.5 底 6.0	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	口縁部は横ナデ(回転方向不明) 底部は回転ヘラ削り。	底部～体部外面に火傷

第5章 自然科学分析

第1節 遺跡における 自然科学分析結果について

第1項 自然科学分析実施の経緯

Ⅲ区で検出された方形周溝墓2基の埋没土の上層に榛名二ツ岳渋谷テフラ(Hr-FA)と考えられる白色ブロックが確認でき、またⅣ区の低地部からは、複数の火山灰層や洪水層が確認できた。今回テフラ分析やプラント・オパール分析等の自然科学分析を行い、検出された遺構の年代や作物の特定の判断材料とすることとした。

第2項 自然科学分析結果報告の概要

受託者である(株)火山灰考古学研究所(代表取締役 早田 勉)の報告によれば、次の点が確認された。

テフラ分析によれば、1号方形周溝墓、2号方形周溝墓の埋没土上層及びⅣ区低地部下層において検出された火山灰は6世紀初頭の榛名二ツ岳渋谷テフラに同定できる。その他にⅢ区方形周溝墓埋没土及び上位の層中より浅間山噴火起源のAs-A、As-B、As-Cの各火山灰が検出された。また、Ⅳ区低地部での堆積土中には上位より純層に近い形でも浅間山噴火起源のAs-A、As-B、As-Cが確認できた。さらに、Ⅳ区1面水田畦畔を被覆していた洪水層は、As-BとHr-FAの間層にあり弘仁九年(818年)の大地震に伴う洪水層の可能性もある。

Ⅳ区低地部のプラント・オパール分析結果は、Hr-FAから上では各層からプラント・オパールが検出された。その中でAs-Bの下位の層中からは4,000個/gと高い数値(79頁 第57図参照)が得られ水田耕作が行われていたといえる。

その他の層位からは密度が低い値を示した。その理由として、稲作がおこなわれていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

分析で得られた植物としては、Hr-FA直下ではヨシ属が比較的多く検出された。このことからHr-FA降灰以前にはヨシ属が繁茂するような湿原環境であったと考えられる。その上層でもAs-B直下まで湿地的な環境であったと推定され、そうした環境下の中水田耕作が行われていたと推定される。

第3項 所見

分析結果を踏まえるならば、下記のことがいえる。

- ① Ⅲ区方形周溝墓は6世紀初頭のHr-FA降灰時にはすでに周溝は埋没していた。
- ② 幅10数mと狭いⅣ区低地部では、方形周溝墓の築造時にはヨシの繁茂する湿地であったと考えられる。
- ③ Ⅳ区の低地の水田化は、818年(弘仁九年)の大地震に伴うと考えられる洪水層に被覆された畦畔遺構が検出でき、818年以前から水田耕作が行われていたと考えられる。しかし、プラント・オパールの密度が低いという分析結果を得ている。その要因として「稲作がおこなわれていた期間が短い可能性も考えられる」や「ヨシ属の繁茂する低地」であったことなどから、818年に近い時期に開田され当初は生産性の低い水田であったと考える。
- ④ 水田耕作最盛期は、818年以降の洪水層からAs-B降灰以前で、それ以降は水田耕作を放棄したか生産性の低い水田であったと考えられる。

第2節 遺跡の土層とテフラ

第1項 はじめに

関東地方北西部に伊勢崎市とその周辺には、赤城火山、榛名火山、浅間火山などをはじめとする北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフ

ラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が数多く降灰している。とくに後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログなどに収録されており、遺跡などで調査分析を行いテフラを検出することで、地形や地層の形成年代さらには遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

上武士・堀北遺跡の発掘調査でも、層位や年代が不明な遺構が認められたことから、地質調査を実施して土層やテフラの記載を行うとともに、採取した試料を対象にテフラ検出分析と火山ガラスの屈折率測定を行って、すでに噴出年代が明らかにされている指標テフラの検出同定を実施して、それとの層位関係から遺構の層位や年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象は、Ⅲ区方形周溝墓北周溝断面、Ⅳ区中央部北壁、Ⅳ区中央部畦畔地点の3地点である。

第2項 土層の層序

(1)Ⅲ区方形周溝墓北周溝断面

Ⅲ区方形周溝墓北周溝断面で認められる周溝覆土は、下位より暗灰色砂質土(層厚8cm)、黒灰色砂質土(層厚9cm)、暗灰色砂質土(層厚16cm)、黒泥層(層厚3cm)、かすかに成層した灰白色砂質細粒火山灰層(層厚3cm)、黒泥層(層厚0.2cm)、礫混じりでわずかに黄色がかかった灰色砂層(層厚11cm、礫の最大径8mm)、礫混じり灰色砂質土(層厚9cm、礫の最大径7mm)、黒灰褐色土(層厚4cm)、灰褐色砂質土(層厚4cm)、灰色シルト層(層厚1cm)、灰色土ブロックや黄褐色土粒子混じりで白色細粒軽石を含む暗灰色土(層厚24cm、軽石の最大径2mm)、砂混じり暗灰色土(層厚12cm)からなる(第56図1)。

(2)Ⅳ区中央部北壁

Ⅳ区中央部北壁では、下位より黒泥層(層厚3cm)、かすかに成層した灰色砂質細粒火山灰ブロックを含む暗灰色泥層(層厚4cm、上面に畦畔状遺構)、礫を含み若干黄色がかかった灰色砂層(層厚17cm、礫の最大径5mm)、暗灰色砂質泥層(層厚5cm)、暗灰色泥層(層厚8cm)、砂混じり暗灰色泥層(層厚8cm)、暗灰色泥層(層厚8cm)、砂混じり暗灰色泥層(層厚8cm、上面に畦畔状遺構?)、若干

色調が暗い灰色泥層(層厚14cm)、暗灰色泥層(層厚9cm)、黒灰色泥層(層厚5cm)、灰色粗粒火山灰層(レンズ状、最大層厚3cm)、砂混じり黄灰色土(層厚4cm)、若干黄色がかかった灰色土(層厚14cm)、白色粗粒火山灰に富む褐色土(層厚4cm)、白色細粒軽石を多く含むわずかに褐色がかかった暗灰色土(層厚19cm、軽石の最大径3mm)、若干褐色がかかった暗灰色土(層厚17cm)、若干褐色がかかった暗灰色盛土(層厚14cm)が認められる(第56図2)。

(3)Ⅳ区中央部畦畔地点

Ⅳ区中央部畦畔地点では、Ⅳ区中央部北壁で記載された下位の畦畔状遺構の断面を観察できた(第56図3)。ここでは、下位より黒泥層(層厚4cm以上)、灰色砂層(層厚2cm)、黒泥層(層厚4cm)、黄色粗粒火山灰層(層厚3cm)、黒泥層(部分的、最大層厚0.2cm)、暗灰色泥層(畦畔構成層：盛土)が認められる。

第3項 テフラ検出分析

(1)分析試料と分析方法

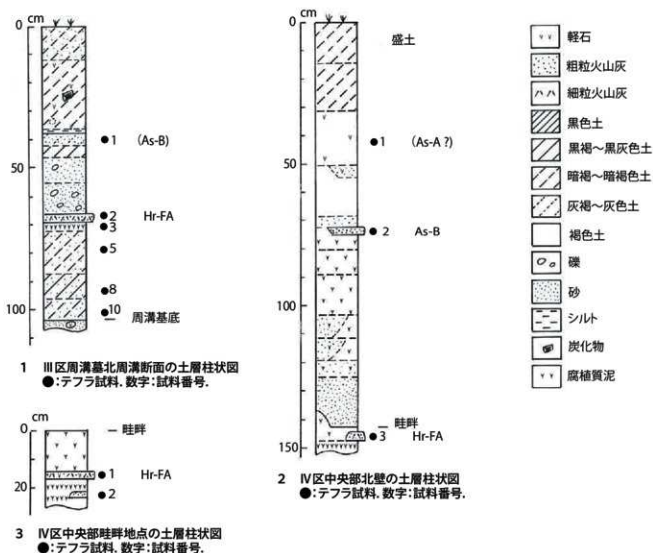
Ⅲ区方形周溝墓北周溝断面、Ⅳ区中央部北壁、Ⅳ区中央部畦畔地点から採取されたテフラ分析用試料のうち11点を対象に、テフラ粒子の量や特徴を相対的に明らかにするテフラ検出分析を実施した。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料8gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置を用いながらいぬいに泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で、テフラ粒子の量や色調などを観察。

(2)分析結果

テフラ検出分析の結果を第12表に示す。Ⅲ区方形周溝墓北周溝断面では、試料10および試料8からスポンジ状に良く発泡した灰白色軽石(最大径2.1mm)、試料10、試料8、試料5、試料3からその細粒物であるスポンジ状に発泡した灰白色軽石型ガラスを検出した。これらの斑品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。これらは、とくに下位の試料10や試料8に比較的多い。

テフラ層から採取された試料2には、発泡がさほど良くない白色軽石(最大径2.1mm)やその細粒物である白色



第56図 III・IV区土層柱状図1～3

第12表 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア		火山ガラス			
		量	色調	最大径	量	形態	色調
III区方形周溝墓北周溝断面	1	*	淡灰	4.1	***	pn (sp)	淡灰, 淡褐
	2	*	白	2.1	***	pn (sp)	白, (RO)白
	3				*	pn (sp)	灰白
	5				*	pn (sp, fb)	灰白, 透明
	8	*	灰白	2.1	**	pn (sp, fb)	灰白, 白, 透明
	10	*	灰白	2.1	**	pn (sp, fb)	灰白, 白, 透明
IV区中央部北壁	1	**	淡灰, 淡褐	2.2	**	pn (sp, fb)	淡灰, 淡褐, 白
	2	**	淡灰, 淡褐, 褐(光沢)	2.8	**	pn (sp)	淡灰, 淡褐, 褐(光沢)
	3	**	(灰)白, 白	4.3, 3.8	***	pn (sp)	白, (RO)白
IV区中央部畦畔	1	*	白	2.1	***	pn (sp)	白, (RO)白
	2	**	灰白	3.9	**	pn (sp)	灰白

***: とくに多い, **: 多い, *: 中程度, *: 少ない, (): とくに少ない. 最大径の単位はmm.
pn: 軽石型, sp: スポンジ状発泡, fb: 繊維束状発泡.

の、またごくわずかに灰色を帯びた白色のスポンジ状軽石型ガラスが多く含まれている。これらの斑品には、角閃石や斜方輝石が認められる。さらに、試料1には、淡灰色や淡褐色の軽石(最大径4.1mm)や軽石型ガラスが多く含まれている。これらの斑品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

IV区中央部北壁では、テフラ層から採取された試料3には、発泡がさほど良くなく、ごくわずかに灰色を帯びた白色や白色の軽石(最大径4.3mm)やその細粒物であるごくわずかに灰色を帯びた白色や白色のスポンジ状軽石型ガラスが多く含まれている。これらの斑品には、角閃石や斜方輝石が認められる。やはり、テフラ層から採取された試料2には、淡灰色、淡褐色、光沢をもつ褐色の軽石(最大径2.8mm)や、それらの細粒物である軽石型ガラスがとくに多く含まれている。試料1にもこれらのテフラ粒子が多いが、ほかに繊維束状の白色軽石型ガラスも認められる。

IV区中央部畦畔地点では、試料2からスポンジ状に良く発泡した灰白色軽石(最大径3.9mm)や、その細粒物であるスポンジ状の灰白色軽石型ガラスを多く検出した。これらの斑品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。テフラ層から採取された試料1には、発泡がさほど良くない白色軽石(最大径2.1mm)やその細粒物である白色や、ごくわずかに灰色を帯びた白色のスポンジ状軽石型ガラスが多く含まれている。これらの斑品には、角閃石や斜方輝石が認められる。

第4項 屈折率測定

(1)測定試料と測定方法

テフラ検出分析の対象となった試料のうち、Ⅲ区方形周溝墓北周溝断面の試料2に含まれる火山ガラスの屈折率特性を明らかにして、指標テフラとのより正確な同定を行った。測定対象は、分析筒による篩別で得られた1/8-1/16mmの火山ガラスである。測定には、温度変化型屈折率測定装置(京都フィッシュン・トラック社製RIMS2000)を使用した。

(2)測定結果

屈折率測定の結果を第13表に示す。Ⅲ区方形周溝墓

北周溝断面の試料2に含まれる火山ガラスの屈折率(n)のrangeは1.499-1.506である。実際の屈折率特性は、1.499-1.501と1.503-1.506のbimodalな組成となっている。

第5項 考察

(1)テフラの同定

Ⅲ区方形周溝墓北周溝断面において、試料2が採取されたテフラ層は、その層相や粒度、含まれる軽石や火山ガラスの岩相、重鉱物の組み合わせ、そして火山ガラスの屈折率特性などから、6世紀初頭に権名火山から噴出した権名二ツ岳流川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992, 2003)に同定される。このことから、同様の層相やテフラ粒子の特徴をもつ、IV区中央部北壁やIV区中央部畦畔地点のテフラ層も、Hr-FAと考えられる。

Ⅲ区方形周溝墓北周溝断面でHr-FAより下位の土壌試料、またIV区中央部畦畔の試料2に含まれる灰白色の軽石や軽石型ガラスは、その層位や岩相から3世紀後半に浅間火山から噴出したと推定されている浅間C軽石(As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 坂口, 2010)に由来する可能性が高い。とくにIV区中央部畦畔の試料2におけるその純度が高いが、上位のHr-FAと層位的に近いことからAs-Cの二次堆積物の可能性が高いように思われる。

IV区中央部北壁で試料2が採取されたテフラ層は、層位や層相、軽石や火山ガラスの岩相、重鉱物の組み合わせなどから、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出したと推定されている浅間Bテフラ(As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979)に同定される。したがって、Ⅲ区方形周溝墓北周溝断面の試料1やIV区中央部北壁の試料1に含まれる多くのテフラ粒子もAs-Bに由来すると考えられる。ただし、これらの試料にわずかに含まれる繊維束状の白色の軽石や軽石型ガラスには、光沢が認められることから、1783(天明三)年に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A, 荒牧, 1968, 新井, 1979)に由来する可能性がある。なお、IV区中央部北壁では、試料1採取層準の直下にも、粗粒の白色火山灰に富む褐色土が認められることから、本来のAs-Aの降灰層準は、この土層付近かも知れない。

いずれにしても、Hr-FA以外のテフラに関しては、火

山ガラスの屈折率特性の把握などを実施して、指標テフラとの同定精度を向上させると良い。

(2) 遺構と指標テフラの層位関係

Ⅲ区方形周溝墓は、北周溝断面においてHr-FAの堆積が認められ、その下位の覆土からAs-C起源のテフラ粒子が検出された。人為的にAs-Cの除去が行われていないかぎり、その層位は、As-Cより上位で、Hr-FAより下位と考えられる。Ⅳ区で検出され発掘調査の対象となった水田遺構は、Hr-FAより上位で、As-Bより下位にある。また、Ⅳ区中央部北壁においてその上位で認められた畦畔状の高まりを覆う堆積物は、比較的明るい灰色を呈する泥層で、現在の群馬県平野部を中心に甚大な被害をもたらしたS18（弘仁九）年地震に関連した洪水堆積物（能登ほか、1990など）の可能性もある。今後、周辺域で、この堆積物と液状化の痕跡などとの層位関係が確かめられると良い。

第6項 まとめ

伊勢崎市上武士・堀北遺跡において、地質調査、テフ

ラ検出分析さらに火山ガラスの屈折率測定を実施した。その結果、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA、6世紀初頭)や浅間Bテフラ(As-B、1108年)のほか、浅間C軽石(As-C、3世紀後半)や、浅間A軽石(As-A、1783年)などに由来するテフラ粒子を検出できた。その結果、Ⅲ区とⅣ区でそれぞれ検出された方形周溝墓と水田遺構の層位は、As-CとHr-FAの間とHr-FAとAs-Bの間と判断される。

文献

- 新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79。
 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.53, p.41-52。
 笹牧重雄(1968)浅間火山の地質。地研研報, no.14, p.1-45。
 町田 洋・新井房夫(1992)「火山灰アトラス-日本列島とその周辺」。東京大学出版会, 276p。
 町田 洋・新井房夫(2003)「新編火山灰アトラス-日本列島とその周辺」。東京大学出版会, 336p。
 能登 健・内田憲治・早田 勉(1990)赤城山南麓の歴史地震-弘仁九年の地震に伴う地形変化の調査と分析-。信濃, 42, p.455-772。
 坂口 一(1986)榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井 神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119。
 坂口 一(2010)高崎市・中居町一丁目遺跡周辺集落の動向-中居町一丁目遺跡R22の水田耕作地と周辺集落との関係-。群馬県埋蔵文化財調査事業団編「中居町一丁目遺跡3」, p.17-22。
 早田 勉(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.297-312。

第13表 屈折率測定結果

試料・テフラ	試料	火山ガラス		文献
		屈折率(n)	測定点数	
上武士・堀北遺跡 Ⅲ区方形周溝墓北周溝断面	2	1.499-1.506 (1.499-1.501, 1.503-1.506)	7, 21	本報告
＜榛名・浅間火山起源の完新世指標テフラ＞				
浅間A (As-A)		1.507-1.512		1)
浅間A' (As-A')		1.515-1.521		2)
浅間B (As-B)		1.524-1.532		1)
榛名二ツ岳伊香保(Hr-FP)		1.501-1.504		2)
榛名二ツ岳渋川(Hr-FA)		1.500-1.502		2)
		1.499-1.504		3)
榛名有馬(Hr-AA)		1.500-1.502		2)
浅間C (As-C)		1.514-1.520		1)
浅間D (As-D)		1.513-1.516		1)

1)：町田・新井(1992, 2003), 2)：早田(1996), 3)早田(未公表)。

本報告および3)：温度変化型屈折率測定装置(RIMS2000), 1)～2)：故新井房夫群馬大学名誉教授の温度一定型屈折率測定法。

第3節 遺跡における プラント・オパール分析

第1項 はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO₂)が蓄積したもので、植物が枯れたあとも微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法で、イネの消長を検討することで水田跡(稲作跡)の検証や探査が可能である(藤原・杉山, 1984, 杉山, 2000)。

第2項 試料

分析試料は、IV区中央部北壁とIV区中央部畔地点の2地点から採取された6点である。試料採取層位を分析結果の柱状図に示す。

第3項 分析法

プラント・オパール分析は、ガラスビーズ法(藤原, 1976)を用いて次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)。
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)。
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理。
- 4) 超音波水中照射(300W・42kHz・10分間)による分散。
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去。
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成。
- 7) 検鏡・計数。

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物

体乾重)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山, 2000)。

第4項 分析結果

水田跡(稲作跡)の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ムギ類(穎の表皮細胞)、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な6分類群について検討を行った。これらの分類群について定量を行い、その結果を第57図に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

第5項 考察

(1) 水田跡(稲作跡)の検討

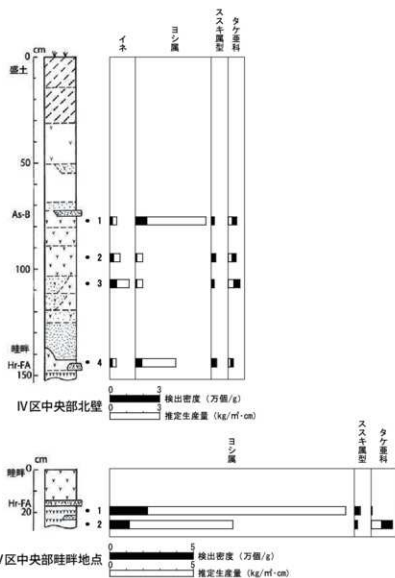
水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山, 2000)。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) IV区中央部北壁

As-B直下層(試料1)とその下位層(試料2、3)、Hr-FA直上層(試料4)について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、As-Bの下位層(試料3)では密度が4,000個/gと比較的高い値である。したがって、同層位では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

畔群が検出されたHr-FA直上層(試料4)では、密度が1,300個/gと比較的低い値であるが、同層位は直上を砂層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

As-B直下層(試料1)とその下層(試料2)では、密度が1,400個/gおよび2,100個/gと比較的低い値である。イネ

検出密度(単位: $\times 100$ 個/g)

分類群	地点・試料 学名	IV区中央部北壁				畦畔地点	
		1	2	3	4	1	2
イネ	<i>Oryza sativa</i>	14	21	40	13		
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	68	7	7	39	228	119
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	14	21	13	26	28	13
タケ亜科	Bambusoideae	54	50	74	33	7	132

推定生産量(単位: $\text{kg}/\text{m}^2 \cdot \text{cm}$): 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.40	0.62	1.19	0.39		
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	4.26	0.45	0.43	2.49	14.37	7.50
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.17	0.26	0.17	0.33	0.34	0.16
タケ亜科	Bambusoideae	0.25	0.24	0.36	0.16	0.03	0.63

第57図 遺跡におけるプラント・オパール分析結果

第5章 自然科学分析

の密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

2) IV区中央部畦畔地点

Hr-FA直下層(試料1)とその下層(試料2)について分析を行った。その結果、イネはいずれの試料からも検出されなかった。

(2) イネ科栽培植物の検討

プラント・オパール分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型(ヒエが含まれる)などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

(3) 堆積環境の推定

ヨシ属は湿地的なところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境(乾燥・湿潤)を推定することができる。Hr-FA直下層では、ヨシ属が比較的多く検出され、ススキ属型やタケ亜科は比較的少量である。Hr-FA直上層からAs-B直下層にかけては、各分類群とも比較的少量である。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねヨシ属が優勢であり、とくにHr-FA直下層で多くなっている。

以上のことから、Hr-FA直下層の堆積当時は、ヨシ属が繁茂するような湿原の環境であったと考えられる。Hr-FA直上層からAs-B直下層にかけても、おおむねヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。

第6項 まとめ

プラント・オパール分析の結果、As-Bの下位層(試料3)では、イネが比較的多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、As-B直下層やHr-FA直上層などでもイネが検出され、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。

As-B直下層とその下位層の堆積当時は、ヨシ属が生育

するような湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。

文献

- 杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール)、考古学と植物学、同成社、p.189-213。
藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(I)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-、考古学と自然科学、9、p.15-29。
藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(II)-プラント・オパール分析による水田址の探査-、考古学と自然科学、17、p.73-85。

植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真



イネ



イネ



キビ族型



キビ族型



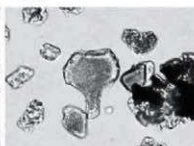
ヨシ属



ヨシ属



スキ属型



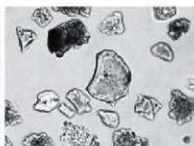
シバ属型



ネザサ節型



ネザサ節型



ミヤコザサ節型



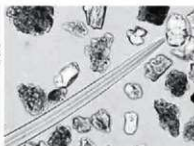
表皮毛起源



棒状珪酸体



イネ科の地下茎部起源



海綿骨針

50 μm

第6章 調査の成果

上武士・堀北遺跡の第一次・第二次調査、および同一事業に伴う木島・下久保遺跡の調査成果を踏まえ、遺跡地周辺の歴史を概観したい。

〔縄文時代〕 I区北西部より竪穴住居3軒が検出された。いずれも上面の削平を受け20cm程の深度しか残らないが、床面上に埋裏^キをもつ中期後半の竪穴住居跡である。3軒の住居はこの時期の集落の南端に当たると考えられ、調査区外の北西方向に集落の中心があるものと推察される。また、II区東低地部より前期から後期に至る遺物包含層が確認され、付近に縄文時代各時期の集落の展開が想定される。

〔古墳時代〕 III区において2基の方形周溝墓が発見された。1号方形周溝墓の大半が調査区外に在り、2号方形周溝墓の検出状況も機械耕作痕に寸断されての確認であるが、発見の意義は大きい。周辺遺跡における方形周溝墓の検出例として、東に2.8km程の三ツ木遺跡と北に1.8km程の出口遺跡でそれぞれ確認されている。また、円形周溝墓の検出例として、北に3.2km程の上淵名裏神谷遺跡がある。『上毛古墳総覧』には、近隣の上武士地区の古墳として前方後円墳3基・円墳36基が、下武士地区には前方後円墳2基・円墳59基が記録されている。当遺跡検出の方形周溝墓群の墓域や規模は明らかではないものの、武士地区における首長層の発生から古墳築造の盛行という新たな流れが確認できた。

古墳時代初頭の墓域であった当地の環境は、同時代やその前後の遺構が検出されておらず、IV区谷地に堆積のII-FA下の土壌からはイネの植物珪酸体(プラント・オパール)の検出はなく、ヨシ属の生い茂る湿地帯であったことが判明しており、周辺地域における集落域・生産域の解明が期待される。

〔奈良・平安時代〕 I区東側で検出された1号竪穴住居・1号掘立柱建物・1号井戸とIII区北東で検出された1号竪穴状遺構などは、8世紀後半頃の集落の南端と考えら

れ、集落の中心部は北から北西側にあるものと推察される。また、IV区低地部で検出された水田も、弘仁九(818)年の地震に伴う洪水によって埋没したと考えられることから、その耕作時期はほぼ集落の時期と重なるが、耕作土壌中におけるイネの植物珪酸体(プラント・オパール)の比率が低いことから、生産期が短いか、生産量が少ない水田であったと推察される。これに反し、弘仁九(818)年の洪水堆積層と天仁元(1108)年の浅間山噴火に伴うAs-Bテフラ層との間の土壌からは、明瞭な畦畔は検出されなかったものの、高い比率のイネのプラント・オパールが検出されている。同様に木島・下久保遺跡のAs-Bテフラ層下の土壌からも高い比率のイネのプラント・オパールが検出されていることから、この時期には一帯に水田域が広がり、稲作が盛行していたものと推察される。これを裏付けるように、III区からI区を経てII区へと続く2条の並行する溝は、河川から引水した灌漑水路であり、IV区谷地水田には引水されていないことから、走行の先であるII区以北の水田域への引水が目的であったと推察される。また、調査区内で直角に走行を変えており、付近に避けなければならない遺構が存在していたものと推察される。

特筆すべき出土遺物として、II区2号溝出土の刻字石製紡錘車(紡輪)がある。上面に「九」、側面に「犬甘」・「人麻呂」、下面に「大中臣」の文字を刻書し、「九」を除き複数の人名が記されているものと考えられる。文字は深く深いものと、細く浅いものが混在し、紡錘車本体の磨滅に比べて文字の磨滅は少ないことから、紡錘車として在る程度使用された後に、文字を刻み込んだものと考えられる。残念ながら出土状況には祭祀等の特殊性は見られない。

〔中世〕 この時期の遺構の検出は明らかではないが、前記の浅間山噴火のAs-Bテフラの堆積が中世の様相を知る鍵となる。遺跡地周辺は、大治五(1130)年頃に秀郷流藤原氏の兼行(測名大夫)らが、仁和寺法金剛院所領地として立荘・寄進したとされる測名荘に属す。測名荘

は、前代の佐位郡をほぼその領域とし、「上野国濁名庄
田百九町五反廿五代 高十八町二反十代」と仁和寺領
所領目録に記されるように、当然のことながら荘園全体
の8割強を水田が占めている。荘園開発に際し、生産量
の拡大を求めて灌漑用水路を整備し、新田開発が行われ
る一方で、基盤としては旧来の水田域の利用、即ち浅間
山火山災害で埋没・荒廃した水田域の復旧が必須であっ
たと推察される。しかしながら、遺跡地の旧水田域には、
火山灰をそのまま残し、災害直後における復旧・耕作の
痕跡は、僅かに認められる程度である。恐らくは、河
川流域や比較的復旧・再開発が容易な地域、高い生産性
が見込まれる地域が優先され、遺跡地は復旧優先度が低
かったものと推察される。

〔近世〕江戸時代の後期、天明三(1783)年7月8日に起
こった「浅間焼け」と称される浅間山の噴火は、大量の
火山灰と軽石(As-A)を降らせ、火砕流・土石流が山麓の
鎌原村を呑み込み、泥流となって吾妻川から利根川を流
下した。泥流は利根川と江戸川に分かれ、太平洋岸の鏡
子・行徳の海にまで達したとされる。この災害における
被災者の数は、天明四年に信州善光寺で行われた供養の
為の施餓鬼で上げられた経木が1,490枚であったことか
ら、実際にはこれを超える被災者数であったと推察され
る。上武士・堀北遺跡からは、噴火による災害の実態は
発見されていないものの、現地表下40cmほどの所で、降
下した軽石(As-A)の堆積が確認された。この火山灰は空
を覆い、広く田畑を埋め尽くし、農作物に莫大な損失を
与え、数年続く大飢饉の要因となった。江戸時代の初め
頃より、新田の開発やこれに伴う用水路の整備が盛んに行
われたが、上武士村では耕地7町1反のすべてが高地
であり、周辺も8割方が高地であった。数少ない水田域
も、度重なる旱魃と水不足から、水争いや水出入りが絶
えない状況であったと記されている。

〔現代〕昭和20(1945)年8月14日深夜、終戦を翌日に
控えた太平洋戦争末期にアメリカ軍による空襲が行われ、
伊勢崎上空に飛来したB29爆撃機86機から焼夷弾
614.1tと爆弾27発が投下され、その被害は消失家屋1,943
戸・死者29名・重軽傷者150名にも及んだ。Ⅳ区の表土
掘削中に出土した3発のM69型焼夷弾は、火災に弱い日

本の一般家庭の木造家屋用に特化し開発されたもので
あった。本来は、家屋の瓦屋根を貫通して建物内に入っ
た後に、遅延信管が爆発して内容物が発火・炎上するも
のが、屋外に落下し、その土壌が柔らかかったために地
表下まで突き刺さったものと推察される。

焼夷弾は、陸上自衛隊朝霞駐屯地 東部方面後方支援
隊第102不発弾処理隊(102E0D)の手で処理が行われた。

報告書抄録

書名ふりがな	かみたけし・ほりきたいせき
書名	上武士・堀北遺跡
副書名	(主)伊勢崎深谷線(東毛広幹道【境工区】)社会資本総合整備(地域住宅支援)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第562集
編著者名	桜岡正信/新倉明彦
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20130318
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北碓町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	かみたけし・ほりきたいせき
遺跡名	上武士・堀北遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんいせきさきしざかいかみたけしまちない
遺跡所在地	群馬県伊勢崎市境上武士町地内
市町村コード	10204
遺跡番号	SA083
北緯(日本測地系)	36° 16' 56.7"
東経(日本測地系)	139° 14' 21.7"
北緯(世界測地系)	36° 17' 8"
東経(世界測地系)	139° 14' 10.2"
調査期間	20101001-20101231/20120601-20120630
調査面積	4,359㎡ / 1,339㎡
調査原因	道路建設
種別	集落/包蔵地
主な時代	縄文/古墳/奈良/平安/中世
遺跡概要	縄文時代-住居3軒-土坑11基-縄文土器191点+縄文時代の石器59点/古墳時代-墳墓2/平安時代-住居1軒-竪穴状遺構3基-掘立柱建物1棟-井戸1基-土坑16基-ピット5基-溝23条-水田1+土師器・須恵器5点+石製品3点
特記事項	「九」・「犬甘」・「人麻呂」・「大中原」などの線刻文字がある石製紡錘車(紡輪)が出土する。

写真図版



調査区全景 西より



調査区周辺 南東より



調査区周辺 南より



調査区周辺 南より



I区全景 東より



I区全景 東より



Ⅰ区全景 北より



Ⅰ区全景 東より



I区全景 東より



I区全景 南東より



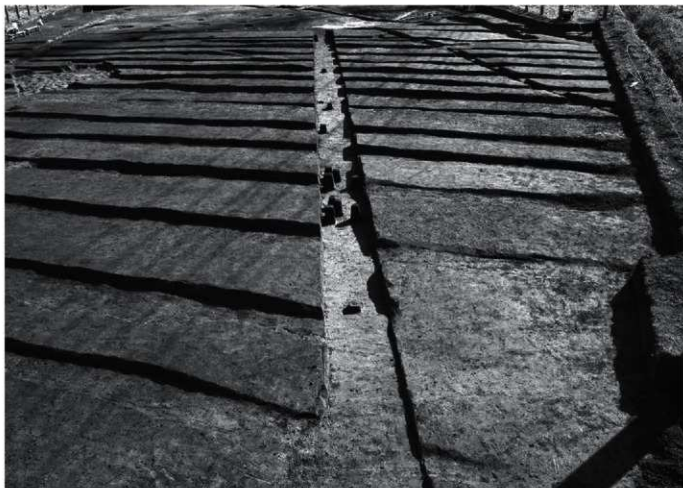
I区縄文面調査風景 南より



I区縄文面調査風景 西より



I区縄文面全景 東より



I区縄文面トレンチ全景 西より



1区縄文面トレンチ(確認) 西より



1区1号住居全景 南西より



I区1号住居跡全景 西より



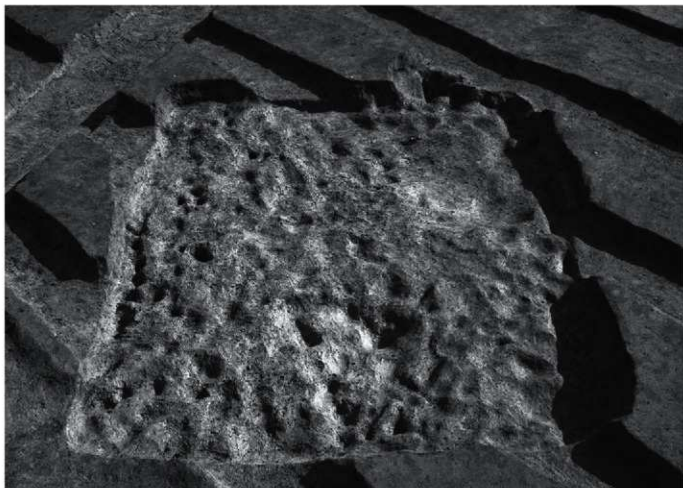
I区1号住居跡掘り方全景 南西より



I区1号住居貯蔵穴 南東より



I区1号住居貯蔵穴A-A'断面 南西より



I区1号住居掘り方全景 南西より



1区2号住居全景 西より



1区2号住居炉内埋糞1 検出状況 東より



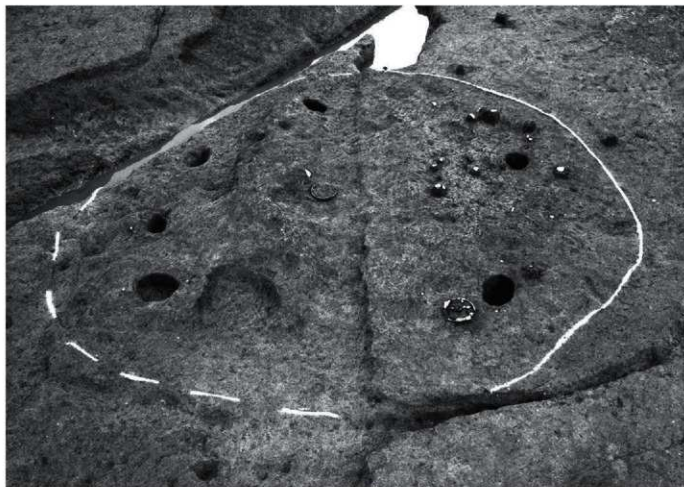
1区2号住居炉内埋糞1 出土状態 東より



1区2号住居炉内埋糞1 出土状態 東より



1区2号住居炉掘り方全景 西より



1区2号住居遺物出土状態 西より



1区2号住居埋裏2出土状態 東より



1区2号住居埋裏2出土状態 北より



1区2号住居埋裏2出土状態断面 東より



1区2号住居掘り方全景 西より



1区3号住居全景 西より



1区3号住居遺物出土状態 西より



I区3号住居埋裏炉検出状況 東より



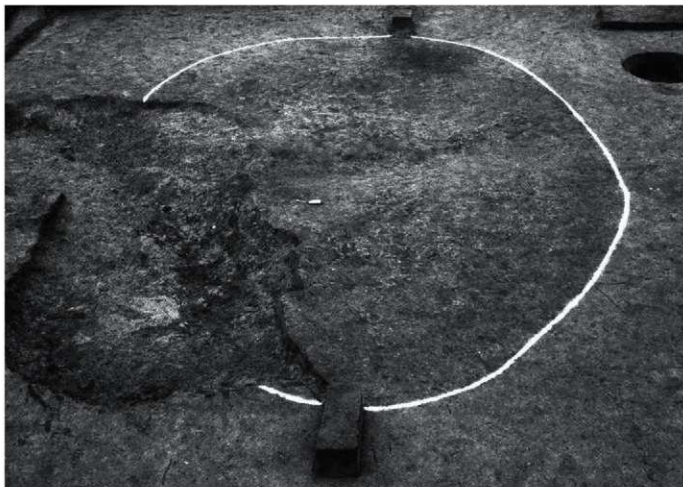
I区3号住居埋裏炉出土状態 東より



I区3号住居炉掘り方全景 東より



I区3号住居ピット5遺物出土状態 東より



I区4号住居使用面全景 南より



1区4号住居全景 南より



1区4号住居遺物出土状態 南より



1区4号住居が掘り方全景 東より



1区4号住居埋喪が検出状況 東より



1区4号住居埋喪が出土状態 東より



Ⅲ区1号竪穴状遺構全景 南西より



Ⅲ区1号竪穴状遺構全景 南西より



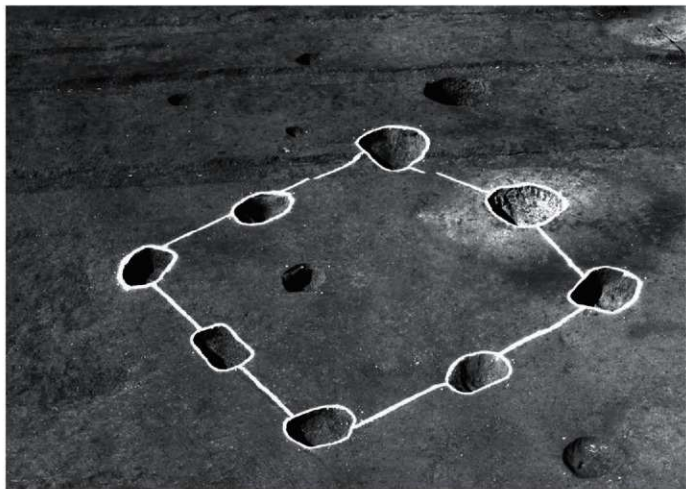
Ⅲ区1号竪穴内1号ピットA-A'断面 西より



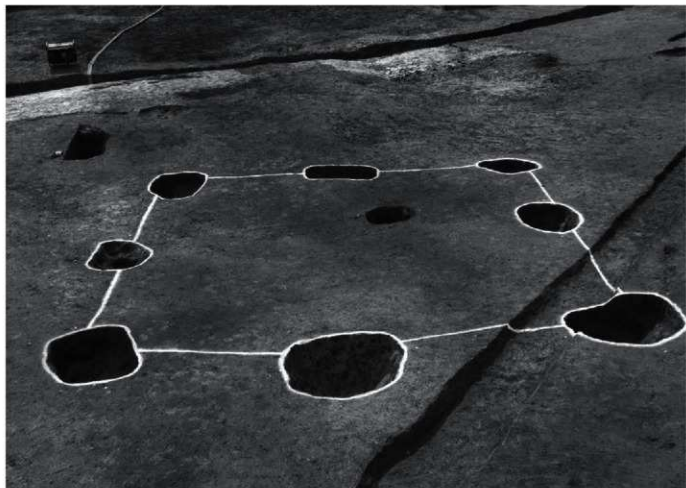
Ⅲ区1号竪穴内2号ピットA-A'断面 南より



Ⅲ区1号竪穴内3号ピットA-A'断面 西より



1区1号掘立柱建物全景 南東より



1区1号掘立柱建物全景 北より



1区1号土坑全景 南より



1区2号土坑全景 西より



1区3号土坑全景 西より



1区4号土坑全景 西より



1区5号土坑全景 南より



1区6号土坑全景 西より



1区7号土坑全景 南西より



1区8号土坑全景 南より



1区8号土坑遺物出土状態 北より



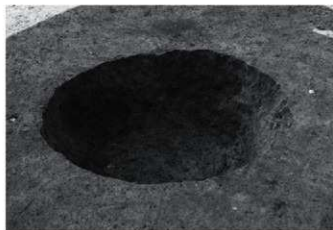
1区10号土坑全景 南より



1区11号土坑遺物出土状態 北東より



1区11号土坑掘り方全景 北東より



1区12号土坑全景 北東より



1区1号井戸全景 北より



1区1号井戸壁堆積状況 北より



Ⅲ区1号土坑全景 東南より



Ⅲ区1号土坑遺物出土状態 東南より



Ⅲ区1号土坑A-A'断面 南より



Ⅲ区1・2・4・5号土坑全景 南西より



Ⅲ区2号土坑A-A'断面 南より



Ⅲ区3号土坑全景 北より



Ⅲ区6号土坑全景 南より



Ⅲ区6号土坑A-A'断面 南より



IV区1号土坑全景・A-A'断面 東より



IV区2号土坑全景 南東より



IV区3号土坑全景 南より



IV区4号土坑全景・A-A'断面 東より



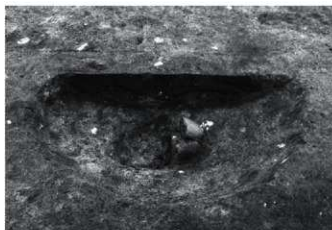
IV区5号土坑全景 南より



IV区5号土坑A-A'断面 北より



IV区6号土坑全景 東より



IV区6号土坑A-A'断面 南より



IV区7号土坑全景 南より



IV区8号土坑全景 北西より



IV区8号土坑遺物出土状態 北西より



IV区1号ピットA-A'断面 南より



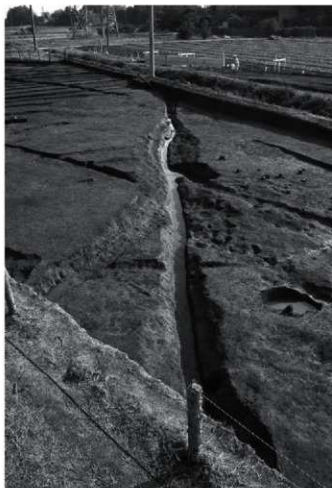
IV区1・2号ピット全景 東北より



1区1号溝全景 南西より



1区2号溝全景 西より



1区3・4号溝全景 北より



1区5号溝全景 北より



I区7・8号溝全景 北より



I区9号溝全景 北より



II区全景 北より



Ⅱ区全景 北より



Ⅱ区全景 東より



Ⅱ区1～3号溝全景 南東より



Ⅱ区紡錘車出土状態 南東より



Ⅱ区紡錘車出土状態 南東より



Ⅲ区全景 北西より



Ⅲ区全景 南東より



皿区1・2号溝全景 北東より



Ⅲ区1号溝全景 北東より



Ⅲ区2号溝全景 北東より



Ⅲ区1号溝A-A'断面 南西より



Ⅲ区2号溝A-A'断面 南西より



Ⅲ区1号溝B-B'断面 南西より



Ⅲ区2号溝B-B'断面 南西より



Ⅲ区3・4号溝全景 北西より



Ⅲ区3・4号溝全景 北西より



Ⅲ区3号溝 B-B'断面 東南より



Ⅲ区4号溝 A-A'断面 南東より



Ⅲ区6号溝全景 東より



Ⅲ区5号溝全景 南東より



Ⅲ区5号溝全景 南東より



Ⅲ区6号溝 A-A'断面 北東より



IV区不発弾処理状況 北西より



IV区全景 東より



IV区1・2号溝全景 南より



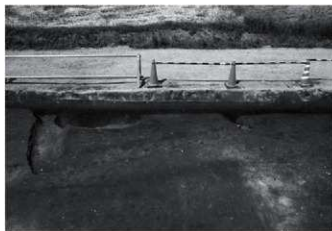
IV区1・2号溝全景 北より



IV区3号溝全景 南西より



IV区3号溝全景 南西より



IV区4号溝全景 南より



IV区4号溝全景 西より



IV区4号溝A-A'断面 南より



Ⅲ区1・2号方形周溝調査区墓全景 北西より



Ⅲ区1・2号方形周溝墓全景 北西より



Ⅲ区1号方形周溝墓全景 東より



Ⅲ区1号方形周溝墓全景 北西より



Ⅲ区1号方形周溝墓全景 北西より



Ⅲ区1号方形周溝墓B-B'断面 北より



Ⅲ区2号方形周溝墓全景 南東より



Ⅲ区2号方形周溝墓全景 南東より



Ⅲ区2号方形周溝墓全景 北より



Ⅲ区2号方形周溝墓全景 南より



Ⅲ区2号方形周溝墓内1・2号土坑全景 西より



Ⅲ区2号方形周溝墓B-B'断面 南東より



Ⅲ区2号方形周溝墓C-C'断面 南西より



Ⅲ区2号方形周溝墓D-D'断面 南より



IV区洪水下水田全景 北より



IV区洪水下水田全景 南より



IV区洪水下水田全景 南より



IV区洪水下水田全景 南より

I区1号住居



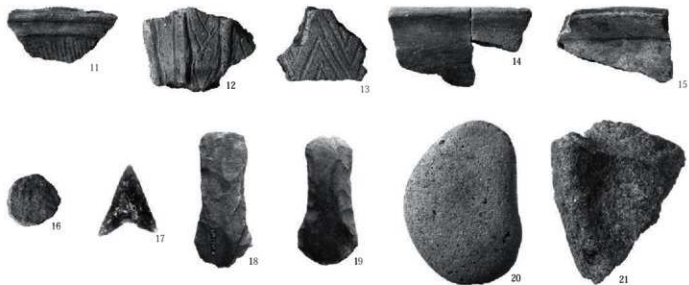
I区2号住居



I区3号住居



8



I区4号住居



I区1号土坑



I区7号土坑

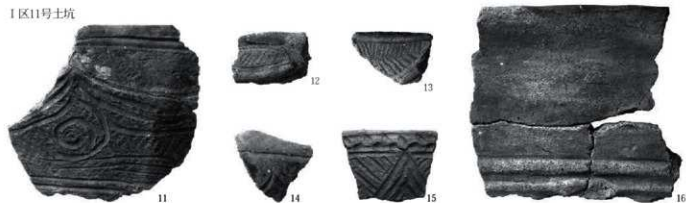


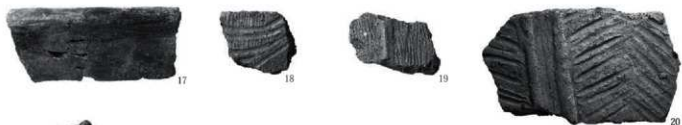
I区8号土坑



I区10号土坑

I区11号土坑





I区12号土坑



III区1号土坑



III区6号土坑



IV区2号土坑



IV区8号土坑



IV区6号土坑



II区2号沟

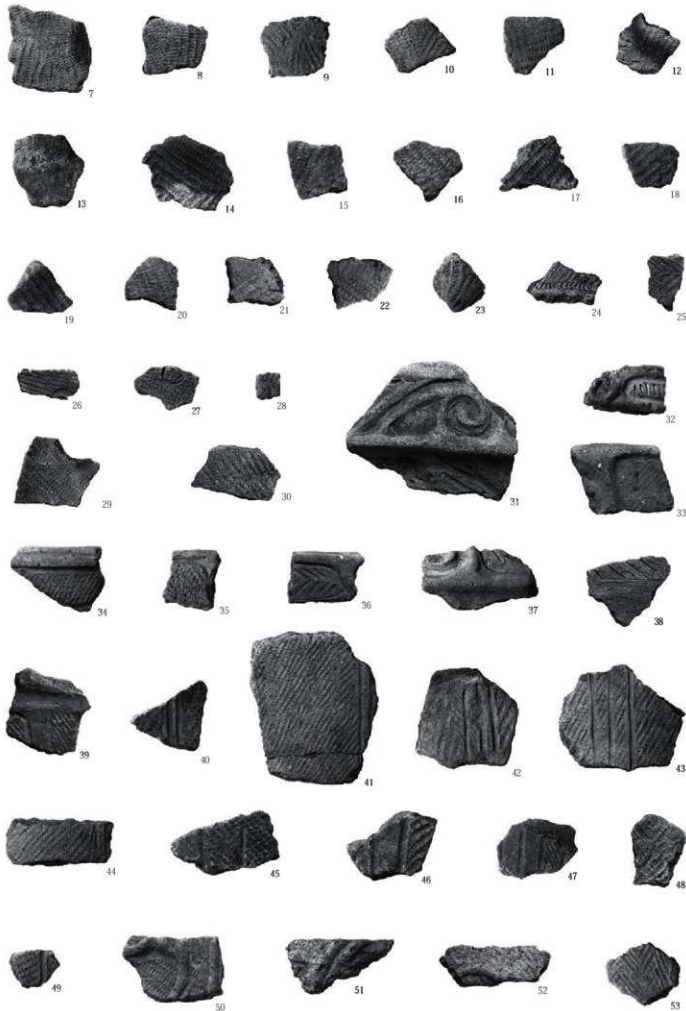


III区2号方形圆满墓



I区道槽外出土遗物









92



93



94



95



96



97



98



99



100



101



102



103



104



105



106



107



108



109



110



111



112



113



114



115



116



117



118



119

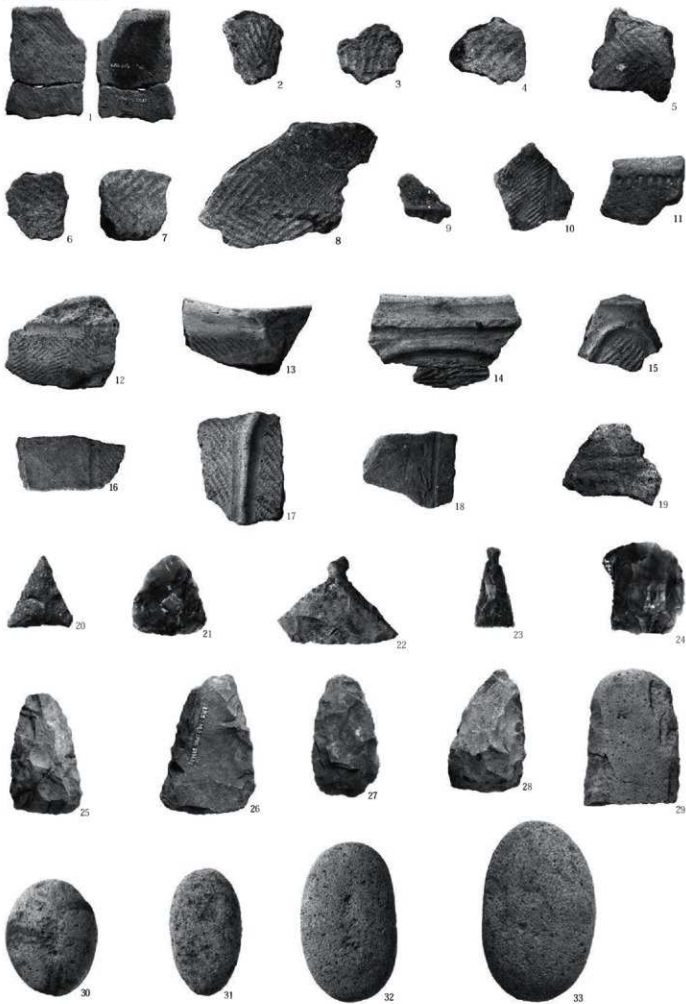


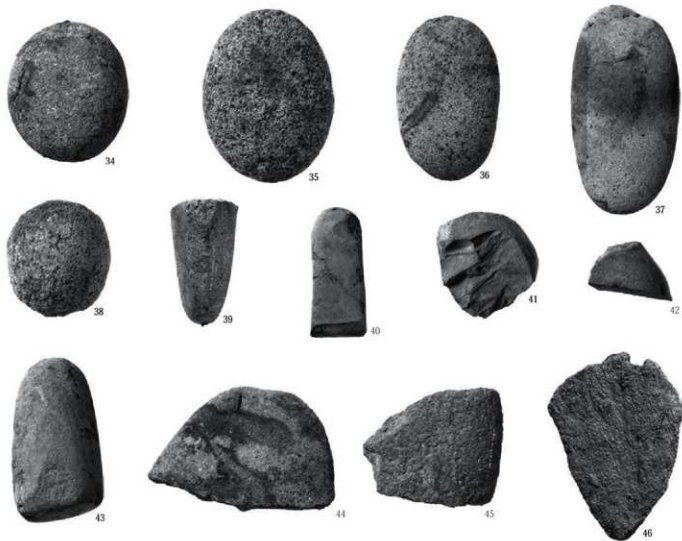
120



121

II区道槽外出土遗物





Ⅲ区道槽外出土遗物



Ⅳ区道槽外出土遗物



公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第562集

上 武 士 ・ 堀 北 遺 跡

主要地方道伊勢崎深谷線(東毛広幹道【境工区】)社会資本総合整備
(地域住宅支援)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成25(2013)年3月10日 印刷

平成25(2013)年3月18日 発行

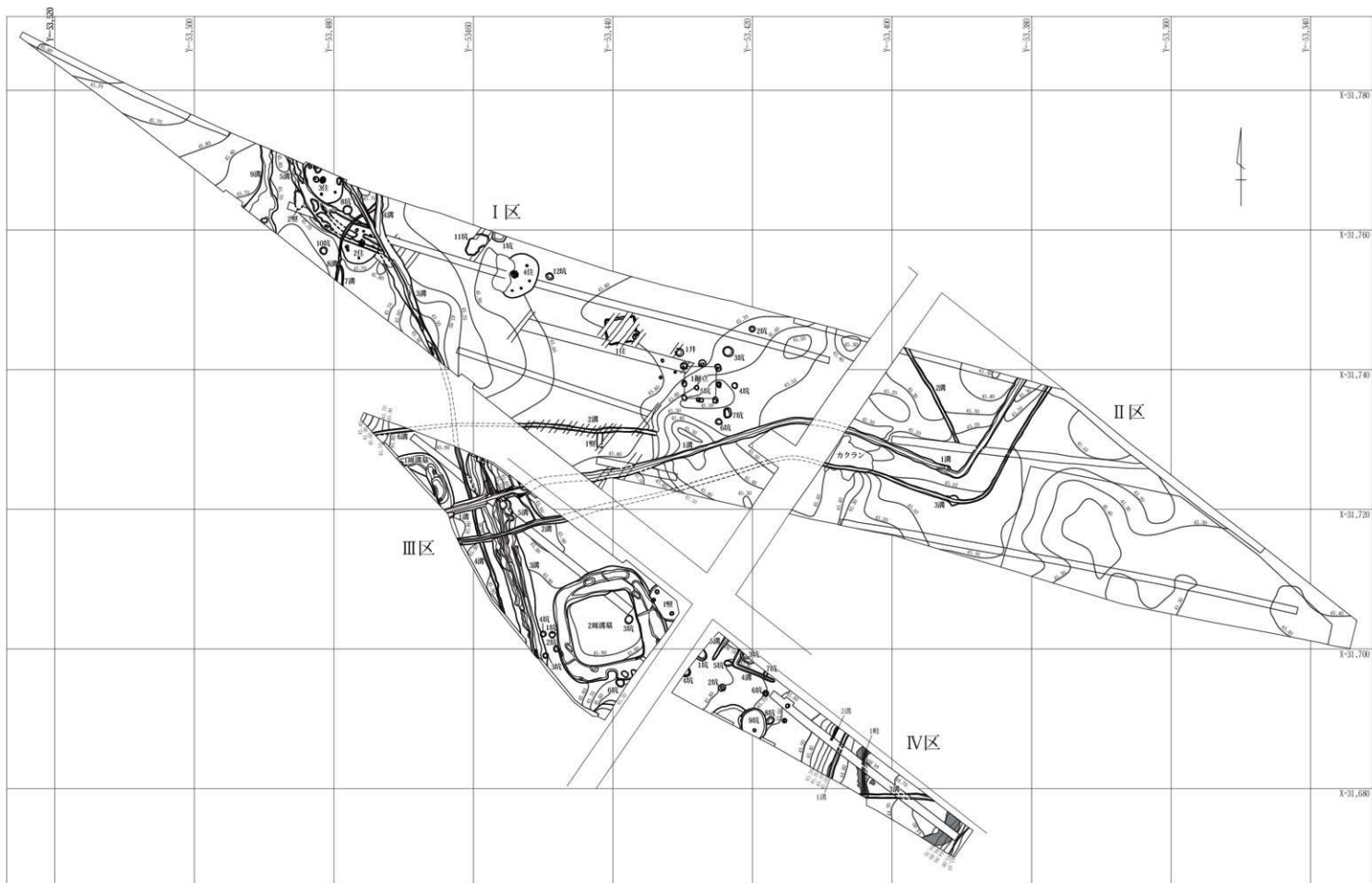
編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／株式会社間文社印刷所



付図 上武士・堀北遺跡全体図（1：500）